

年

報

平成二十三年度

年 報

平成23年度



平成24年 5 月

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

公益財団法人
山形県埋蔵文化財センター



ISSN 1341-397X

年 報

平成23年度

2012年5月24日 発行

発 行 公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161

山形県上山市弁天二丁目15番1号

☎023-672-5301(代)

印 刷 (株)大 風 印 刷



序

平成23年度における当センターの事業計画については、関係機関の御支援・御協力をいただきながら、取り組みをすすめてきた結果、計画した事業のすべてについて円滑に実施することができました。その概要について申し上げますと、はじめに、調査事業においては、12遺跡の発掘調査と報告書作成のため整理作業を実施し、11冊の発掘調査報告書を刊行いたしました。

本県における近年の発掘調査の傾向は、県公共事業の減少は引き続き見られ、国による新直轄事業の高速交通網整備に伴う事業もピークをむかえたことから、今後予想される高速道路の県境部分の整備や県の公共事業等の事業量を的確に把握しつつ、調査体制の整備に努めていかなければなりません。また、私どもの重要な施策である埋蔵文化財保護の重要性の周知や、埋蔵文化財を通して古代の人との心の交流の場を県民の皆さんに提供する事業については、引き続き県民の皆さんの目線に留意しながら、責任ある発掘調査を基本とした調査研究に取り組んでまいります。

次に、普及啓発事業につきましては、ホームページでの情報発信や調査遺跡における発掘調査説明会の開催、広報誌「埋文やまがた」の刊行などを通して、埋蔵文化財の調査研究の成果を県民の皆さまにお知らせしてまいりました。

特に今年度は、普及啓発事業実行委員を立ち上げ、さまざまな普及啓発事業を計画、実施してまいりました。中でも、遺跡発掘体験、遺跡見学、体験講座と3回にわたり開催した「ふるさと考古学講座」では、考古学の面白さや古代人の知恵や工夫に触れる機会をもつことができ、多数の参加者の方々から満足いく内容であったという声を頂くことができました。平成20年度から開催している「山形県埋蔵文化財センター参観デー」は、内容を充実しながら、企画展示、センターの業務内容の紹介、勾玉作り、整理作業などの考古学体験を実施したところ多くの来場者がありました。

また、山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館・鶴岡市立図書館との共同展示や、村山総合支庁・山形空港ビル・庄内空港ビル・山形県障がい者保養所東紅苑での「出前展示」を行い、県民の皆さんに出土品を公開し、当センターの事業への理解や文化財保護の重要性について広く普及を図ったところです。

さらに、学校現場からの依頼を受けた「出前授業」は27校で実施したほか、職員を派遣しての講演や調査研究発表等を実施してまいりました。

最後に、平成24年4月1日より「公益財団法人山形県埋蔵文化財センター」として新たなスタートをきることとなりますが、「公益」という言葉の重みを職員一人ひとりが胸に刻み、次世代を担う子供達を中心に、地域の伝統文化の大切さや、誇りと自信の持てる地域づくりの一環として、さまざまな機会を活用して、県民共有の文化遺産としての価値ある埋蔵文化財を後世に伝えていくため、職員一同、一層研鑽を重ねていく所存であります。

平成24年3月31日

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 相馬 周一郎

目次

I. 管理運営概要

1. 沿革	4
2. 組織	
(1) 役員及び評議員	4
(2) 職制及び人員	5
(3) 組織	5
(4) 職員	6
3. 施設	7
4. 公益財団法人移行について	8

II. 事業概要

1. 調査業務	9
(1) 調査遺跡一覧	10
(2) 調査遺跡の概要	
山形城三の丸跡第8次	12
押出遺跡第4次	16
山形城三の丸跡第9次	20
沼袋遺跡	24
八反遺跡	28
田向遺跡第2次	32
清水遺跡1地区第2次	33
清水遺跡2地区第2次	35
清水遺跡3地区	39
清水遺跡4地区第2次	43
北原2遺跡第2次	44
森の原遺跡第2次	45
今宿大谷地遺跡	46
稲荷山遺跡第3次	47
木の下館跡第4次	48
出張坂城跡第2次	49
2. 普及・啓発・研究等業務	
(1) 研修等	
①全国埋蔵文化財法人連絡協議会事業への派遣	51
②埋蔵文化財担当者専門研修への派遣	51
(2) 普及啓発	
①普及啓発事業実行委員	51
②センター公開事業	52
③ふるさと考古学講座	53
④研修講座	53

I 管理運営概要

1. 沿革

山形県には、土地に埋蔵された埋蔵文化財や史跡、有形文化財、民俗文化財などが数多く残されています。これらの文化財は、長い歴史の中で生まれ、育まれ、そして今日まで守り伝えられてきた貴重な県民の文化遺産であり、これを保護・活用し、次世代に確実に継承していくことが大事です。

平成16年に策定された第5次山形県教育振興計画では、「いのち」、「まなび」、「かかわり」の三つがキーワードとなっています。埋蔵文化財については、広い「かかわり」の中で、社会をつくるという基本方針のもと、「感性あふれる地域文化の創造」という視点から、保護と活用にあたることとされています。

平成5年4月に、埋蔵文化財の保護と県土の開発を両立させて調和を図るため、山形県の出資によって「財団法人山形県埋蔵文化財センター」が設立されました。当センターでは、埋蔵文化財の調査研究を通じて、県民の文化生活の向上と地域文化の振興に寄与することを目的として、

1. 県内遺跡等埋蔵文化財の調査研究
2. 埋蔵文化財の発掘調査
3. 埋蔵文化財の活用と保護思想の普及

の三つを基本とした各種事業を推進しております。

近年は埋蔵文化財の教育的価値を認識してもらう視点に立って、主に「発掘調査報告会」や「ホームページによる情報提供」、「出前授業」、「外部展示」などの普及啓発活動についても力を注いでおります。

2. 組織

(1) 役員及び評議員

役員

理事長	相馬周一郎	山形県教育委員会教育長（平成21年3月22日就任）
専務理事	柏倉 俊夫	財団常勤役員
理事	佐藤 鎮雄	山形県うきたむ風土記の丘考古資料館長
理事	大沼 幸一	財団法人山形県生涯学習文化財団専務理事
理事	今 晴夫	やまがたスポーツパーク株式会社常務執行役
理事	佐藤 禎広	山形考古学会長
理事	石川 由美	山形県教育庁文化財保護推進課長
監事	椰野 哲郎	税理士
監事	伊藤 丈志	山形県教育庁総務課長

評議員	長澤 正機	最上地域史研究会理事
評議員	木村 俊夫	財団法人山形県生涯学習文化財団専務理事
評議員	鈴木 啓司	社団法人山形県私立学校総連合会常務理事
評議員	小野 忍	酒田市文化財保護推進員
評議員	角屋由美子	財団法人米沢上杉文化振興財団学芸主査
評議員	渡邊 正弘	山形県農林水産部農村整備課農山村整備主幹
評議員	多田 公也	山形県県土整備部道路課長

(2) 職制及び人員

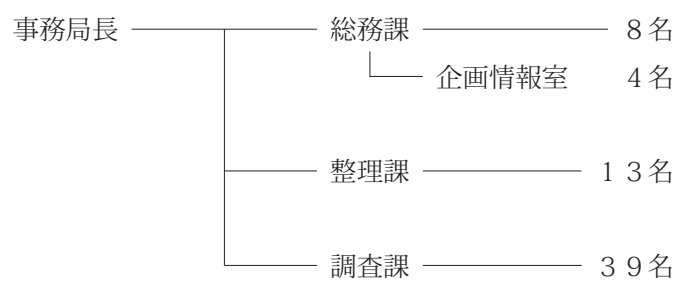
事務局長	1名
課長	2名
考古主幹	2名
課長補佐	1名
係長	2名
専門調査研究員	3名
主任調査研究員	6名
調査研究員	16名
調査員	19名
事務員	4名
専門員	1名
計57名	

(3) 組織

役員（理事会）

専務理事（常勤）—— 理事長（非常勤）

職員（事務局）



(4) 職員

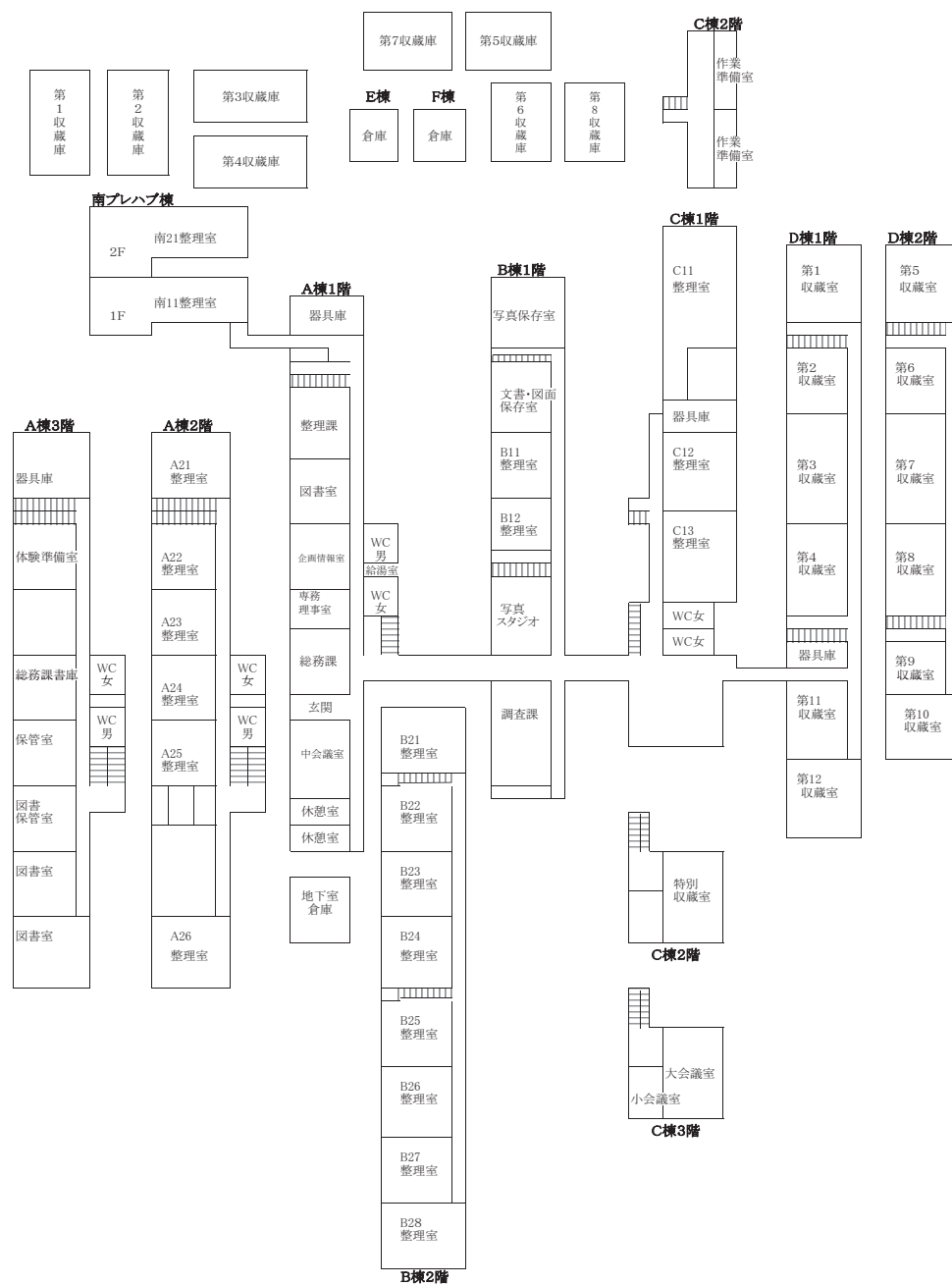
課名	職名	氏名	所屬
総務課	事務局長	小笠原正道	
	課長補佐	須賀井新人	財団職員
	総務係長	高桑 弘美	財団職員
	施設管理専門員	佐藤 恒	
	事務員	井上 紀子	
	事務員	吉野 章子	
	事務員	飯野 浩美	
	事務員	西村 直子	
整理課	課長	齊藤 敏行	
	考古主幹	黒坂 雅人	財団職員
	専門調査研究員	齊藤 主税	財団職員
	専門調査研究員	小林 圭一	財団職員
	主任調査研究員	植松 暁彦	財団職員
	主任調査研究員	菅原 哲文	財団職員
	調査研究員	水戸部秀樹	財団職員
	調査研究員	今 正幸	県教育職派遣
	調査研究員	江波 大	県教育職派遣
	調査員	伊藤 純子	
	調査員	山木 巧	
	調査員	松田 聡子	
	調査員	安部 将平	
調査課	課長	安部 実	県行政職派遣
	考古主幹	伊藤 邦弘	財団職員
	専門調査研究員	氏家 信行	財団職員
	企画調整係長	原田 英明	財団職員
	主任調査研究員	齋藤 健	財団職員
	主任調査研究員	高桑 登	財団職員
	主任調査研究員	高橋 敏	県教育職派遣
	主任調査研究員	福岡 和彦	県教育職派遣
	調査研究員	大場 正善	財団職員
	調査研究員	菊池 玄輝	財団職員
	調査研究員	草野 潤平	財団職員
	調査研究員	天本 昌希	財団職員
	調査研究員	渡辺 和行	財団職員
	調査研究員	川崎 康永	県教育職派遣
	調査研究員	小笠原伊之	県教育職派遣
	調査研究員	庄司 昭一	県教育職派遣
	調査研究員	向田 明夫	県教育職派遣
	調査研究員	小野 健二	県教育職派遣
	調査研究員	長谷部 寛	県教育職派遣
	調査研究員	伊藤 大介	県教育職派遣
	調査研究員	尾形 知哉	県教育職派遣
	調査員	吉田 満	
	調査員	高木 茜	
	調査員	渡部 裕司	
	調査員	五十嵐 萌	
	調査員	濱田 純	
	調査員	後藤枝里子	
	調査員	山田めぐみ	
	調査員	佐藤 智幸	
	調査員	岩崎 恒平	
	調査員	濱松 優介	
	調査員	高柳 俊輔	
調査員	山田 和史		
調査員	渡邊 安奈		
調査員	板橋 龍		
調査員	齋藤 和機		

3. 施設

財団法人山形県埋蔵文化財センターは、山形県上山市弁天二丁目15番1号に所在する。

当所の施設は、A棟からF棟までの建物からなる。

A	棟	鉄筋コンクリート3階建	管理棟（専務理事室、総務課、企画情報室・整理課ほか）
B	棟	鉄骨2階建	整理棟（調査課・整理室ほか）
C	棟	鉄筋コンクリート3階建	出土文化財収蔵棟
		鉄骨2階建、鉄骨1階建	整理棟
D	棟	鉄骨2階建	出土文化財収蔵棟
E・F	棟	鉄骨平屋建	器材棟（倉庫）
南プレハブ棟		2階建	整理棟
プレハブ棟		平屋建	出土文化財収蔵棟（第1～第8）8棟



4. 公益財団法人移行について

公益法人制度改革についての財団法人山形県埋蔵文化財センターの対応については、平成21(2009)年1月に設置した「財団法人山形県埋蔵文化財センターの今後のあり方に関する検討会」において、山形県と当センター職員により検討が重ねられた。その結果を基に、平成22(2010)年3月24日の理事会・評議員会において、公益財団法人認定を目指す方向性が示され、同年5月25日の理事会・評議員会で、公益財団法人への移行に向けて手続きを開始することが決定された。

平成22年度は、先に公益認定された徳島県埋蔵文化財センターへの調査を皮切りに、所管課である山形県教育庁文化財保護推進課との個別相談を繰り返しながら、最初の評議員の選任方法の認可手続きと定款の変更の案をはじめとする提出書類作成の下準備を行った。その中で、平成23(2011)年1月4日に公益認定申請プロジェクトチームが設置され、組織班、事業班、財務班の3班体制で提出書類の具体的な準備にとりかかった。

平成23年度は、文化財保護推進課と個別相談を重ね、提出書類の内容について検討を加えていった。その間、7月28日に、公益移行についてほぼ同程度の進捗状況である北海道埋蔵文化財センターとの意見交換、10月18日に最初の評議員の選任、10月28日の理事会・評議員会で移行手続きに必要な決議、承認、選任を行い、11月21日に電子申請を行った。申請後も公益認定等審議会に向けて文化財保護推進課と協議を重ね、平成24(2012)年1月16日の公益認定等審議会において山形県知事に対して公益認定基準適合の答申がなされた。

現在、平成24年4月1日の現財団法人の解散及び公益財団法人の設立登記申請に向けて準備を行っている。公益財団法人移行手続きの主な経過について下表に示した。

表 公益財団法人移行手続きの経過

年月日	手続き等	決定事項等
平成22年3月24日	理事会・評議員会	公益財団法人への移行についての検討報告
平成22年5月25日	理事会・評議員会	公益財団法人への移行について決定
平成22年6月15日	財団	公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター調査
平成22年10月18日	理事会・評議員会	最初の評議員の選任方法の案の承認 新制度に適合する定款の変更の案の提示
平成22年11月1日	財団→県教委	最初の評議員の選任方法の認可申請
平成22年11月15日	県教委→財団	最初の評議員の選任方法の認可
平成23年1月4日	財団	公益認定申請プロジェクトチーム設置
平成23年3月23日	理事会・評議員会	評議員選定委員会の運営規則及び選定委員を選任
平成23年7月28日	財団	財団法人北海道埋蔵文化財センター調査
平成23年10月5日	理事会・評議員会	評議員候補者の推薦
平成23年10月18日	評議員選定委員会	最初の評議員を選任
平成23年10月28日	理事会・評議員会	定款の変更の案について決議 移行認定申請書及び関係書類について承認 最初の代表理事就任予定者を選任
平成23年11月21日	財団→山形県	電子申請
平成24年1月16日	公益認定等審議会→県知事	公益認定基準適合の答申
平成24年3月21日	県知事→財団	移行認定書を受理
平成24年3月22日	理事会・評議員会	事業計画・予算・移行の報告
平成24年4月1日	財団→山形地方法務局	解散及び設立登記申請

II 事業概要

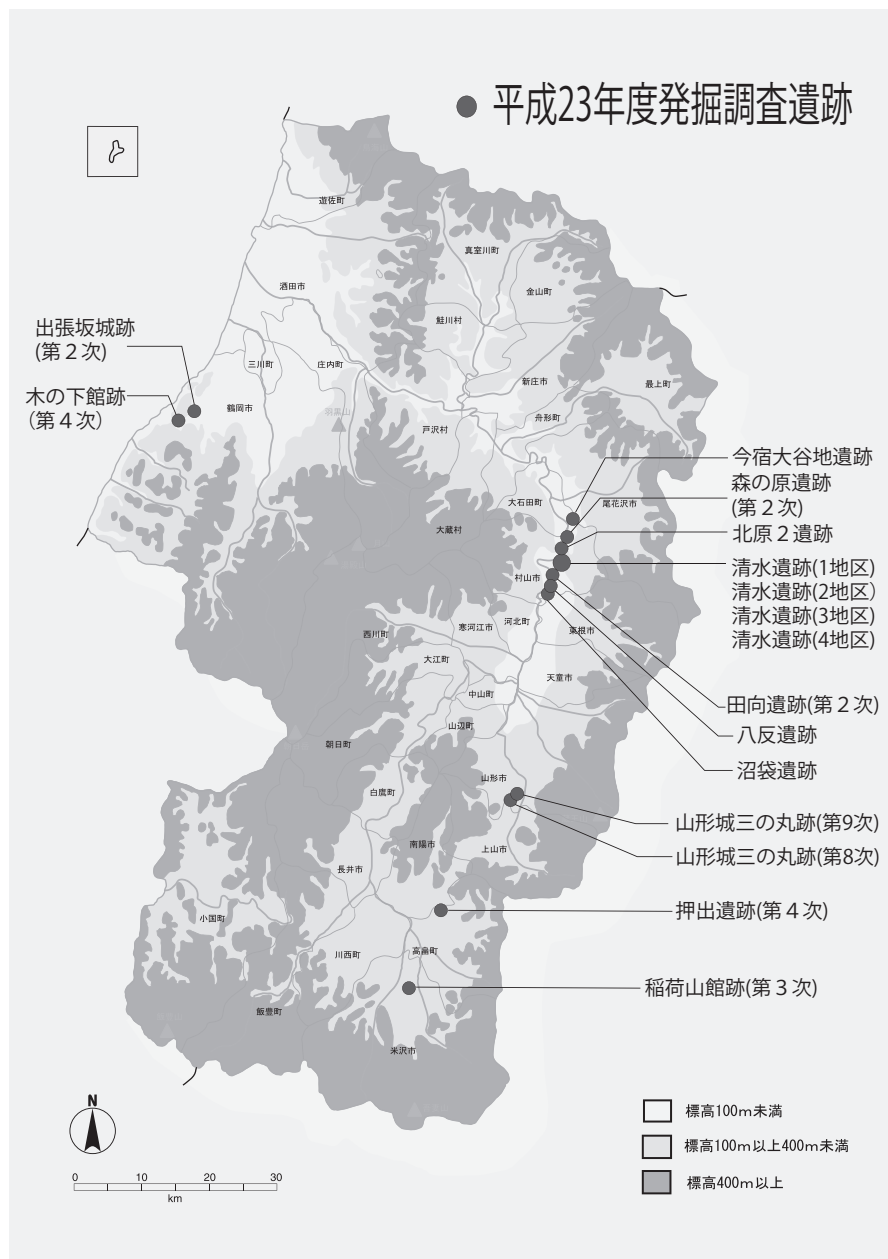
1. 調査業務

平成23年度は、国土交通省および山形県、村山市から委託を受け、道路建設などに先だつての発掘調査と整理作業を実施しました。

発掘調査は12遺跡について行い、調査面積は36,315㎡になります。出土品は土器等431箱が出土文化財の認定を受けました。

報告書作成のための整理作業は22遺跡について実施し、そのうち11冊の発掘調査報告書を刊行しました。

- 1 やまがたじょうさん まる
山形城三の丸跡(第8次)
- 2 おんだし
押出遺跡
- 3 やまがたじょうさん まる
山形城三の丸跡(第9次)
- 4 むまぶくろ
沼袋遺跡
- 5 はったん
八反遺跡
- 6 たむかい
田向遺跡
- 7 しづ
清水遺跡(1地区)
- 8 しづ
清水遺跡(2地区)
- 9 しづ
清水遺跡(3地区)
- 10 しづ
清水遺跡(4地区)
- 11 きたはら
北原2遺跡
- 12 もり はら
森の原遺跡
- 13 いまじゅくおお や ち
今宿大谷地遺跡
- 14 いなり やまたて
稲荷山館跡
- 15 き したたて
木の下館跡
- 16 てっばりざかじょう
出張坂城跡



※本書中の「調査遺跡の概要」の記述内容は概要の報告であり、発掘調査報告書の刊行をもって本報告となります。

(1) 調査遺跡一覧

NO.	遺跡名	所在地	主な時代	遺跡の種別	調査期間
1	山形城三の丸跡（第8次）	山形市	中世・近世	城館跡	4月18日～7月14日
2	押出遺跡（第4次）	高島町	縄文	集落跡	10月3日～11月18日
3	山形城三の丸跡（第9次）	山形市	奈良・平安・中世・近世	城館跡	5月9日～8月4日
4	沼袋遺跡	東根市	平安・中世	集落跡	5月17日～11月17日
5	八反遺跡	東根市	平安・中世	集落跡・墓跡	5月17日～11月30日
6	田向遺跡（第2次）	村山市	奈良・平安	集落跡	5月16日～6月13日
7	清水遺跡（1地区・第2次）	村山市	縄文・中世	集落跡	5月16日～10月27日
	清水遺跡（2地区・第2次）	村山市	縄文・平安	集落跡	5月9日～11月11日
	清水遺跡（3地区）	村山市	縄文・平安	集落跡	5月9日～12月2日
	清水遺跡（4地区・第2次）	村山市	縄文・平安	集落跡	7月20日～9月9日
8	北原2遺跡（第2次）	村山市	縄文・平安	集落跡	5月9日～6月30日
9	森の原遺跡（第2次）	村山市	縄文・平安	集落跡	5月17日～9月30日
10	今宿大谷地遺跡	大石田町	縄文	集落跡	10月18日～11月17日
11	稲荷山館跡（第3次）	米沢市	中世	城館跡	8月25日～9月22日
12	木の下館跡（第4次）	鶴岡市	中世	城館跡	9月20日～11月25日
13	出張坂城跡（第2次）	鶴岡市	中世・近世	城館跡	5月9日～6月17日
14	高瀬山遺跡HO3期	寒河江市	縄文・古墳・奈良・平安	集落跡	
15	鎌倉上遺跡（第2次）	米沢市	古墳	集落跡	
16	堤屋敷遺跡（第2次）	米沢市	縄文・平安・中世・近世	集落跡	
17	下屋敷遺跡	米沢市	縄文・中世	集落跡	
18	西谷地b遺跡（第1・2次）	米沢市	奈良・平安・中世	集落跡	
19	北原4遺跡	村山市	縄文・平安	集落跡	
20	川前2遺跡（第3・4次）	山形市	古墳～平安	集落跡	
21	行司免遺跡（第1-4次）	鶴岡市	奈良・平安	集落跡	
22	矢馳A遺跡（第2-4次）	鶴岡市	古墳～中世	集落跡	
23	川内袋遺跡	鶴岡市	縄文	集落跡	
24	作野遺跡（第3次）	村山市	縄文	集落跡	
	計				

調査面積 ：平方m	文化財認 定数：箱	起回事業〈委託者〉	業務内容			調査経費 ：千円
			発掘	整理	報告書	
550	29	街路整備事業3・4・25号東原村木沢線(春日町)〈県土整備部〉	○	○	○	42,987
665	170	国営かんがい排水事業米沢平野二期農業水利事業〈農林水産省〉	○	○	—	26,973
500	19	一般国道112号霞城改良〈国土交通省〉	○	○	—	30,508
6,500	31	東北中央自動車道(東根～尾花沢)建設〈国土交通省〉	○	○	—	97,291
7,000	63	東北中央自動車道(東根～尾花沢)建設〈国土交通省〉	○	○	—	84,117
200	1	東北中央自動車道(東根～尾花沢)建設〈国土交通省〉	○	○	—	6,408
4,450	5	東北中央自動車道(東根～尾花沢)建設〈国土交通省〉	○	○	—	60,210
2,600	36	東北中央自動車道(東根～尾花沢)建設〈山形県〉	○	○	—	54,994
5,700	35	東北中央自動車道(東根～尾花沢)建設〈国土交通省〉	○	○	—	52,072
1,200	1	東北中央自動車道(東根～尾花沢)建設〈国土交通省〉	○	○	—	13,554
1,050	10	東北中央自動車道(東根～尾花沢)建設〈国土交通省〉	○	○	—	17,039
3,650	8	東北中央自動車道(東根～尾花沢)建設〈国土交通省〉	○	○	—	41,815
450	6	東北中央自動車道(東根～尾花沢)建設〈国土交通省〉	○	○	—	11,019
450	6	国道13号米沢拡幅〈国土交通省〉	○	○	—	8,970
750	1	日本海沿岸東北自動車道(温海～鶴岡)建設〈国土交通省〉	○	○	○	28,887
600	10	日本海沿岸東北自動車道(温海～鶴岡)建設〈国土交通省〉	○	○	○	17,689
		最上川ふるさと総合公園整備〈山形県県土整備部〉	—	○	○	35,742
		一般国道287号米沢北バイパス〈山形県県土整備部〉	—	○	○	23,751
		東北中央自動車道(福島～米沢)建設〈国土交通省〉	—	○	○	9,034
		東北中央自動車道(福島～米沢)建設〈国土交通省〉	—	○	—	—
		東北中央自動車道(米沢～米沢北)建設〈国土交通省〉	—	○	—	35,411
		東北中央自動車道(東根～尾花沢)建設〈国土交通省〉	—	○	—	5,086
		須川河川改修事業(下流部)〈国土交通省〉	—	○	○	31,368
		日本海沿岸東北自動車道(温海～鶴岡)建設〈国土交通省〉	—	○	○	9,664
		日本海沿岸東北自動車道(温海～鶴岡)建設〈国土交通省〉	—	○	○	18,792
		日本海沿岸東北自動車道(温海～鶴岡)建設〈国土交通省〉	—	○	○	21,417
		徳内・シーボルトライン道路改良事業(村山市)	—	○	○	14,973
36,315	431					799,771

(2) 調査遺跡の概要

やまがたじょうざん まる 山形城三の丸跡 (第8次)

遺跡番号	山形県中世城館遺跡調査報告書番号 201-002
調査回数	第8次
所在地	山形市春日町
北緯・東経	北緯 38度 15分 11秒・東経 140度 19分 10秒
調査委託者	山形県村山総合支庁建設部都市計画課
起因事業	街路整備事業 3・4・25号東原村木沢線(春日町)
調査面積	550 m ²
受託期間	平成23年4月1日～平成24年3月31日
現地調査	平成23年4月18日～7月14日
調査担当者	草野潤平(現場責任者)・吉田満・渡邊安奈
調査協力	山形市教育委員会・村山教育事務所
遺跡種別	城館跡
時代	近世・近現代
遺構	溝跡・土坑・ピット
遺物	土師器・須恵器・陶磁器・瓦・木製品・金属器 (文化財認定箱数：29箱)



図1 遺跡位置図 (1:50,000)

調査の概要

山形城三の丸跡は、霞城公園のある山形城跡(本丸・二の丸、国指定史跡)を取り囲む東西約1,600m、南北約1,800mの広大な城館跡である。文禄・慶長年間(1592～1615年)に最上氏11代当主の最上義光(もがみよしあき)が三重の堀を構えた城郭として整備したといわれている。

三の丸には11か所の出入口が設けられたとされており、西側の飯塚口付近では平成20・21年度に県道拡幅工事に伴う発掘調査(第5・7次調査)が行われた。今年度の第8次調査はこれに継続するもので、県道に面した約550m²の範囲を調査対象とした(図1)。調査区は、隣接する民家や営業所、商店、駐車場への進入路を確保する必要から5か所に分割して設定し、調査の完了した区画から逐次埋め戻しながら調査を進めた(図2)。

調査区南側には、県道の側溝設置に伴う攪乱が認められる。また調査地が民家・店舗の敷地であったため、重機による削平痕や上下水道管・ガス管等の埋設に伴う掘り込みなど、大小無数の攪乱が至るところで確認された。ただし、調査区の基本層序として、黒色シルト・粘土層(地山)のうえに堆積する砂質シルト層が観察でき、これが江戸時代前期の山形城改修に伴う整地層と考えられることから、旧地形を大きく改変するほどの土地改良はなされていないと判断された。

調査区地表面はおおむね平坦だが、遺構検出面では東

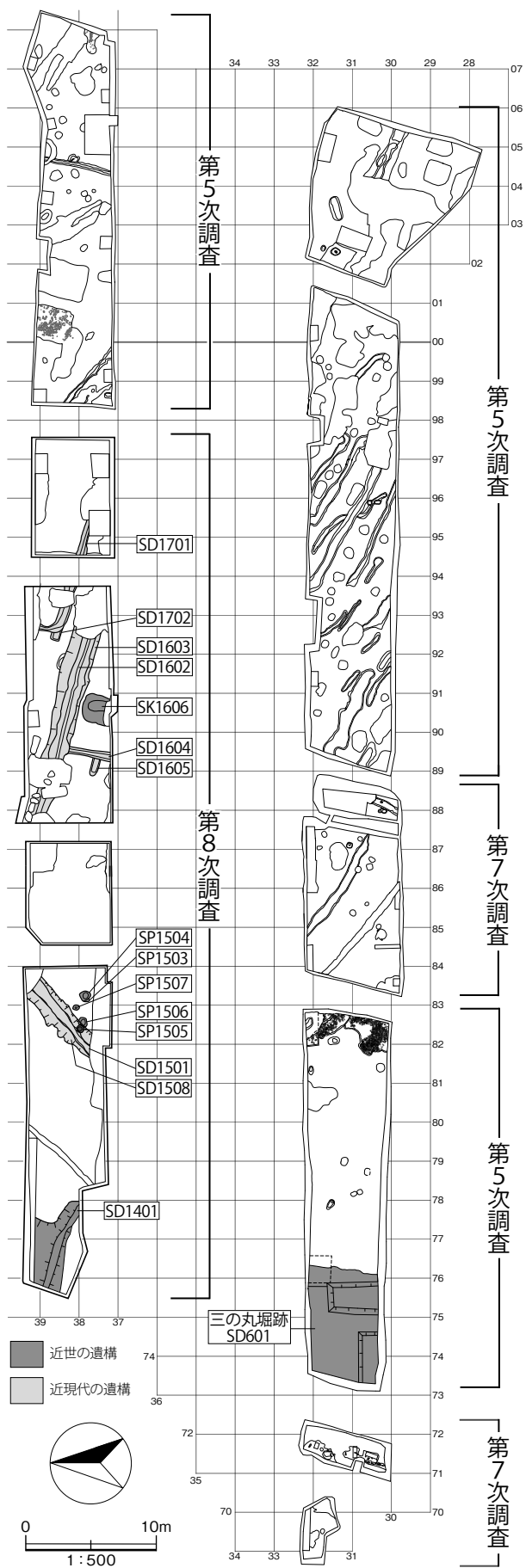


図2 遺構配置図 (1:500)

西で比高差があり、地表面から遺構検出面までの深さは西端で約 120cm、東端で約 60cm を測る。東側から西側に向かって緩やかに低くなる遺構検出面の勾配は、第 5 次調査で確認された傾斜と同程度であり、おおむね旧地形の勾配を示していると考えられる。このことは過去の山形城三の丸跡調査で報告されている通り、西側扇端部に向かって緩やかに下る馬見ヶ崎川扇状地上に立地していることを示している。

遺構と遺物

調査で検出された遺構は、溝跡 9 条、土坑 2 基、ピット 5 基である。

調査区西端で検出された SD1401 溝跡は、当初第 5 次調査で確認された三の丸堀跡 (SD601) の続きであろうと考えられた。しかし掘り込みの東縁は強く湾曲していて第 5 次調査の堀跡と直線的に繋がらず、底の深さが一定でないこと等から、別の溝跡としておきたい。調査区西壁の土層断面 (図 3) をみると、溝の底は調査区中央で 40 ~ 60cm ほど高くなる。この高まりは南北幅約 120cm の土手状をていし、北東方向と南西方向に向かって緩やかに低くなる傾斜面をもつ。調査区南側は側溝設置に伴う攪乱で壊されているが、SD1401 溝跡全体としては、土手状の高まりを挟んで東西方向に走る 2 条の掘り込みが合わさったような形状となっている (図 4)。覆土からは肥前磁器皿などの破片資料が 14 点出土するにとどまり、遺物の出土量が少ない点も三の丸堀跡の状況と異なる。

SD1401 溝跡の東側 12 m ほどの遺構空白域を挟んで、重複する 2 条の溝跡が確認された。浅く幅広い SD1508 溝跡の中央部を、断面逆台形の SD1501 溝跡が掘り込んでいる。溝の重複にずれはなく、同一方向に走っていることから、埋没した SD1508 溝跡を掘り直すかたちで SD1501 溝跡が掘削されたものと考えられる。溝跡の北東端・南西端には攪乱が入り、両溝跡がどの層位から掘り込まれているか厳密にはわからない。ただし、最下層出土遺物を含め大半は近代以降の遺物で占められることから、明治・大正時代以降に用水路として利用されたものと考えられる。

SD1501・1508 溝跡の東側には、再び 10 m ほどの遺構空白域が存在する。この空白域より東側で、6 条の溝跡が確認された (図 5)。

調査区を東西方向に縦断する SD1602・1603 溝跡は、SD1501・1508 溝跡と似た特徴を有する。すなわち浅く幅広い SD1603 溝跡の中央部を SD1602 溝跡が掘り込んでおり、掘り直しを示唆する重複状況となっている。SD1602 溝跡は地表面近くから断面 V 字形に掘り込まれており、検出面からの深さは約 120cm を測る (図 6)。掘り込まれた高さから、近代以降に掘削・利用された用水路と判断できる。SD1602 溝跡の出土遺物は、他の溝跡と比べて圧倒的に多く、破片数で SD1501 溝跡のおよそ 10 倍、SD1603・1701・1702 溝跡の 3～5 倍に及ぶ。とくに陶器、^{かたがみすりえ}型紙摺絵の磁器、現代のプリント磁器が大半を占め、SD1501・1508 溝跡と同様、近世の遺物をわずかに含みつつ近代以降の遺物が多いという状況であった。

SD1602 溝跡の南側に接続する SD1604 溝跡は、幅 50～70cm、検出面からの深さ約 70cm を測る。また SD1604 溝跡の西側に接続する SD1605 溝跡は、幅・深さともに約 60cm を測る。SD1602・1604 溝跡の重複関係をみると、最下層では SD1602 が SD1604 を掘り込んでいるが、その上層では複数回にわたる掘り直しの痕跡が確認できる。おそらくこれらの溝跡は同時期に機能したもので、溝が埋まるたびに埋土を掻きだす行為がなされたものと考えられる。

SD1602・1603 溝跡の北東側では、これに並行して東西方向に走る SD1701・1702 溝跡が検出された。直線的な軌跡を描く SD1702 溝跡を掘り直して、北西側で北に折れる SD1702 溝跡が掘られている。SD1501・1508 溝跡や SD1602・1603 溝跡と比べて小規模だが、地表面近くから断面箱形に掘り込まれ、最下層を含めて近代以降の遺物を多く包含することから、同様に近現代の用水路跡と考えられる。

5 基のピットは、SD1501・1508 溝跡の南東側でまとめて検出された (図 7)。うち 4 基は柱穴で、SP1503 は SP1504 に、SP1505 は SP1506 にそれぞれ切られている。SP1503・1504 はともに柱材が残っており、樹種同定の結果、前者には直径 12cm のクリ、後者には直径 18cm のスギ材と分かった (図 8)。また放射性炭素年代で SP1504 は年代幅のある測定値であったが、SP1503 は 17 世紀半ばから 18 世紀にかけてのものと判明した。検出面からの深さは SP1503 が

約 32cm、SP1504 が約 56cm を測り、SP1504 の覆土には根固めに用いられたと考えられる礫が見られる。SD1501・1508 溝跡に切られる SP1505・1506 は、検出面からの深さ約 48cm を測り、SP1506 の底面には、直径約 30cm、厚さ約 10cm の自然石が礎石として据えられていた。

SD1602・1603 溝跡の南側に位置する SK1606 土坑は、南側を道路側溝の設置に伴う攪乱で壊されており、全形を^{うかがい}知れない。検出面からの深さ約 30cm の皿状を^みていし、東西幅は約 2 m を測る (図 9)。遺物は覆土上層から出土した美濃折縁鉄絵皿と黒瓦片の 2 点のみである。折縁皿は口縁部にのみ灰釉が掛かる連房式登窯第 2 小期のもので、見込みに花文の鉄絵が描かれている (図 10)。また皿上面にはフィルム状の褐色物質が付着しており、赤外線分光分析で、漆膜であると判明した。遺存していた付着量はごくわずかだが、漆塗りの容器として利用されたものであろう。遺物の年代観から、SK1606 土坑の時期も江戸時代前期、寛永年間 (1624～1645 年) に位置づけられる。

まとめ

発掘調査では、平成 20 年度の第 5 次調査で確認された三の丸堀跡が北側に続かず、代わりに複雑な形状の SD1401 溝跡が検出された。幕末期の山形城絵図や明治時代の旧公図と照合した結果、SD1401 溝跡は、堀跡の途切れる飯塚口に開削された近世の用水路跡である可能性が高いと判断される。この判断が妥当であれば、調査区西端の位置こそがまさしく飯塚口にあたり、その東側で検出された柱穴群は城門を構成していた可能性が考えられる。この度、飯塚口の位置を特定する材料が得られたことは、大きな収穫と言える。

このほか、漆の付着した美濃折縁皿が出土した SK1606 土坑が確認されたが、調査区全体を通して近世遺構の少なさが目立つ状況であった。相次ぐ領主替えて石高を大幅に減らした山形藩は、江戸時代後期になると広大な城郭を維持できずに三の丸区域の大部分を畑地として払い下げたと考えられており、今回の調査で近世の土地利用状況をあらためて裏付けることができた。

また明治時代以降に開削・利用された溝跡も検出され、近世から現代に至る当該地区の様相が明らかとなった。



図3 近世の溝跡 土層断面 (SD1401 西壁：東から)



図4 近世の溝跡 完掘・断ち割り状況 (SD1401：西から)



図5 近現代の溝跡 完掘状況 (SD1602～1605：東から)



図6 近現代の溝跡 土層断面 (SD1602：東から)



図7 柱穴群 完掘状況 (SP1503～1507：北西から)



図8 柱材が残っていた柱穴 (SP1504：北西から)



図9 近世の土坑 土層断面 (SK1606：北東から)



図10 漆の付着した美濃折縁鉄絵皿

おんだし 押出遺跡 (第4次)

遺跡番号	381-313
調査回数	第4次
所在地	山形県東置賜郡高畠町大字深沼字押出
北緯・東経	北緯 38 度 1 分 47 秒・東経 140 度 10 分 16 秒
調査委託者	山形県教育委員会
起因事業	農林水産省東北農政局米沢平野農業水利事業所 国営かんがい排水事業 (米沢平野二期)
調査面積	665 m ²
受託期間	平成 23 年 7 月 19 日～平成 24 年 3 月 31 日
現地調査	平成 23 年 10 月 3 日～11 月 18 日
調査担当者	水戸部秀樹 (現場責任者)・伊藤大介・高木茜・濱田純
調査協力	高畠町教育委員会 農林水産省東北農政局米沢平野農業水利事業所
遺跡種別	集落跡
時代	縄文時代
遺構	住居跡・盛土遺構・転ばし根太・打ち込み柱・窪地
遺物	縄文土器・石器・木製品・種子・骨器 (文化財認定箱数: 207 箱)

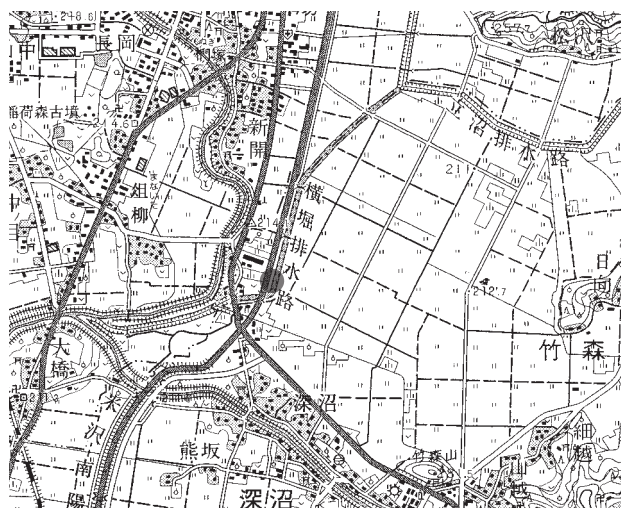


図1 遺跡位置図 (1:50,000)

調査の概要

押出遺跡の発見は、1971年に沼尻堀を掘削した時の排土から、土器や石器が拾い上げられたことが契機となった。1985年からは、国道13号建設工事を起因として3カ年におよぶ発掘調査が行われ、大きな成果が得られている。地表から約2m下に、特殊な構造をもつ住居群、通常の遺跡では残りにくい有機質遺物、彩漆土器や木胎漆器などを始めとする貴重な遺構・遺物の数々が発見された。その重要性は、約1,100点におよ

ぶ出土品が、国指定重要文化財となったことからもうかがえる。今回の第4次調査でも、小さい面積の調査区にもかかわらず、前回の調査成果に類する重要な遺構・遺物が確認された。

押出遺跡は^{おおやち}大谷地と呼ばれる湿地帯の中に位置している。現在では開拓され、どこにでもある水田が広がっているが、かつては舟を使って田植えを行ったほどである。大谷地周辺には、縄文時代の遺跡が数多く知られており、生活に適した環境であったと考えられるが、果たして湿地帯の内部に集落を構えた押出遺跡の暮らしぶりはいったいどのようなものだったのだろうか。

遺構と遺物

第1～3次調査では住居跡39棟、集石遺構1基が検出された(図2・写真6)。今回の第4次調査では、沼尻堀の西岸部から、4棟の住居跡や多数の遺物が見つかった。沼尻堀の堀底も遺跡の範囲内ではあったが、掘削工事が遺跡の下までおよんでいたため、ほぼ全てが失われていた。住居跡は前回の調査でも見つかった盛土をもつものである。住居1・2は大きさは異なるが、構造は同じである。盛土の下に転ばし^{ねだ}根太とよばれる丸太材が、縦横に敷き詰められている。柔らかい地盤に住居を

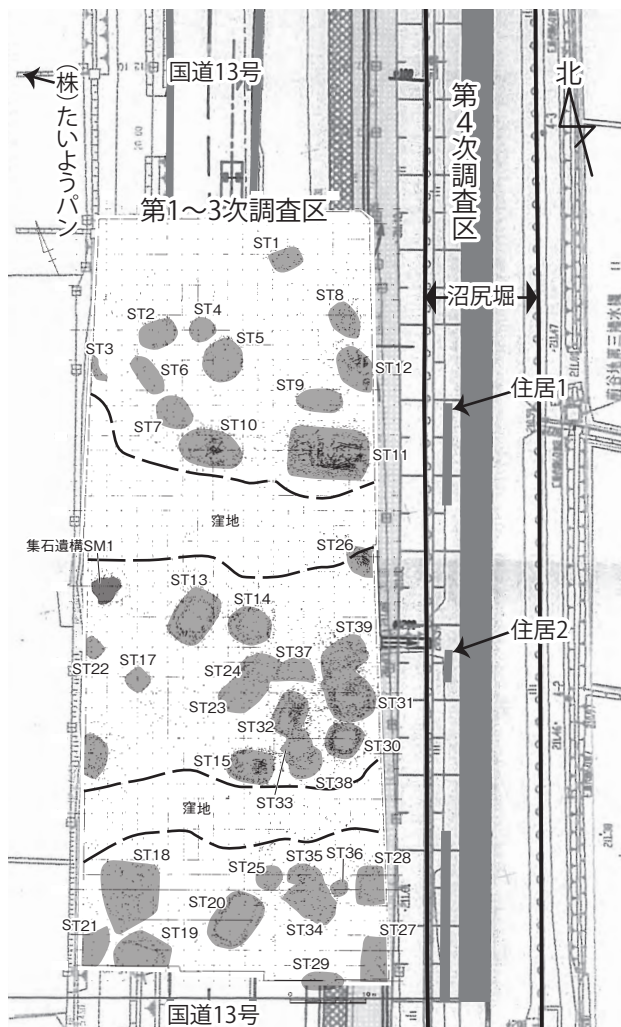


図2 調査区概要図 (1/1,000)



写真1 住居1検出状況 (北東から)



写真2 住居1の盛土断面 (南西から)

建てるための工夫であると考えられる (写真1・3・5)。盛土は、砂や粘土を交互に積み重ねて造成されていた(写真2・4)。また、盛土の周囲には壁柱と考えられる多数の柱が打ち込まれている(写真1・5)。これらの遺構から、当時の住居を復元すると、図3・写真7のようになると考えられている。今回の調査では、幅1m分のみの検出となったため、全体の状況ははっきりしないが、本来は、写真6のように、敷き詰められた転ばし根太の周囲を打ち込み柱列が楕円形に巡る構造になるであろう。



写真3 住居1中央部検出状況 (北から)

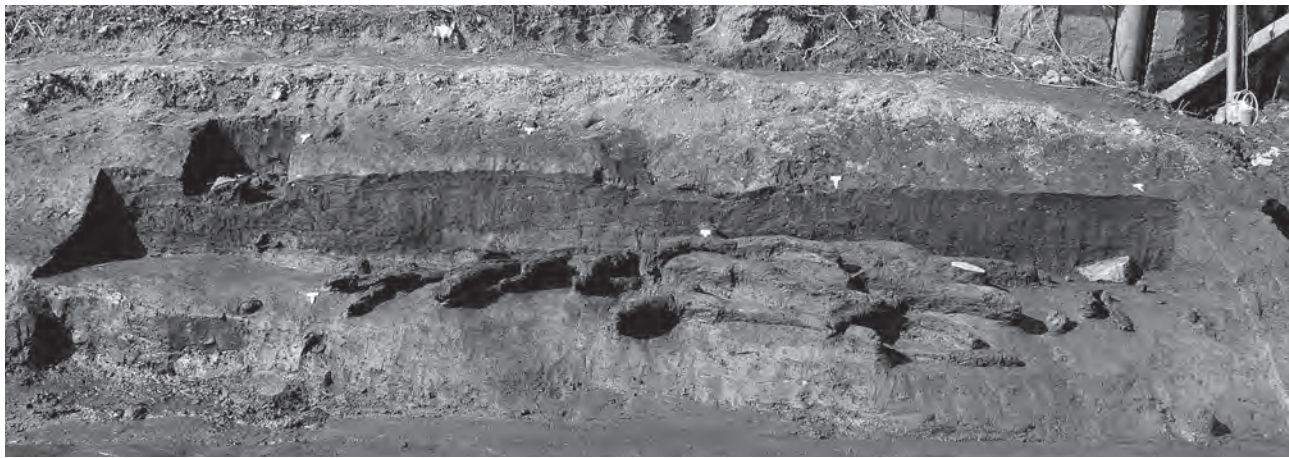


写真4 住居2の盛土断面（南西から）



写真5 住居2 検出状況（北東から）

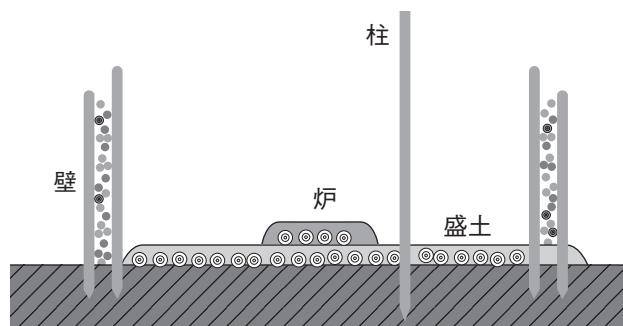


図3 住居下部構造模式図（文献1より）

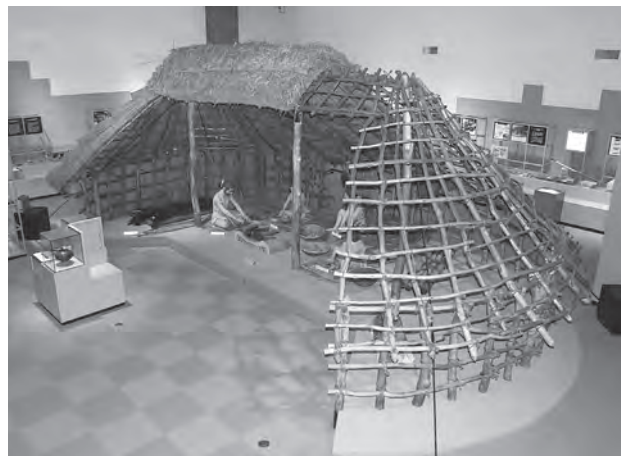


写真7 20号住居跡復元模型（文献1より）



写真6 3次調査の15号住居跡（東から：文献1より）

出土した遺物には、多数の縄文土器（約5,500年前・写真8～10）、石器、木製の皿などがある。漆が塗られた土器や木製品、クッキー状炭化物などは出土しなかった。土器の大半は、東北地方南部の土器型式である粘土紐を貼り付けた曲線的な文様が特徴の大木4式期のものだが、一部他地域（新潟方面など）の土器型式も出土しており、人・モノの交流がうかがえる。石器は、石鏃、押出型ポイント（写真11）、石匙、石錐、異形石器（写真12）、磨製石斧、凹石、石皿などが見ついている。押出型ポイントは本遺跡で特徴的な石器であり、



写真8 住居1 土器出土状況（北東から）



写真9 土器出土状況（南東から）



写真10 土器出土状況（南西から）



図4 ある日の押出ムラ（文献1より）

湿地に生えるヨシなどを刈り取るために使われたと考えられている。また、異形石器は、他の石器と異なり赤色の鉄石英を素材として多用していること、さらにその形態などから、実用品ではなく、祭りなどに使われた可能性が高い。ほかに食料となったクルミの殻が大量に出土した。

まとめ

当時の押出遺跡の様子は、図4のように想像されている。湿地に適応した住居や石器などを用いているが、その暮らしぶり、積極的に湿地を選んで住んだのか、あるいは、ほかに住む場所がなかったのかで大きく変わる。見つかった多種多様な遺物、特殊な住居跡からは、何らかの目的があって、積極的に湿地へと進出していったという可能性にも、考えを広げてみる必要があるのではないだろうか。

引用文献

文献1：山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
2007 『押出遺跡』



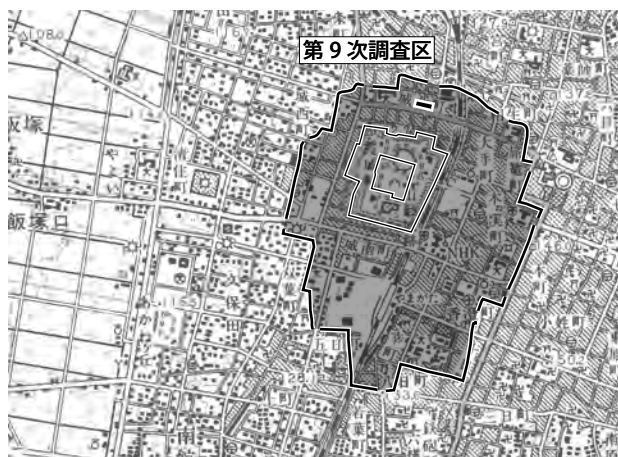
写真11 押出型ポイント



写真12 異形石器

やまがたじょうさんのまるあと
山形城三の丸跡 (第9次)

遺跡番号 201-002
調査回数 第9次
所在地 山形県山形市城北町2丁目6-27他
北緯・東経 38度15分34秒・140度19分48秒
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業 一般国道112号(霞城改良)
調査面積 500㎡
受託期間 平成23年4月1日～平成24年3月31日
現地調査 平成23年5月9日～8月4日
調査担当者 渡辺和行(現場責任者)・伊藤大介・後藤枝里子
調査協力 株式会社山形ガス・山形市上下水道部・山形市教育委員会・村山教育事務所
遺跡種別 城館跡
時代 古墳時代・平安時代・中世・近世
遺構 溝跡・土坑・柱穴・井戸跡・河川跡
遺物 土師器・須恵器・陶磁器・瓦・金属器・骨片 (文化財認定箱数:19箱)



遺跡位置図 (1:50,000)

調査の概要

山形城三の丸跡は、霞城公園のある山形城跡(本丸・二の丸、国指定史跡)を取り囲む東西約1,600m、南北1,800mの広大な城館跡である。文禄・慶長年間(1592年～1615年)に最上氏11代当主の最上義光が三重の堀を構えた城郭として整備したといわれている。

その後、最上氏13代義俊の改易を経て、鳥居氏から水野氏まで計10氏が山形藩主として転封・入部を繰り返している。石高も57万石から5万石へと減少していく。それらに伴い山形城内の修築が数度行われ、最後



写真1 古墳時代の赤色された鈴

の藩主である水野氏の時代には三の丸の維持が難しくなりほとんどが水田や畑になったといわれている。

今回は国道112号の拡幅部分500㎡を調査区とし4区画(図1)に分けて調査を行った。隣接する民家への進入路と残土の置き場を確保する必要があったためである。調査区は三の丸跡北側の出入り口の一つである肴町口に続く街道沿いに位置する。

遺構と遺物

4区の内、1・3区から南北に延びる2条の溝跡SD51(写真3)とSD255(写真4)が検出され、この間にある1・2区から多くの柱穴や土坑が検出された。

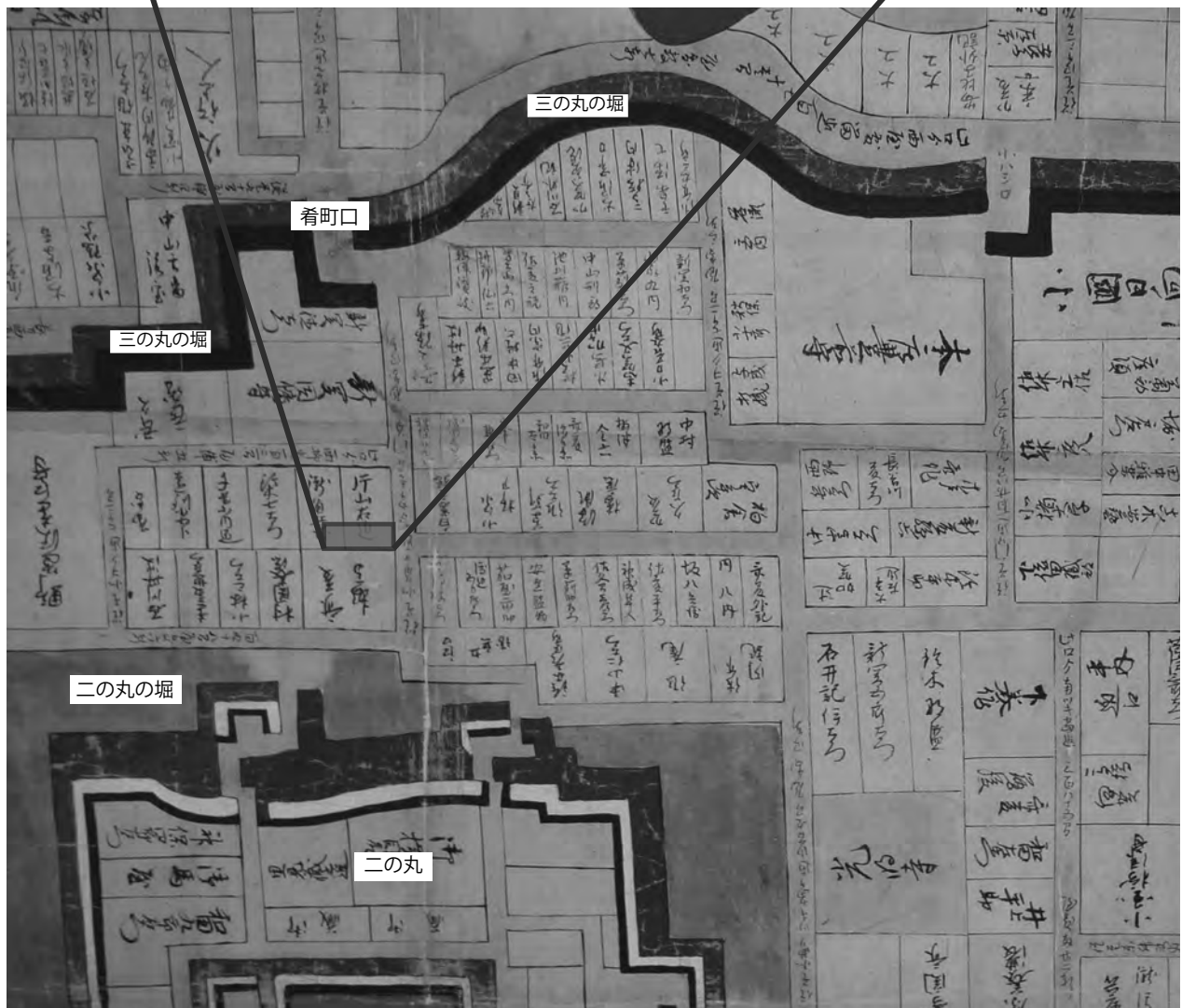
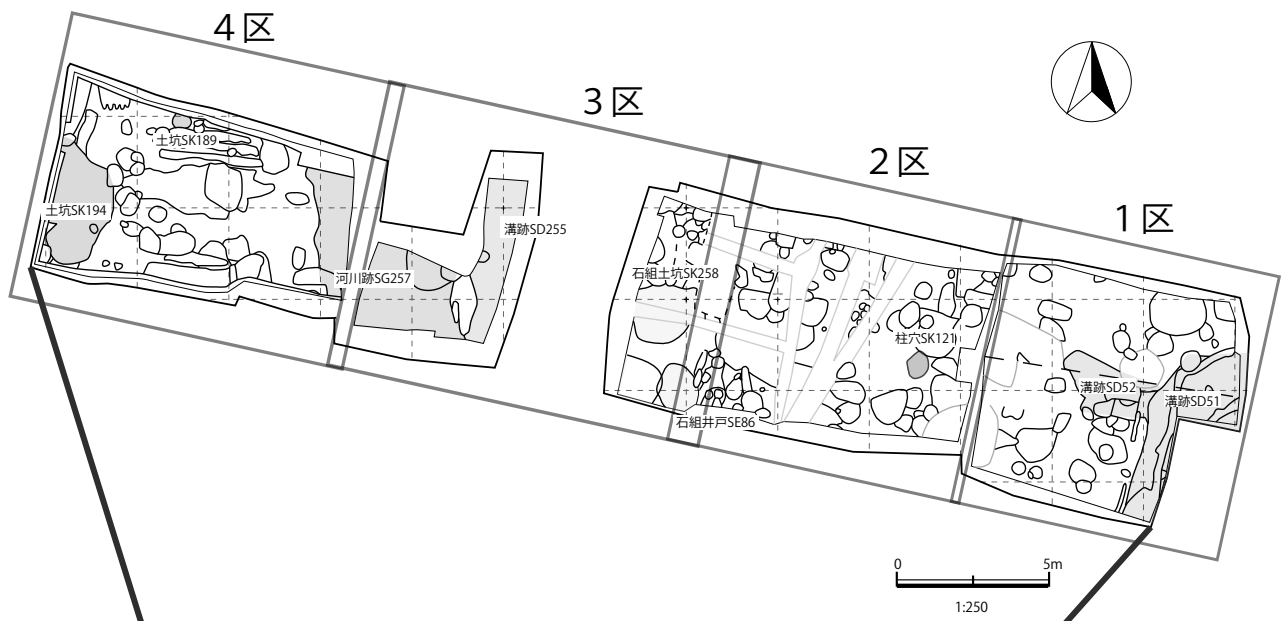


図2 絵図面上の調査区位置（縮尺任意）と遺構配置図（S = 1/250）

2条の溝跡SD51とSD255を区画施設としその間を生活空間として建物などを配置したと考えられる。

2条の溝の内、西側で検出された溝跡SD255には石が敷かれており溝の内部で2か所の掘り込みが確認されている。内、1か所の掘り込みの底部には同様に石が敷かれていた。石敷きの直上に砂が堆積しており、水の流れがあったものと推定出来る。遺物は須恵器や陶器などが出土している。

遺構の集中部である1区・2区内、2区からは地下式礎石を配置した大型の柱穴が数基確認（SP121等）されている。これら柱穴に関しては現在建物の配置を検討中である。柱穴の他に開口部に石を円形に組んだ石組井戸SE86などがある。遺構が掘り込まれている上面が砂地であったことから砂の崩落防止のために配置したと考えられる。その付近には同様に石を円形に組んだ深さ30cm程の石組土坑SK258も検出されている。石組井戸SE86の覆土には焼土や炭などが混じっており、火災後の一括廃棄場所となった可能性がある。なお、検出面から遺構底面まで深さが1m程あったが湧水は確認されなかった。遺物は近世に属する陶磁器等が出土してい



写真2 SE86・SK258完掘（南西から）



写真3 SK258遺物出土状況（東から）

る。

1区では柱穴や土坑、溝跡が検出されている。溝跡SD52からは須恵器と土師器が出土している。1区・2区で出土した遺物の中心は近世に属する陶磁器である。だが少量古代の須恵器や土師器も出土し、1点だけではあるが古墳時代の赤色された土師器の鉢が出土している。

3区では東側で検出された区画施設と考えられる石敷き溝SD255の西側に河川跡と考えられる遺構SG257が検出されている。西端は4区で検出された。覆土には砂が堆積しており、粒子の粗い砂であることから流れの速い河川であったことが考えられる。出土遺物は須恵器や土師器を主体とし、中世の古銭、馬の歯骨などがある。

今回の調査区で西端に位置する4区では1区～3区と性格が異なる遺構が検出されている。畝跡と考えられる溝跡や焼土・炭・焼けた石などが一括で廃棄された大型の土坑SK194、多量の炭に混じって骨片が出土する土坑SK198である。SK198から出土した骨片は分析の結果、火葬された人骨の一部であることが確認された。年代については現在調査中である。その他の遺構として柱



写真4 SD51全景（北から）



写真5 SD255石敷き状況（北から）



写真6 SP121 断面状況 (北から)



写真8 1区全景 (西から)



写真7 SG255 完掘状況 (北から)



写真9 2区全景 (東から)

穴や土坑も検出されているが1区～3区に比べると数量・密度ともに希薄である。4区の出土遺物は近世の陶磁器などが中心である。

まとめ

調査では溝を区画施設とする屋敷地の一部を確認することが出来た。三の丸跡の北側出入口の一つである肴町口げんぼうに続く街道沿いを調査出来たことは三の丸跡の全貌の解明の一助になったと考えたい。

遺物は古墳時代から現代まで広い年代幅で出土した。山形城三の丸跡の別地点での発掘調査でも古代から現代まで各時代の遺物が出土している。遺物の年代幅から山形城三の丸跡を含む周辺地域が古代から現代まで人々が生活を営むのに適した場所であったことが伺える。

今回調査した遺構の中には一括で数基の遺構が埋め戻されている箇所が存在した。土地の整地を行った可能性が考えられる。それぞれの年代に応じて土地の利用方法を変えて暮らし続けていたといえよう。

ただ、生活が営まれた中心となる時代は出土遺物の量から近世以降と考えられる。



写真10 3区全景 (東から)



写真11 4区全景 (東から)

沼袋遺跡

遺跡番号 210-070
調査回数 第1次
所在地 山形県東根市大字長瀬字沼袋
北緯・東経 38度27分58秒・140度21分33秒
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業 東北中央自動車道（東根～尾花沢）
調査面積 6,500 m²
受託期間 平成23年4月1日～3月31日
現地調査 平成23年5月17日～11月17日
調査担当者 菊池玄輝（現場責任者）・川崎康永・尾形知哉・安部将平・濱田純・山田和史
調査協力 村山東根土地改良区・東根市教育委員会・村山市教育委員会・村山教育事務所・山形県教育委員会
遺跡種別 集落跡
時代 奈良時代・平安時代・中世・近世
遺構 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・濠跡・溝跡・土坑・柱穴・井戸跡
遺物 土師器・須恵器・石製品・陶器・磁器・金属器（文化財認定箱数：31箱）

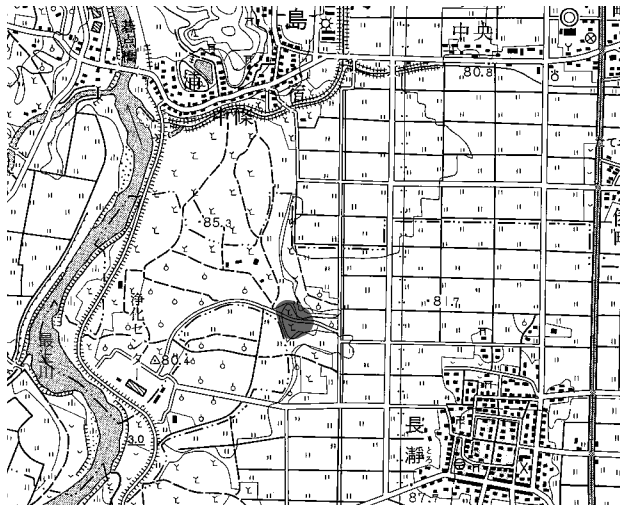


図1 遺跡位置図（1：50,000）

調査の概要

遺跡は東根市長瀬地区から北西に約1.3km、最上川右岸沿いの標高80mの自然堤防上に立地している（図1）。遺跡周囲の低地部は、最上川の旧河道にあたり、現在は水田として利用されている。

旧河道を挟んで北側には中世の墓地である八反遺跡、遺跡の南側には同時期の方形居館である長瀬本楯跡が位置しており、調査によって関連する遺構の検出が想定された。長瀬本楯跡は最上4代当主である満家の居館と推

定されており、長瀬城（現在の長瀬地区）の前身とも考えられているが不明な点の多い城館である。

調査では、調査区の3分の一を占める河川跡、その流路に沿った微高地で竪穴住居跡・掘立柱建物跡からなる古代の集落跡と、濠跡・区画溝跡・掘立柱建物跡・井戸跡で構成される中世の屋敷地を確認した（写真2）。

遺構と遺物

奈良・平安時代

竪穴住居跡は奈良時代3棟、平安時代8棟、計11棟を検出した。規模は一辺2～6m、深さは5cmと浅いものから、80cmを測るものまでである。住居の主軸はすべて方位軸に沿っている。カマドは南向きを主体とし、わずかに北や西を向くものがある。

ST209は焼失した住居跡である（写真3）。多量の炭化材とともに、土壁もしくはカマド構築材と考えられるスサ混入の粘土塊が出土した。ST217では廃棄されたカマド跡から墨書痕や口縁が打ち欠かれた土師器や須恵器坏、須恵器蓋を転用した碇などが出土した（写真4）。灰とともに埋め戻されており、「竈神」を封じ込めるカマド祭祀の事例と考えられる。ST213は一辺6mの大型住居跡で、カマドの付け替えを確認した。床面に構築



図2 調査区概要図

された土坑に重複関係があり、長期にわたって使用されたと考えられる（写真5）。

掘立柱建物跡は、総柱建物跡2棟、平地建物跡2棟を検出した。総柱建物跡のうち1棟は、ST215 竪穴住居跡と重複関係にあり、竪穴住居跡より古いことが判明した。他にも多数の柱穴を検出していることから、複数の建物が復元できると考えられる。

住居跡周辺では幅2mほどの楕円形～隅丸方形の大型土坑を検出した。このうちSK348からは^{えなつぼ}胞衣壺に用いられるような^{やっこがた}葉壺形の須恵器壺が出土した（写真6）。

遺物は土師器・須恵器の坏・坏蓋・甕・鉢、砥石、金属器として紡錘車・刀子・釘等があり、竪穴住居跡や河川跡から多く出土している。

中世

屋敷地は濠跡、区画溝跡、建物跡、井戸跡で構成される。

SD225 濠跡は調査区南端に位置し、幅約5m、深さ1.7mの規模である（写真7）。濠跡の堆積状況から、南東側に土塁が構築されていたと推定される。溝跡は東西に幅・深さ1m以上の断面V字形の^{やげん}葉研堀（写真8）や、南北に幅・深さ1m未満のものを検出した。柱穴は約1,300基を検出し、特にSD225とSD203の溝跡で区画された調査区南半に密集している。柱穴・溝跡のそれぞれに重複関係があり、複数期にわたる屋敷地の変遷が推



写真1 調査区全景（南から）

定される。また、この範囲に礎石建物跡（写真9）が位置していることから、寺院などに関係した建物の区画が存在した可能性がある。井戸跡は6基が近接して位置し、すべて素掘りだが、土層断面で井戸枠の痕跡を残すものがある（写真10）。建物跡では中央に地床炉を伴うものを2棟検出した。これらは平地建物跡と考えられる。

遺物は、区画溝跡から十字文の須恵器系陶器、雷文がスタンプされた^{がしつ}瓦質土器の「^{ふうろ}風炉」などが出土した。「風炉」は茶道具で、県内では城館や寺院でのみ出土していることから、屋敷地の性格を示唆する遺物といえる。

河川跡

河川は大小3筋を検出した。出土遺物や重複関係からSG1は中世以降、SG2は古代から中世、SG3は中世の時期と考えられる。SG1の上層からは瀬戸・美濃や青磁など近世の茶碗が出土した。

まとめ

奈良・平安時代では、土器の特徴や竪穴住居跡・掘立柱建物跡の前後関係などから、少なくとも2時期にわたる集落変遷が明らかになった。集落は住居の主軸方向の統一性から、計画的集落と考えられる。中世では、区画された屋敷地が見つかったことにより、県内でも調査例が少ない方形居館周辺の様子が明らかになった。北側の八反遺跡とともに居館を中心とした中世の景観を復元するうえで重要な成果が得られた。また、河川跡の検出からは居住に伴う水資源・水運等の水利を得る一方、最上川の氾濫による水害の影響があったことなど、最上川中流域に展開した、人と河川との関係が明らかになった。

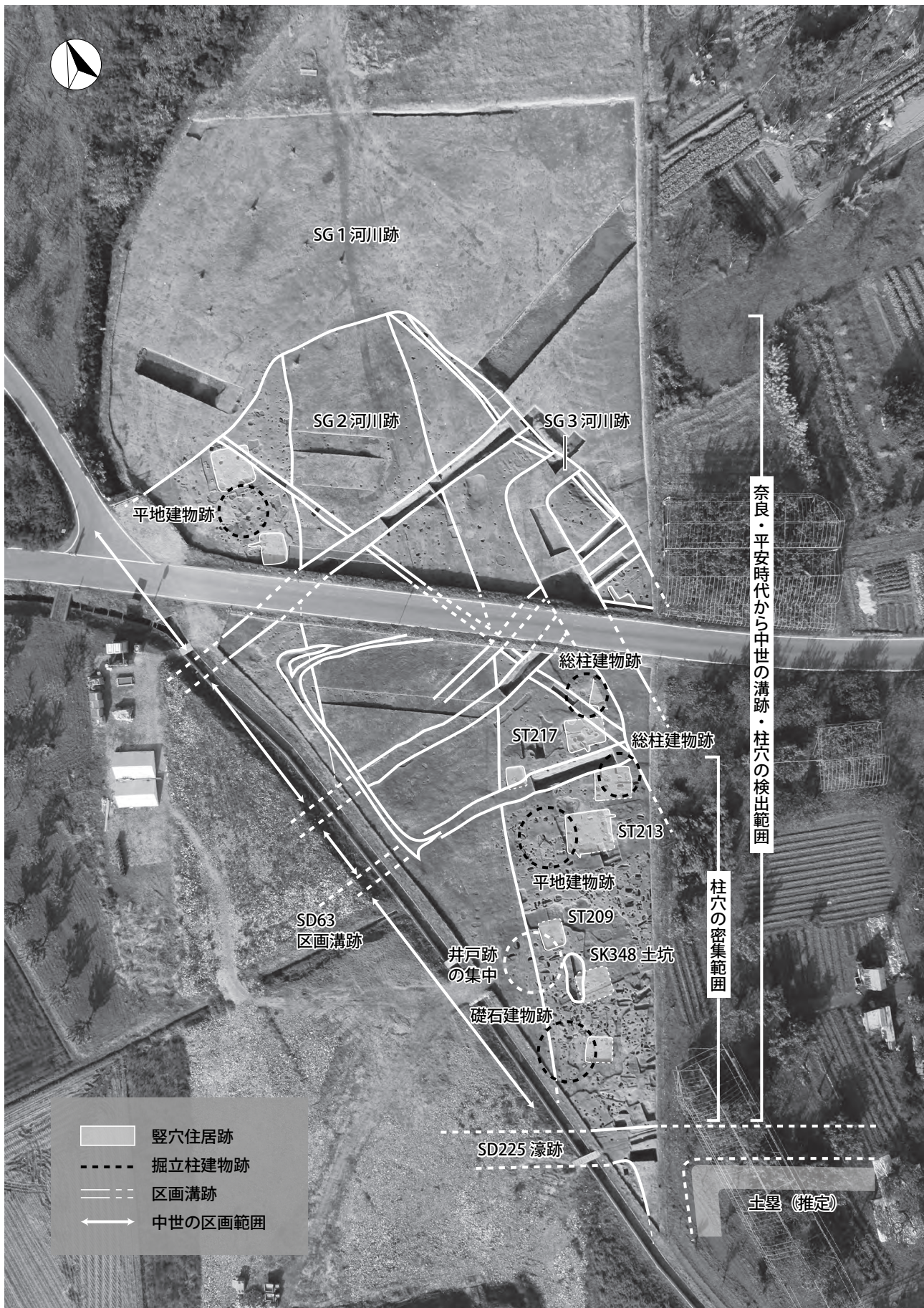


写真2 調査区全景



写真3 ST209 焼失した竪穴住居跡



写真4 ST217 竪穴住居跡のカマド



写真5 ST213 竪穴住居跡



写真6 SK348 大型土坑の須恵器壺出土状況

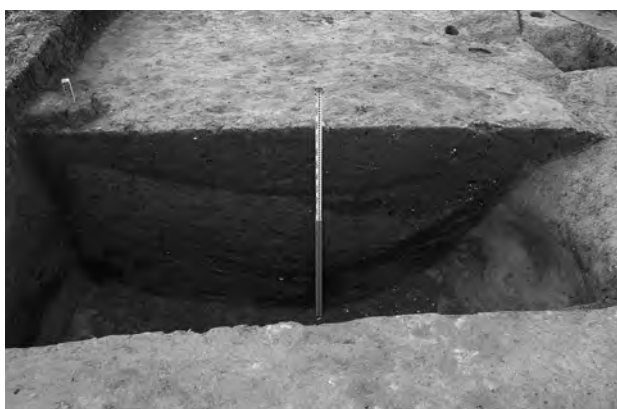


写真7 SD225 濠跡

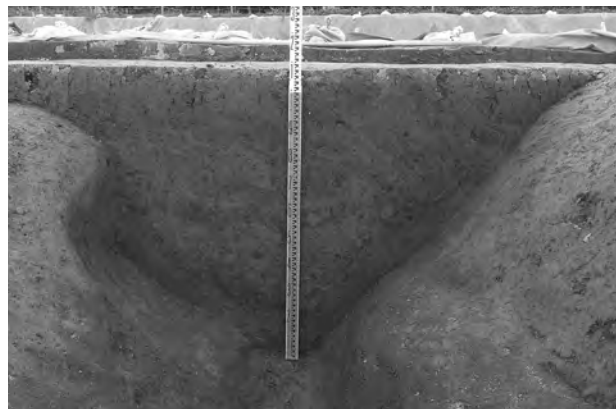


写真8 SD63 区画溝跡



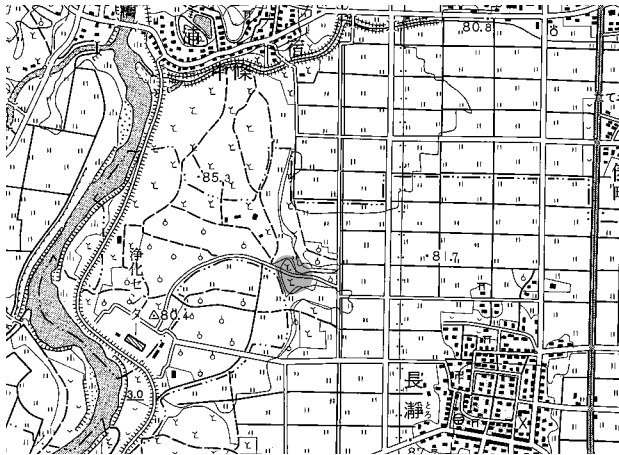
写真9 建物跡の礎石



写真10 SE332 井戸跡

はったん 八反遺跡

遺跡番号 211-029
調査回数 第1次
所在地 山形県東根市大字長瀬字八反
北緯・東経 38度28分9秒・140度21分33秒
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業 東北中央自動車道（東根～尾花沢）
調査面積 7,000 m²
受託期間 平成23年4月1日～平成24年3月31日
現地調査 平成23年5月17日～11月30日
調査担当者 高桑登（現場責任者）・小野健二・長谷部寛・高木茜・高柳俊輔・板橋龍
調査協力 村山東根土地改良区・東根市教育委員会・村山市教育委員会・村山教育事務所
遺跡種別 墓地跡・集落跡
時代 古墳時代・奈良時代・平安時代・中世
遺構 火葬遺構・集石遺構・竪穴住居跡・溝跡・土坑・柱穴
遺物 土師器・須恵器・陶磁器・金属製品・古銭・骨（文化財認定箱数：63箱）



遺跡位置図（1：50,000）

調査の概要

八反遺跡は最上川右岸の自然堤防上に位置する。遺跡周辺の果樹園や畑、水田の地割には最上川の旧河道の痕跡が残されており、一帯が最上川の氾濫原であったことがわかる。旧河道に沿って沼袋遺跡、長瀬本橋跡等、古代から中世の遺跡が分布している。

地元の伝承では、遺跡の周辺に壇状の地形が8箇所あったとされ、「八反」の地名の由来となっている。

今年度は事業範囲内の南半部を調査対象とした。中世の遺構面の下層から古代以前の遺構面が確認された。下

層の遺構面および北半部については平成24年度に調査を予定している。

遺構と遺物

調査の結果、火葬遺構や集石遺構など葬送に関連する遺構が数多く見つかった。

火葬遺構は、幅40～60cm、長さ100～120cm程の長方形で、長辺の両側に溝が直交する。壁面が被熱し、底面に炭化物が堆積している。炭化物の上層から火葬骨が出土している（写真8～11）。

SK0587火葬遺構（写真8）は、北側に頭骨、南側に足骨が確認されており、火葬時の姿勢が復元できる可能性がある。その他、中央部の凹みに骨が集中しているもの（SK0123・写真9）、底面全体に骨が散乱した状態のもの（SK693・写真10）、骨がほとんど出土しないもの（SK0059・写真11）など多様な出土状況が認められる。

集石遺構は調査区の北東部に集中する。直径50cm程度の円形の土坑（写真4）や溝状遺構など様々な形の遺構に数cm大の石が埋められている。

SK0599集石遺構（写真5）は長軸2.8m、短軸1.8mの不定形の範囲に石が集められており、古銭が6枚重

なった状態で出土している。死者に供えた六道銭と考えられる。六道銭が出土したことから、集石遺構は埋葬施設の可能性がある。ただし、少数の集石遺構から火葬骨が出土しているものの、多くの集石遺構からは火葬骨の出土は確認できなかった。

SX0609 集石遺構はL字型の浅い溝状遺構で、方形に巡る区画施設となる可能性がある。墓域の中心的な施設と考えられる。この区画施設を中心に、その周囲に集石遺構、さらに外側に火葬遺構が分布している。

SX0569 は大形の不定形の土坑で、骨片、板碑の残欠が出土している（写真7）。この遺構より西側は遺構の分布が希薄となる。

SX0609 集石遺構の周辺から青磁や古瀬戸等、15世紀を中心に、13～15世紀頃の遺物が出土している（写真2）。遺構、遺物の状況から、中世後半にこの一帯が葬送の場であったことが明らかになった。

調査区の南部からは河川跡が見つかった。堆積状況から4時期の変遷が確認された。縄文時代から近世の遺物が出土している。

中世の遺構面下約20～30cmには、古墳時代から奈良・平安時代の遺構面が分布している。竪穴住居跡や溝跡等が見つかった。遺構面間の遺物包含層からは古墳時代から平安時代の遺物が多量に出土している。

まとめ

調査によって、八反遺跡は中世の墓地であることが明らかになった。遺跡の南側にある居館の長湍本榎跡を中心とし、その北側に屋敷地（沼袋遺跡）と墓地（八反遺跡）が展開する最上川右岸の中世の景観が想定できる。



写真1 調査前状況（南から）

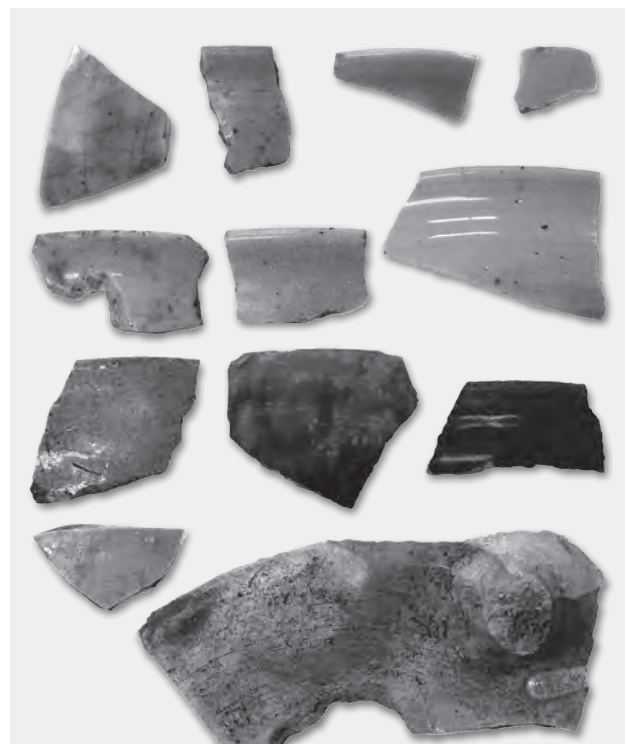


写真2 中世の遺物（青磁・古瀬戸）

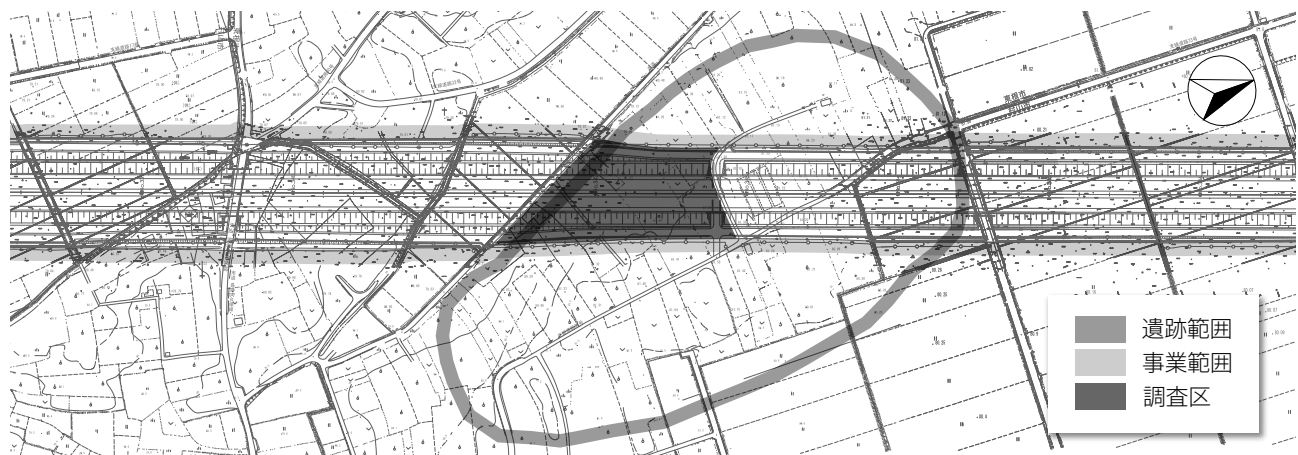


図1 調査区概要図（1/5,000）

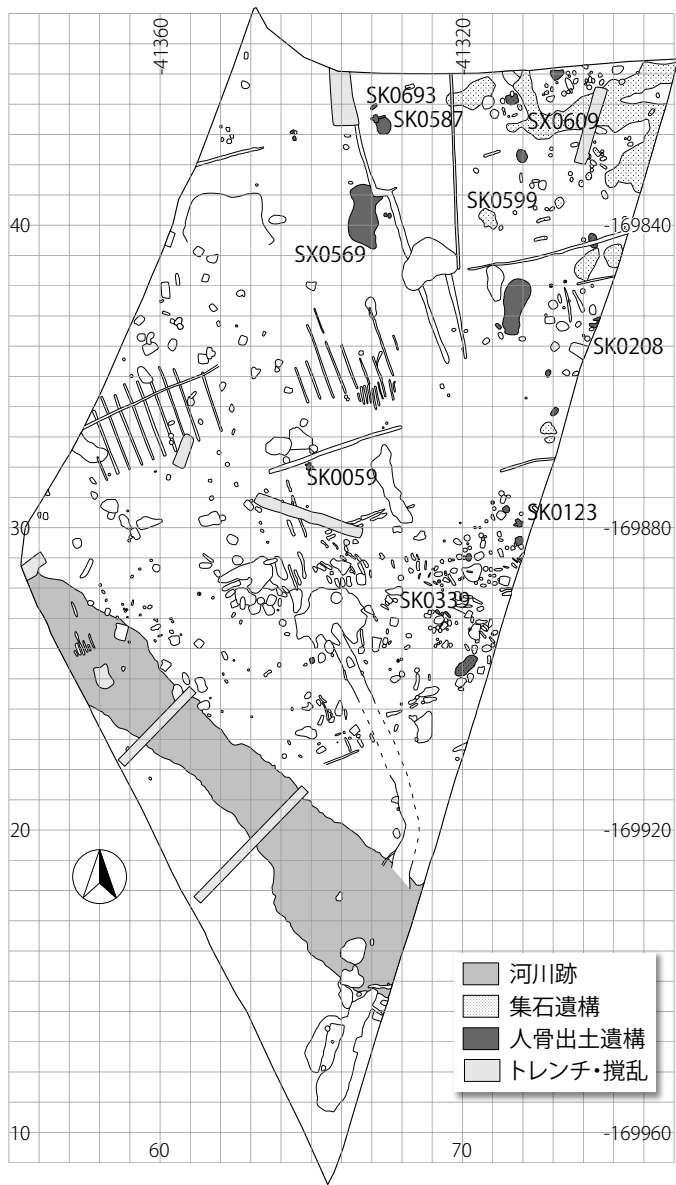


図2 遺構配置図 (1/1,000)



写真3 SX0609 集石遺構 (北西から)

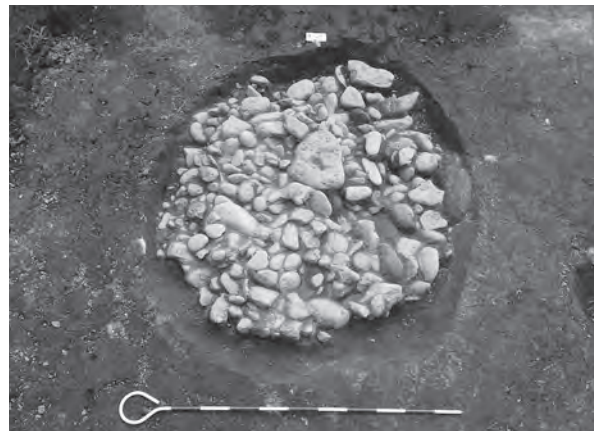


写真4 SK0208 集石遺構 (北から)



写真5 SK599 集石遺構 (北東から)



写真6 SK599 出土古銭 (写真5の黒丸位置から出土)

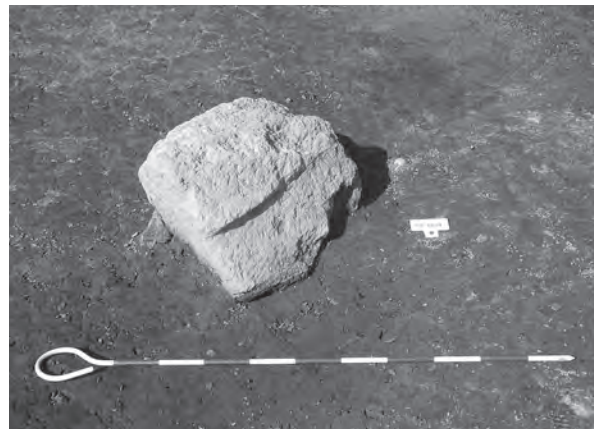


写真7 SX0569 出土板碑 (南東から)

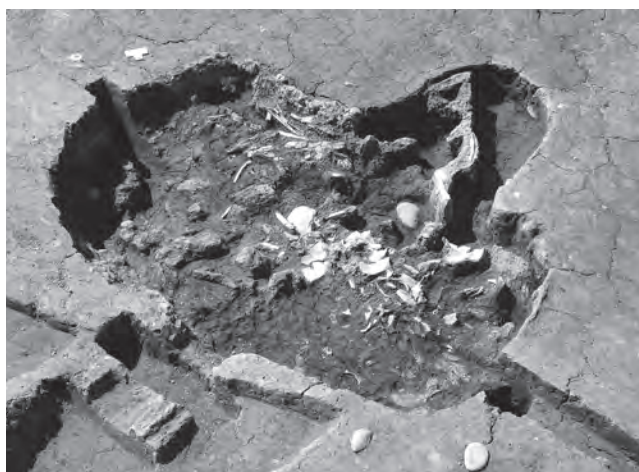


写真8 SK0587 火葬遺構（北東から）

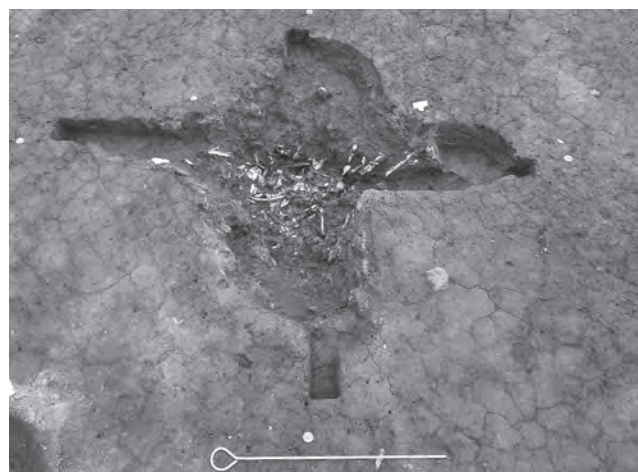


写真9 SK0123 火葬遺構（北西から）

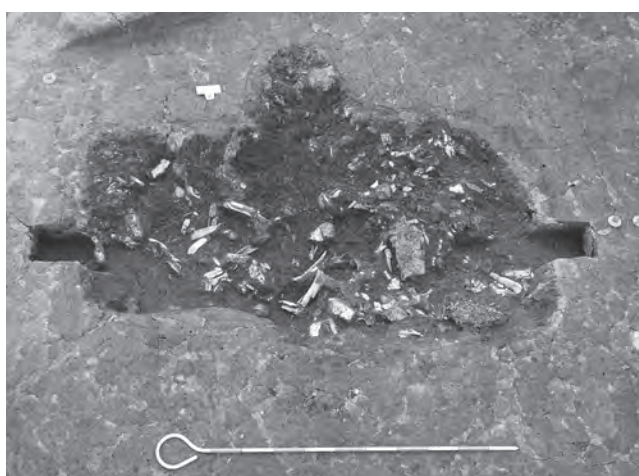


写真10 SK0693 火葬遺構（東から）

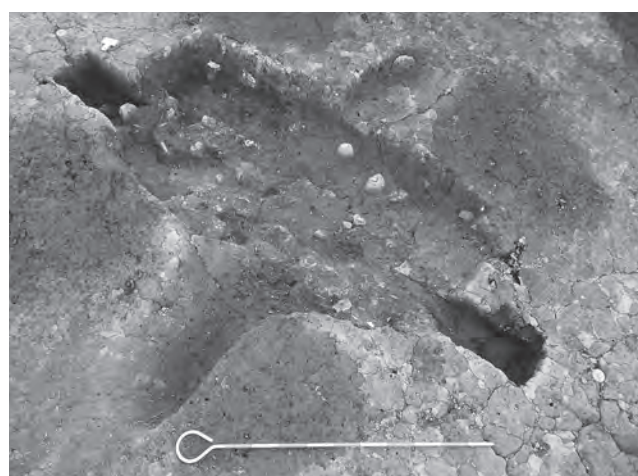


写真11 SK0059 火葬遺構（北東から）



写真12 調査区全景（北東から）※ 写真奥の調査区が沼袋遺跡

たむかい 田向遺跡 (第2次)

遺跡番号 208-132
調査回数 第2次
所在地 山形県村山市大字名取字田向
北緯・東経 140度37分02秒・38度50分63秒
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業 東北中央自動車道(東根～尾花沢)
調査面積 200㎡
受託期間 平成23年4月1日～平成24年3月31日
現地調査 平成23年5月16日～6月13日
調査担当者 大場正善(現場責任者)・板橋龍
調査協力 村山市教育委員会・村山教育事務所
遺跡種別 集落跡
時代 縄文時代・平安時代・近世
遺構 倒木痕
遺物 陶器・磁器 (文化財認定箱数: 1箱)



遺跡位置図 (1:50,000)

調査の概要

田向遺跡は、最上川左岸の河島山丘陵南麓に広がる低地部で、山形盆地と尾花沢盆地の境界付近に立地する。22年度は遺跡範囲の南側3,600㎡(A区)と北側400㎡(B区)で調査を行い、溝跡、土坑、柱穴など約300基あまりの遺構と、少量の土師器、須恵器、陶磁器片を発見した。

23年度は、B区北辺の隣接地200㎡について調査を行った。

遺構と遺物

調査区の中央と南側、そして東側で3基の倒木痕を確認した。倒木痕の存在は、現在の畑地に造成される以前に、ここに樹木があったことを示している。

南側の倒木痕の堆積土からは、近世末期ころと思われる磁器片が出土したことから、樹木が倒れたのは、近世末期ころにさかのぼる可能性がある。南側と中央部の倒木痕は土層の堆積状況から、西側に倒木したと考えられ、東側は不明である。

また、調査区からは同時期ころと思われる陶器・磁器片が6点出土しており、近世末期に調査区周辺でヒトの何らかの営みがあったと思われる。

まとめ

22年度の調査成果もあわせて考えると、遺構の主な広がりや22年度のB区までであったことが分かった。23年度の調査では、遺跡の北辺に樹木が植生していたこと、近世末期にヒトの何らかの営みがあった可能性があることが分かった。

清水遺跡 (1地区第2次)

遺跡番号 208-114
調査回数 第2次
所在地 山形県村山市大字名取清水南
北緯・東経 38度30分45秒・140度22分16秒
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業 東北中央自動車道(東根～尾花沢)
調査面積 4,450㎡
受託期間 平成23年4月1日～平成24年3月31日
現地調査 平成23年5月16日～10月27日
調査担当者 天本昌希(現場責任者)・五十嵐萌・岩崎恒平
調査協力 村山市教育委員会・村山教育事務所
遺跡種別 集落跡
時代 平安時代
遺構 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑・柱穴
遺物 土師器・須恵器・石器・陶磁器・金属器 (文化財認定箱数: 5箱)



遺跡位置図 (1:50,000)

調査の概要

清水遺跡は、村山市のほぼ中央に位置し、最上川右岸の丘陵地に立地する広大な遺跡で、清水遺跡(1地区)はその南側の地点を指す。調査区は、北側から丘陵斜面部のF区、丘陵裾の緩斜面部のE区、および昨年度調査区の下層面で低地部のA・D区を対象とした。

遺構と遺物

F区からは、住居跡等の遺構は検出されず、遺構密度も薄いことから、丘陵斜面部に集落は展開していないことがうかがえる。

E区からは、3軒の竪穴住居跡を検出しており、本年度調査の中心的な地区である。検出した住居跡のひとつ、ST1158は、黒ボク土中に築かれており、覆土上層には灰白色火山灰が厚く堆積していた。昨年度の調査でも同様の火山灰を検出し、10世紀初頭に噴火した十和田火山のものとの分析結果を得ている。出土遺物は、現状で確認できるかぎり、9世紀後半頃のものと考えられ、これは他の住居跡からの出土遺物でも同様である。

A・D区からは、調査区を南北に貫く溝を検出した。複雑に蛇行するため、自然流路、あるいはそれを一部改修し水路としたものと考えられる。遺物はほとんど出土しなかったが、昨年度の調査により上層面で検出した溝と大きな時期差は、ないものと考えられる。

まとめ

22・23年度の調査成果から、調査区に広がる集落は、9世紀後半頃から営まれ、10世紀初頭以前には廃棄されていたことがわかった。比較的短命な集落といえる。調査では、集落の西端を検出していると考えられ、中心は、東側の斜面裾部に広がっていることが予想される。今後の出土資料の分析と、調査事例の増加によって集落の全体像がより明確になるものと思われる。

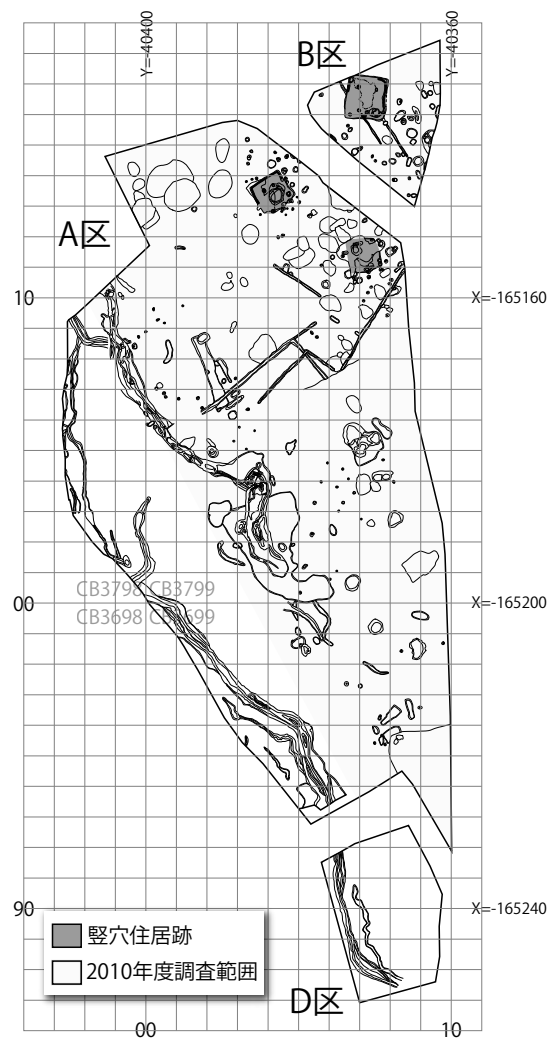
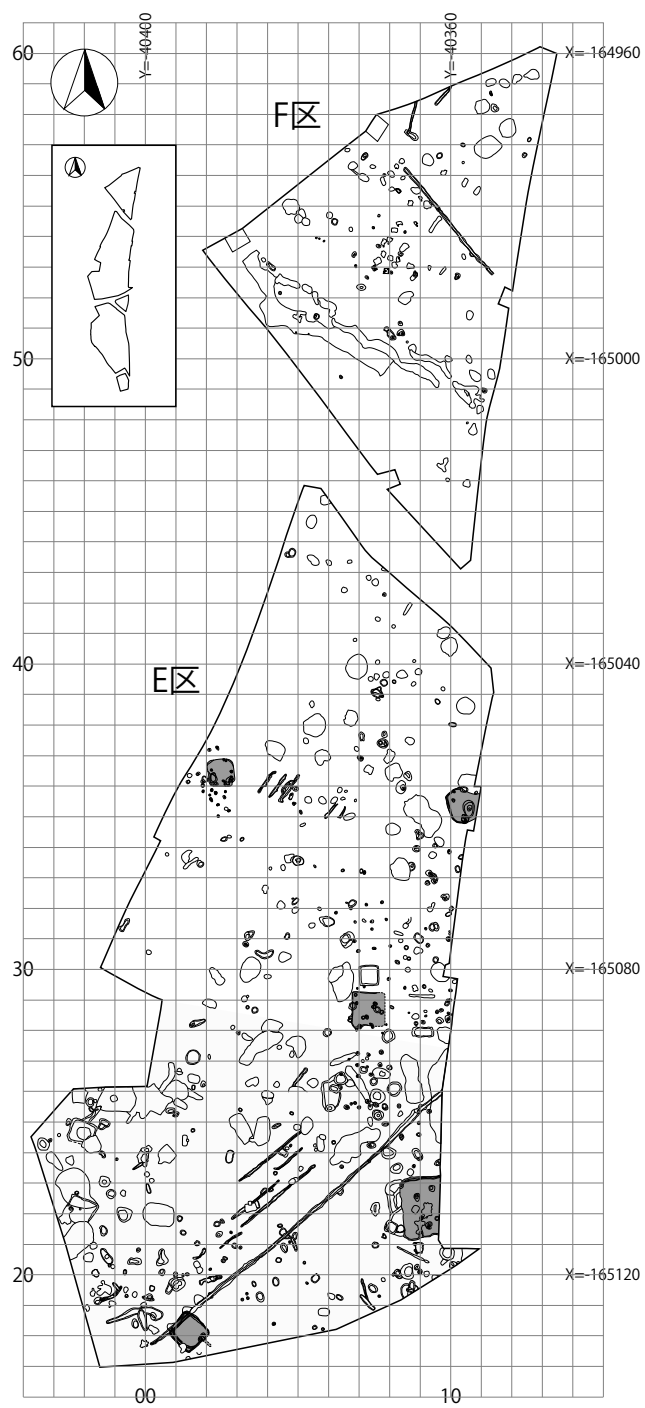


図1 遺構配置図 (S = 1/1,000)



写真2 火山灰が堆積した竪穴住居跡 (南西から)



写真1 調査区遠景 (南から)



写真3 カマド遺物出土状況 (西から)

清水遺跡 (2地区第2次)

遺跡番号 208-14
調査回数 第2次
所在地 山形県村山市大字名取字清水北
北緯・東経 140度22分25秒・38度31分6秒
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業 東北中央自動車道(東根～尾花沢)
調査面積 2,260㎡
受託期間 平成23年4月1日～平成24年3月31日
現地調査 平成23年5月9日～11月11日
調査担当者 齋藤健(現場責任者)・山田めぐみ
調査協力 村山市教育委員会・村山教育事務所
遺跡種別 集落跡
時代 平安時代
遺構 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・土坑・柱穴
遺物 土師器・須恵器・縄文土器・石製品・金属器 (文化財認定箱数:36箱)



図1 遺跡位置図 (S=1:50,000)

調査の概要

今回の調査は、昨年度に引き続き東北中央道(東根～尾花沢)の建設工事に伴って行なわれた。遺跡範囲が広いので、調査の工程上、昨年度「清水遺跡(2)」として調査を実施した部分を「清水遺跡(2地区)」、「清水遺跡(3地区)」、「清水遺跡(4地区)」の三分に分けて調査を実施した。

遺構と遺物

23年度の調査では、平安時代の竪穴住居跡6棟、掘立柱建物跡4棟、河川跡が1本が主に検出された。

竪穴住居跡 ST1、2、3、315 は4棟重複した状態で確認された。15m四方を超える大型の竪穴住居跡 ST9 は焼失住居で、炭化した骨組の木材を確認できた。また、カマドの脇からは鉄製の紡錘車が出土している。さらに、床面を掘下げると、一回り小さな竪穴住居跡が見つかり、建て替えを行っていたことが判明した。

隣接する深い竪穴住居跡 ST10 の床面からも鉄製紡錘車が出土した。それほど削平を受けていなかったため、カマドも良好な状態で残っていた。

また、竪穴住居跡 141、276 は傾斜地を造成して建てられているが、戦後の耕地整理事業により半分ほど削平を受けていた。

掘立柱建物跡は、ほぼ南北の軸方向のものとやや西に軸方向が傾くものがあり、建てられた時期に差があると考えられる。また、建物の規模もそれほど大きい物ではなく、掘立柱建物跡がまとまって建てられた形跡もないことから、竪穴住居跡と組み合わせで建てられた可能性が高い。

丘陵の谷筋から沢状の河川跡 SG266 が検出され、遺物が出土している。出土した土器の中には墨書土器も見られ、他に食器の破片や建材の一部、端材などの木製品



写真1 調査区全景 手前から清水遺跡(2)、(3)、(4)(南から)

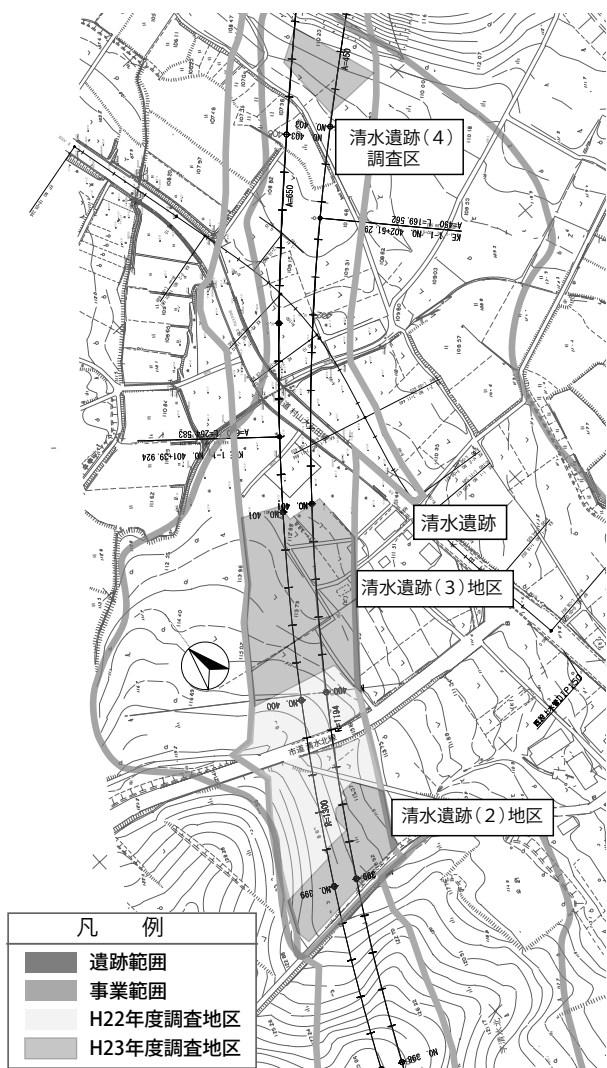


図2 調査区概要図 (S=1:4,000)



写真2 竪穴住居跡 ST141 火山灰検出状況 (南から)



写真2 掘立柱建物跡 SB347 完掘状況 (南から)
も出土している。墨書土器は 10 点ほど確認でき、「太」、「刑」の他「寺」と読めるものもあった。

河川跡や一部の竪穴住居跡では、灰白色の火山灰が厚く堆積した層を確認できた。これらは、延喜 15 年 (915 年) に出羽国に降ったとされる十和田火山由来のものと思われる。(『扶桑略記』) このことから、多くの遺構は 9 世紀が中心と考えられ、出土した遺物の特徴ともほぼ

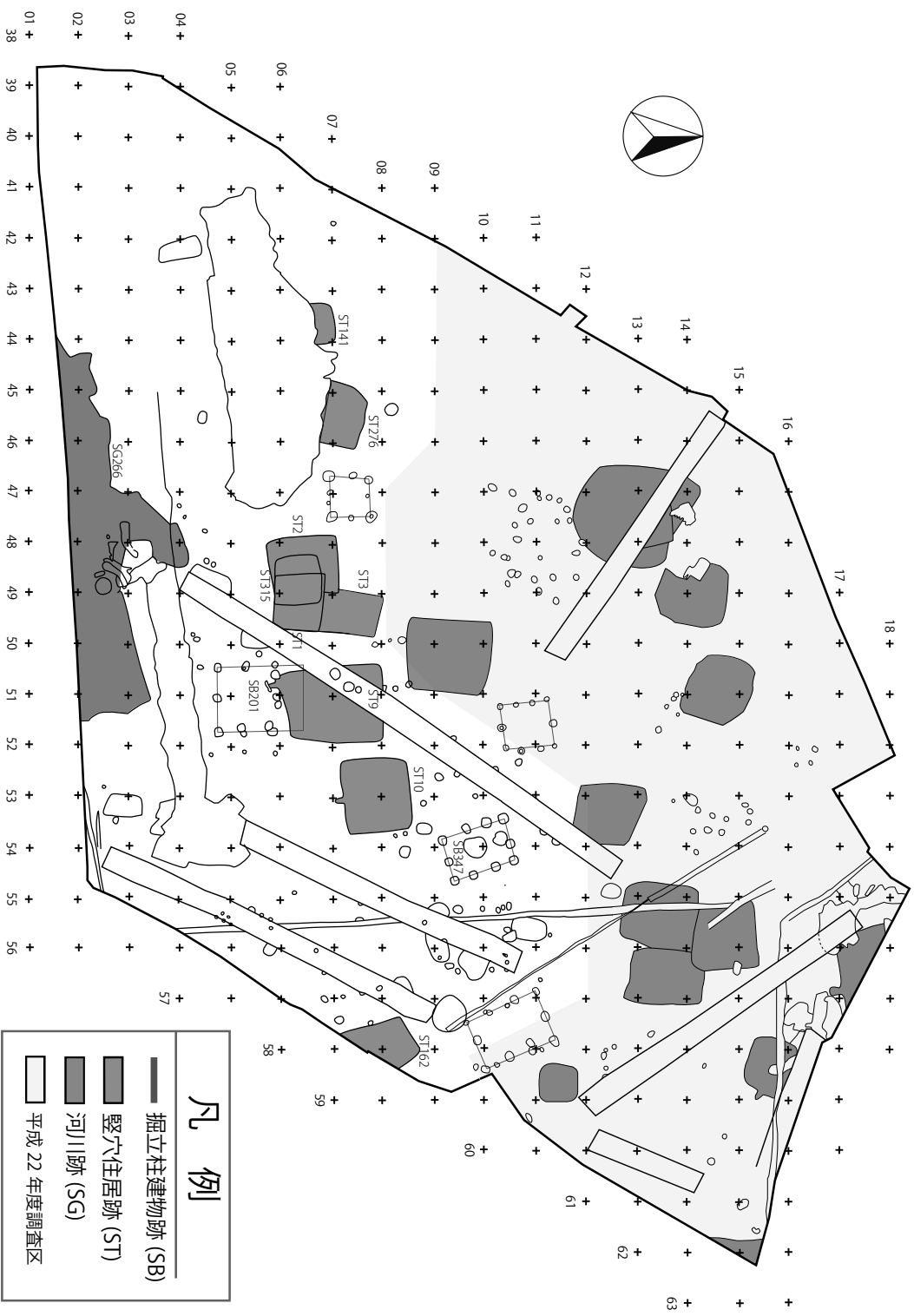


図 3 遺構配置図 (S=1:800)



写真3 竪穴住居跡 ST9 炭化物出土状況(北から)

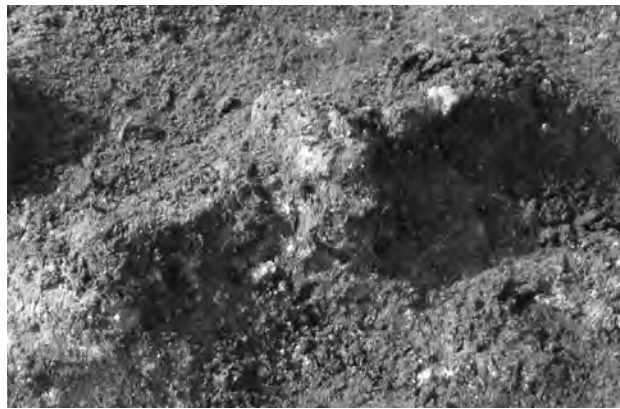


写真4 竪穴住居跡 ST9 出土紡錘車



写真5 竪穴住居跡 ST10 完掘状況(北から)

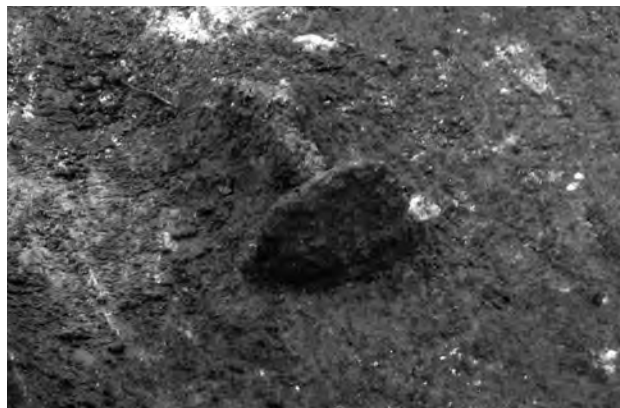


写真6 竪穴住居跡 ST10 出土紡錘車



写真7 竪穴住居跡 ST10 カマド完掘状況(北から)



写真8 河川跡 SG265 出土墨書土器「寺」カ

合致する。

まとめ

清水遺跡(2地区)は平安時代の集落跡であり、最上川右岸の丘陵地帯の斜面地に立地している。

昨年度の調査を含めると、斜面に造成された竪穴住居跡が24棟、掘立柱建物跡が6棟確認された。

竪穴住居の中には、1辺が15mを超えるような大型のものも見られたほか、昨年度検出された特殊な形をし

たものも見られる。また、鉄製紡錘車が2個出土しているほか、鍛冶遺構は確認できなかったが鉄滓も少量出土しており、近隣に工房が存在した可能性もある。

出土した遺物の特徴から、9世紀前半を中心とした時期の遺跡であると考えられる。

同一遺跡で、隣接する清水遺跡(3地区)とは密接な関係があったと思われるが、詳細に遺物や記録を観察し、年代や遺跡の性格などを検討する必要がある。

清水遺跡 3 地区

遺跡番号	平成11年度新規登録
調査回数	第1次
所在地	山形県村山市大字名取字清水北
北緯・東経	38度31分10秒・140度22分23秒
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起回事業	東北中央道（東根～尾花沢間）
調査面積	5,700 m ²
受託期間	平成23年4月1日～平成24年3月31日
現地調査	平成23年5月9日～12月2日
調査担当者	氏家信行（現場責任者）・庄司昭一・渡部裕司・濱松優介・齋藤和樹
調査協力	東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・村山東根土地改良区・村山市教育委員会 山形県教育庁村山教育事務所
遺跡種別	集落跡・古墳・城館跡
時代	縄文時代・奈良時代・平安時代
遺構	おとしあな 陥穴・竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑・柱穴・井戸跡
遺物	縄文土器・石器・土師器・須恵器・黒色土器・陶磁器・木製品（文化財認定箱数：35箱）

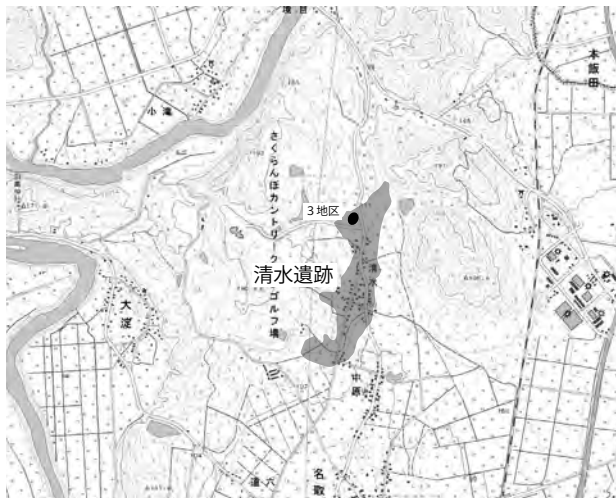


図1 遺跡位置図 (1:50,000)

調査の概要

今回の調査は、昨年度に引き続き東北中央道（東根～尾花沢間）の建設工事に伴って行った。昨年「清水遺跡(2)」として調査を行ったB区とその北側を3地区として調査を実施した。

調査の工程は、重機で表土を除去した後、人力で土を削り（面整理作業）、竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの遺構を確認し、その後、遺構の掘り下げと併行して写真撮影と図面作成などの記録作業を進めた。

遺構と遺物

縄文時代では陥穴と石器を集めていた様相を示す土坑があり、平安時代では掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、土坑、溝跡などが見つかった。

縄文時代の陥穴SK1154は調査区の南東隅に位置し、昨年調査したB区で確認された3基のおとしあなおとしあなに続くものと考えられる。また、石器を集めていた土坑からは原石を打ち欠いた剥片はくへんが150点程出土した。

平安時代の遺構は竪穴住居跡8棟確認された。出土遺物から、北側にあるST1077は奈良時代、他は平安時代と考えられる。規模は、ST1077が6.0×5.5mを測り、その他の住居は約3.0～3.5m四方の大きさである。確認面からの深さは、浅いもので15cm、深いものでは40cmを測る。ST1053にはカマドの付け換えが見られた。また、ST1140のカマドは近年の抜根により破壊されていたが、多くの遺物が出土した。

掘立柱建物跡は18棟確認され、その規模と数は、2間×2間の建物が最も多く7棟、2間×3間の建物は4棟、3間×3間、1間×2間、2間×2間の中央にも柱をもつ総柱の建物は各2棟、1間×1間の建物

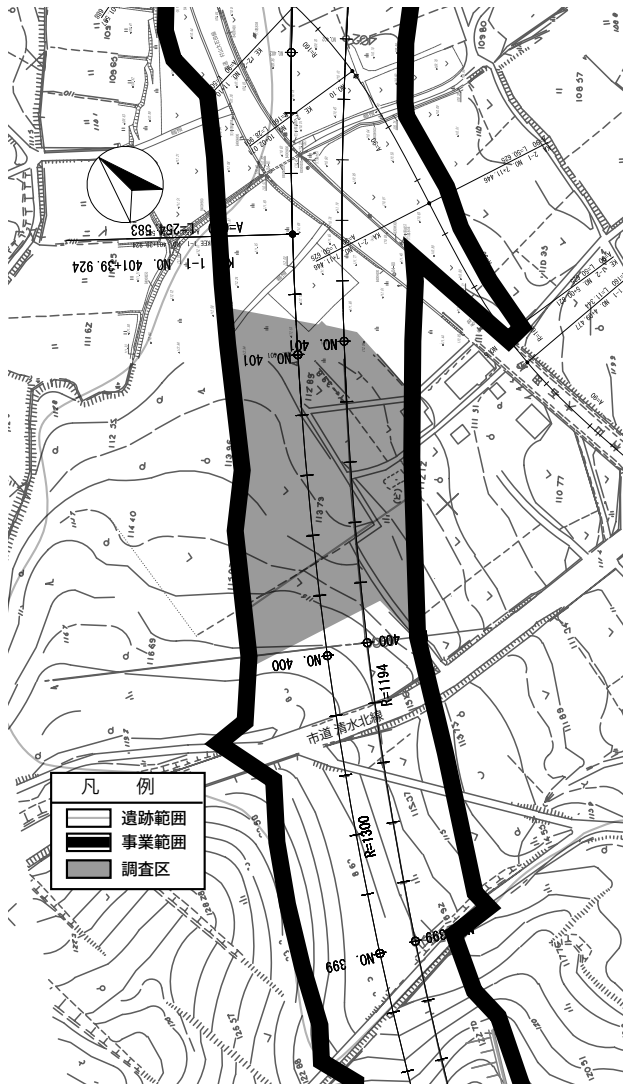


図2 調査区概要図 (1 : 2,500)

は1棟である。そのうち9棟が調査区中央の西側に集中している。この集中区域の建物は、主軸が南北方向で、柱痕跡に比較して柱穴の掘り方が大きいという特徴がみられ、中には1mを超える掘り方の建物もある。この建物群は、その規模から倉庫跡と考えられる。

井戸跡は、開口部が直径1.7mで深さは1.5mを測るSE1051が確認された。底から木製品が出土している。

土坑は直径2mを測る大型のものが7基検出され、SK1025からは多くの土器片が出土し、SK1048には915年に噴火した十和田火山のものと思われる火山灰が堆積していた。また、調査区内で屈曲する溝跡SD1054・1061や東西に横断するSD1029溝跡は建物群などを囲む区画溝と考えられる。

遺物は、縄文時代の土器、石鏃、石筥などの石器や凹石、装飾品と思われる孔が開けられた石製品と奈良・平安時代の素焼きの土器で赤褐色の土師器と窯で焼かれた



写真1 面整理作業 (南から)



写真2 遺構掘り下げ作業 (北から)

灰色の須恵器が出土した。土師器や須恵器には、蓋や坏、高台付坏、甕などが多く見られる。坏の底部の切り離し痕は回転糸切りが多数を占め、中には、黒色処理がなされた黒色土器や文字が書かれた墨書土器などもある。また、金属を精錬する際に炉へ風を送り込むフイゴ(送風機)の羽口も出土している。

まとめ

今回の調査で、約4,500～3,300年前の縄文時代の狩り場跡と9世紀を中心とする平安時代の郡衙ぐんがに関すると思われる溝に囲まれた施設跡が検出された。

平安時代の施設と思われる建物の性格は、規模が大きいもので3間×3間であることから倉庫群の可能性が高い。また、住居や建物間で大きな時期差は認められないことから、短期間に建て替えたと思われる。

名取地区には村山郡建郡時期の水運に関連する役所であると考えられる西原C遺跡が存在することなどから関係が窺われる。今後、各住居跡や建物跡などの詳細な時期、構成、変遷へんせんを検討していく。

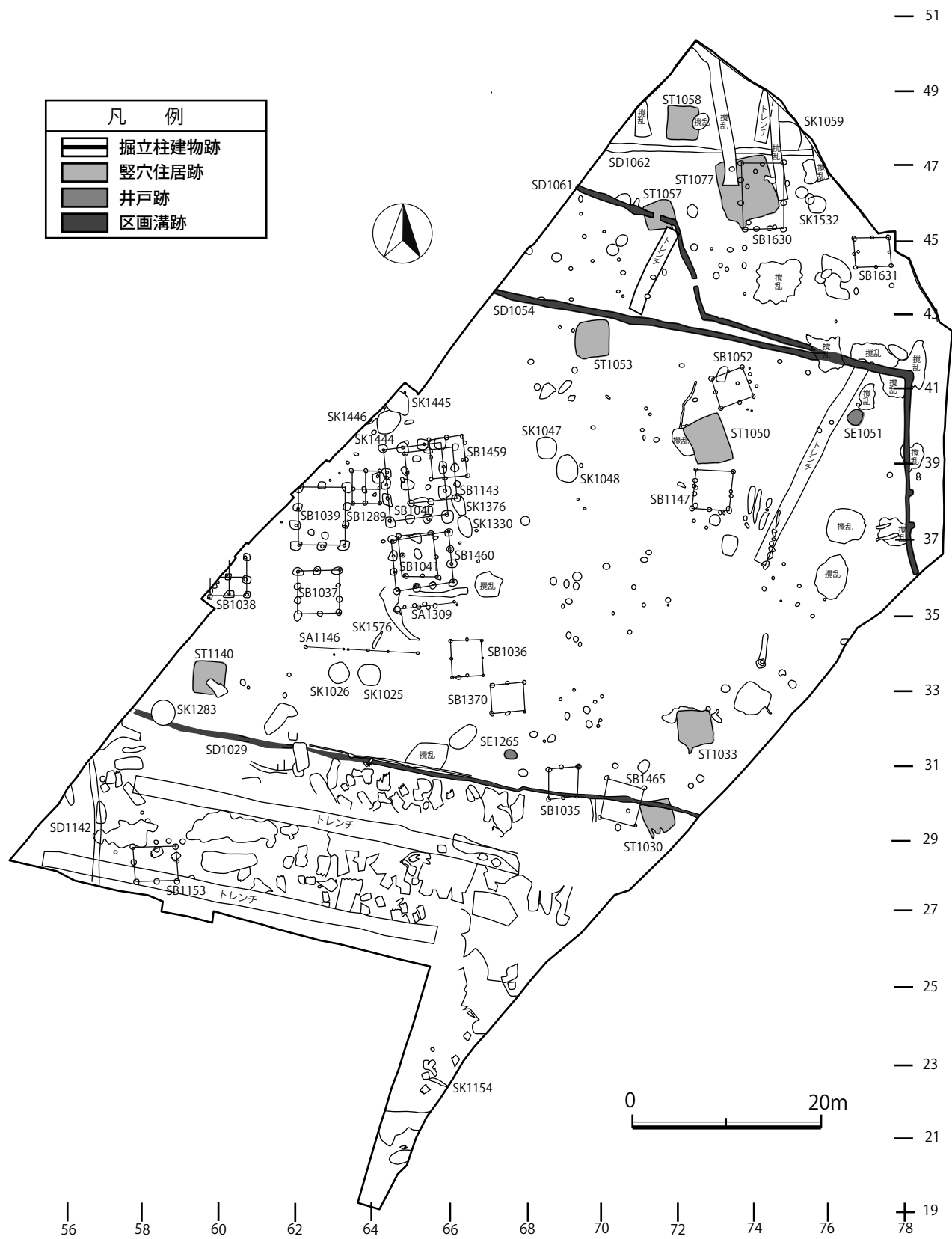


図3 遺構配置図 (1:600)



写真3 調査区全景（北から）



写真4 カマドが作り変えられた住居跡（北から）

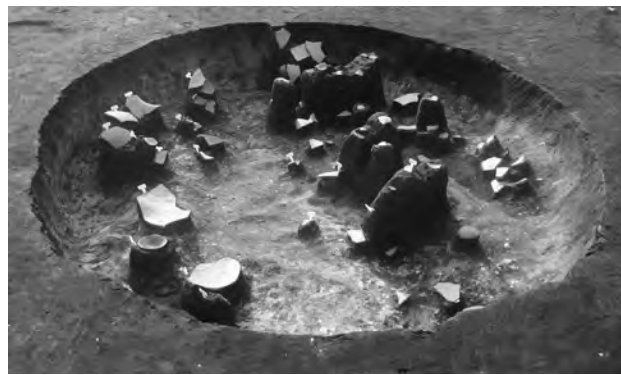


写真5 多くの土器が出土した大型の土坑（東から）

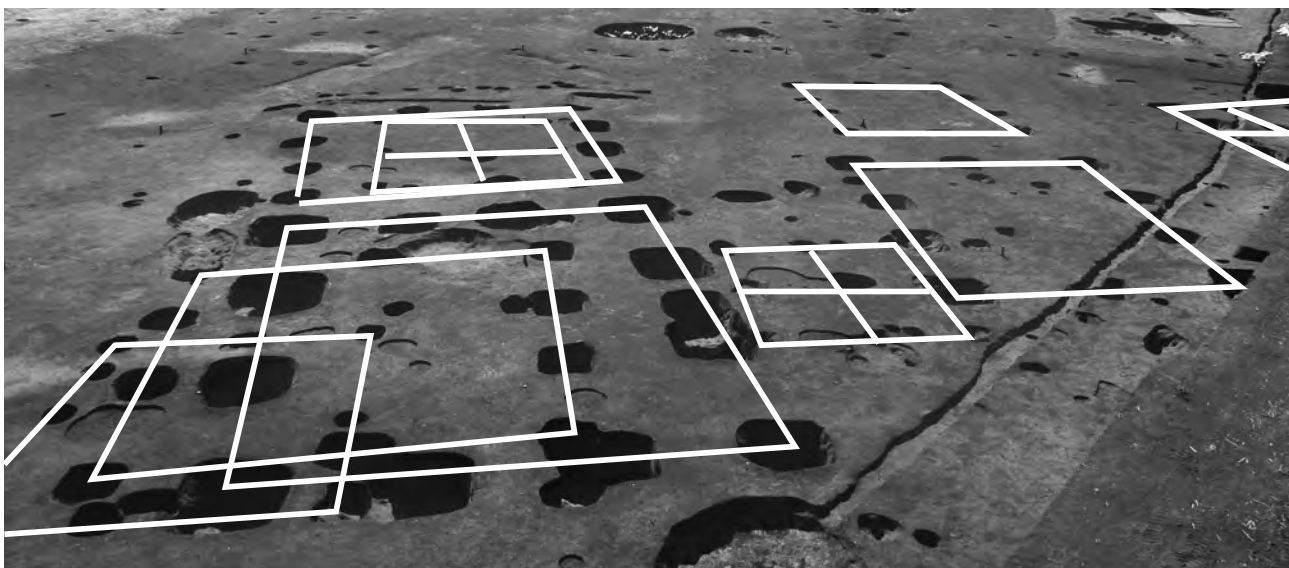


写真6 掘立柱建物跡群（北から）



写真7 石器・石製品



写真8 縄文土器



写真9 墨書土器

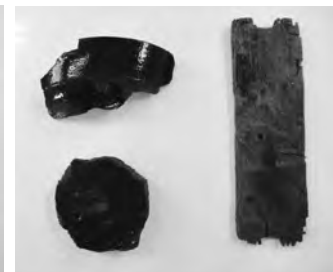


写真10 木製品

清水遺跡 (4 地区第 2 次)

遺跡番号 208-114
調査回数 第2次
所在地 山形県村山市大字名取字清水北
北緯・東経 38度31分16秒・140度22分31秒
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業 東北中央自動車道（東根～尾花沢）
調査面積 1,100 m²
受託期間 平成23年4月1日～平成24年3月31日
現地調査 平成23年7月20日～9月9日
調査担当者 渡部裕司（現場責任者）・濱松優介
調査協力 村山市教育委員会・村山教育事務所
遺跡種別 集落跡・炭窯跡
時代 縄文時代・平安時代・近現代
遺構 溝跡・土坑・柱穴・窯跡
遺物 縄文土器・土師器・石器（文化財認定箱数：1箱）

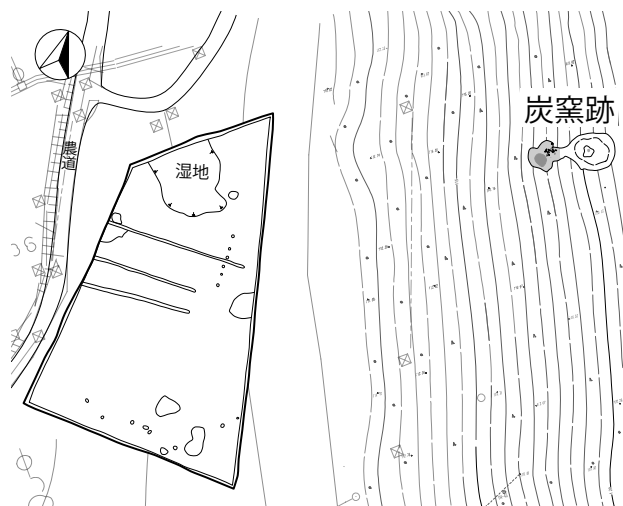


図1 遺構配置図 (1:1,000)

調査の概要

清水遺跡は、村山市東部の最上川が蛇行する右岸部に位置し、清水地区のなだらかな丘陵部上に立地する。遺跡範囲の最も北側に位置している地点を清水遺跡（4地区）と設定し、発掘調査を実施した。

調査区南側では倒木痕や小ピットを複数検出している。さらに北東部では柱列が一基見つかった。遺構に伴う遺物はないが、検出段階で縄文土器・土師器の破片と石器が出土した。石器は珪質頁岩製で、片側に刃部を持つナイフ形の石器である。



写真1 調査区全景（西から）

調査区の東側斜面では、炭窯跡が見つかった。標高は約120mを測る。窯の焚口部分の平坦部からは、窯から掻きだした炭化物や焼けた石が見つかり、さらに窯の内部では、壁面の一部分が赤く焼けている状態が確認された。この炭窯跡は、残存している形状や堆積状況から、近現代に操業していた炭窯と考えられる。

現在、炭窯跡がある山地には杉が植林されているが、植林以前は窯を築き、生活に必要な不可欠な炭の生産を行っていたことが明らかとなった。

北原^{きたはら}2遺跡(第2次)

遺跡番号 208-073
調査回数 第2次
所在地 山形県村山市大字本飯田字北原
北緯・東経 北緯 38 度 32 分 18 秒・東経 140 度 23 分 15 秒
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業 東北中央自動車道(東根～尾花沢)
調査面積 1050 m²
受託期間 平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日
現地調査 平成 23 年 5 月 9 日～6 月 30 日
調査担当者 渡部裕司(現場責任者)・濱松優介
調査協力 村山市教育委員会・村山教育事務所
遺跡種別 集落跡
時代 縄文時代
遺構 溝跡・土坑・性格不明遺構
遺物 縄文土器・石器 (文化財認定箱数: 10 箱)



図1 遺跡位置図(1:50,000)

調査の概要

遺跡は、村山市本飯田地区、JR 袖崎駅から南南西約 1 km、標高約 90m に位置する。西側に最上川の支流である沢の目川が流れ、北東に向かってなだらかな丘陵地となっている。今年度、発掘調査を行った南端部は、東・西・南側を山麓斜面に囲まれている(図1)。昨年度に実施した、試掘調査の結果に基づき、遺跡範囲の南端部、1050 m²の発掘調査を行った。

遺構と遺物

調査区中央から北西部の、溝状の遺構(SD53)およ

び土坑(SK29)、倒木痕(SX51・SX30)から縄文土器の破片が、約 250 点出土した。ほとんどが破片であり、地文のみが確認できる土器であったが、中には、縄文時代晩期に特徴的な、三叉文が施された破片が確認出来た。器種はほとんどが深鉢と考えられるが、小型鉢や鉢、注口土器と考えられる破片も出土している。これらは、ほとんどが縄文時代晩期に属するものと考えられるが、縄文時代中期の土器も出土している。また、溝跡から出土した土器と、倒木痕から出土した土器が、同一個体の可能性がある。

まとめ

縄文時代晩期頃の遺跡であると思われる。しかし、建物跡や貯蔵穴など明確な縄文時代の生活の痕はない。土器の出土状況や接合状況などから、SD53 が埋没したのちに、倒木等によって攪乱を受けた可能性が高い。また、調査区西側の河川の存在、調査区西側から遺物が集中して出土していることを鑑みると、今年度調査区のさらに西側に当該期の集落が存在している可能性は否定できない。今後、昨年度の調査成果や、土器付着炭化物の年代測定等を併せて、詳細な検討を行っていく必要があるだろう。

もりのほら 森の原遺跡 (第2次)

遺跡番号 208-048
調査回数 第2次
所在地 山形県村山市土生田字鼠田
北緯・東経 38度33分34秒・140度23分53秒
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業 東北中央自動車道（東根～尾花沢）
調査面積 3,650 m²
受託期間 平成23年4月1日～平成24年3月31日
現地調査 平成23年5月17日～9月30日
調査担当者 高橋敏（調査主任）・向田明夫
調査協力 村山市教育委員会・村山教育事務所
遺跡種別 集落跡
時代 縄文時代・平安時代
遺構 竪穴住居跡、竪穴状遺構、柱穴、溝跡、土坑
遺物 縄文土器・石器・土師器・須恵器・陶磁器（文化財認定箱数：8箱）



図1 遺跡位置図 (1:25,000)

森の原遺跡は村山市北部の最上川右岸、J R 袖崎駅の北方約 1.4 km で、大石田ゴルフクラブの南側に広がる河間低地の自然堤防上に立地し、名産のスイカやさくらんぼなどの畑地となっている。

今回の調査は、22年度調査区であった東西取り付け道路間の本線部分について実施した。調査区は南から北に向かって標高が下がり、北半は遺構・遺物の分布密度は希薄であった。標高のやや高い南半部で遺物集中地点が数ヶ所と土色変化等が確認された。遺物集中地点を掘り下げたところ、竪穴状の掘り込みが4基確認されたが、

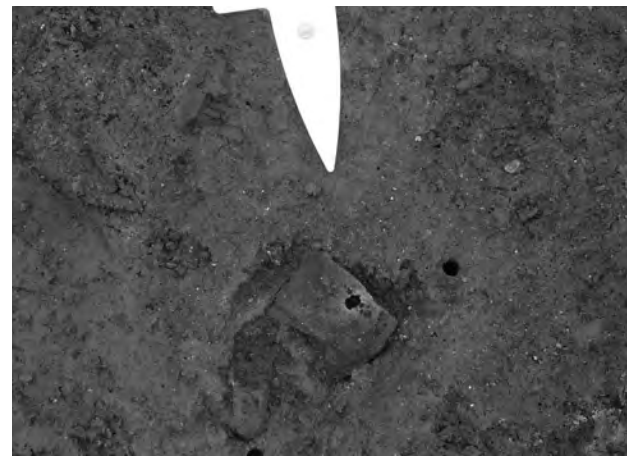


図2 SX 009 石製品（垂飾品）出土状況

住居跡としたのは現時点で1基のみである。また、幅1 m程の砂の帯が幾筋も走るのが検出されている。断面観察では、あたかも砂が湧き上がっているように見られることから、最上川対岸の大石田町横山地区で確認される幾たびかの大規模な活断層活動（地震）に由来する、噴砂あるいは液状化現象の可能性も考えられる。

遺物は風化の激しい縄文土器片が主で、他に石鏃・石匙等の石製品がある。SX 009 出土の垂飾品と考えられる石製品は、付近から接合する石材が出土していることから、SX 009 内で製作されたと思われる。

いまじゆくおおやち
今宿大谷地遺跡

遺跡番号 平成23年度新規登録
調査回数 第1次
所在地 山形県北村山郡大石田町大字今宿字大谷地
北緯・東経 38度57分30秒・140度40分18秒
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業 東北中央自動車道(東根～尾花沢)
調査面積 450㎡
受託期間 平成23年9月27日～平成24年3月31日
現地調査 平成23年10月18日～11月17日
調査担当者 渡辺和行(現場責任者)・向田明夫・後藤枝里子
調査協力 大石田町教育委員会・村山教育事務所
遺跡種別 集落跡
時代 縄文時代
遺構 土坑・柱穴・ピット
遺物 縄文土器・石器 (文化財認定箱数: 6箱)



図1 遺跡位置図(1:50,000)

今宿大谷地遺跡は、大石田町中心部から南東におよそ3.5km、尾花沢市との境界付近に位置し、周囲からは数メートルほどの高さを測る小さな丘の裾に新たに確認された、縄文時代の遺跡である。

今回の調査は、東北中央自動車道の延長工事に伴うもので、約450㎡が対象となった。現場は5段を数える段丘状になっていたが、重機により表土を取り去ったところ、段丘は近現代の盛り土によるものとわかり、当時は緩やかな斜面になっていた様子が確認できた。

遺構は、柱穴や土坑あるいは性格不明遺構が何基か検



図2 調査区全景(直上より俯瞰 上が北)

出され、土器片の集中している様子等は観察できたものの、住居跡等は確認できなかった。遺物は、縄文時代中期と思われる土器片が多数と、石皿や石鏃^{せきぞく}等の石製品数点が出土している。おそらくは生活の拠点となるべき場所が近隣にあり、そこからの流れ込み、あるいは持ち込まれたものと考えられる。

生活拠点の可能性が考えられる丘の上部(図2より北側の部分)は、残念ながら近現代の耕作地の造成により大きく削平を受けている模様で、今発掘に先立つ予備調査でも遺構の存在は確認できていない。

いなりやまたてあと 稲荷山館跡 (第3次)

遺跡番号 202-405
調査回数 第3次
所在地 山形県米沢市万世町梓山字稲荷山
北緯・東経 37度53分39秒・140度09分45秒
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業 一般国道13号米沢拡幅
調査面積 450㎡
受託期間 平成23年8月22日～平成24年3月31日
現地調査 平成23年8月25日～9月22日
調査担当者 渡辺和行(現場責任者)・伊藤大介
調査協力 米沢市教育委員会・置賜教育事務所
遺跡種別 城館跡
時代 中世・近世
遺構 堀跡・土塁・柱穴・井戸跡
遺物 陶磁器・銅銭・ガラス瓶・蹄鉄 (文化財認定箱数：6箱)



図1 遺跡位置図 (1:50,000)

稲荷山館跡は、市街地から東南方向に約6km離れた万世町梓山地区に所在する。伝承によれば長井氏の家臣であった熊坂利衛門くまざかりえもん ちくじょうの築城とされ、伊達氏の置賜侵攻の際最後まで抵抗したと伝えられている。今回、一般国道13号米沢拡幅に伴い発掘調査を実施することとなった。

本調査では土塁と堀跡が主要な遺構として認知されていたが、その他に井戸跡と考えられる土坑が1基、柱穴が21基確認された。

柱穴については建物を組める配置には至らなかったが、殆どの柱穴が南側に集中しており、調査区外の南側

に何らかの施設が存在した可能性がある。また井戸跡は柱穴が多く確認された場所の近くから見つかっている。

土塁は高さが遺構の検出面から約1.8m、幅は約5mあり、構築方法は版築工法はんちくではなく、土塁の西側に並行して堀を掘削し、その残土をそのまま積み上げる方法で築かれている。堀跡は幅約5m、深さは約80cmある。

遺物のほとんどは堀跡から出土している。年代はいずれも近世のものと考えられ、堀が中世以降継続して利用されてきたことが考えられる。



写真1 堀跡完掘状況(西から)

木の下館跡 (第4次)

遺跡番号	203-084
調査次数	第4次
所在地	山形県鶴岡市水沢字水京
北緯・東経	38度42分27秒・139度44分4秒
調査委託者	国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所
起因事業	日本海東北自動車道(温海～鶴岡)
調査面積	750㎡
受託期間	平成23年4月1日～平成24月3日31日
現地調査	平成23年9月20日～11月25日
調査担当者	福岡和彦(現場責任者)・小笠原伊之・佐藤智幸
調査協力	鶴岡市教育委員会・山形県庄内総合支庁建設部・庄内教育事務所
遺跡種別	城館跡
時代	中世・近世
遺構	曲輪跡・土坑・柱穴
遺物	陶磁器・瓦質土器・銭貨(文化財認定箱数:1箱)



遺跡位置図(1:25,000)

木の下館跡はJR羽越本線羽前水沢駅から南方約700mに位置し、西の大戸川、東を流れる大山川に挟まれた京田山(標高65m)の山上に立地する。南側を旧浜街道(水沢坂)が走る。

第4次の調査区は主郭から見て北側にあたり、国道7号や北東の方角に鳥海山を臨むことができる場所にある。今回の調査からは、第3次調査で検出した続きと考えられる7段の曲輪跡が、良好な状態で検出された。調査区端の上段から下段を縦に切ったトレンチの断面からは、切り土と盛り土をして曲輪を成形した状況を如実に

窺い知ることができた。土坑や柱穴合わせて20基程検出したが、建物跡や柵などを構成するものはなかった。

出土遺物は近世の陶磁器や瓦質土器、銭貨などがあるが、ほとんどが破片資料であるため、地域外から持ち込まれたか流れ込んだものではないかと思われる。

木の下館跡は、南側に隣接する水沢館跡とともに、日本海沿岸の越後方面～庄内平野を結ぶ、軍事上重要な場所にあったと考えられる。今回の調査区は主郭の北側にあたり、主郭への連絡路や防衛的な役割を担った場所ではないかと推察される。



調査区全景(北から)

でっぱりざかじょう
出張坂城跡 (第2次)

遺跡番号 203-019
調査回数 第2次
所在地 山形県鶴岡市下清水字水尻
北緯・東経 38度43分16秒・139度46分00秒
調査委託者 国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所
起因事業 国道7号鶴岡バイパス
調査面積 600㎡
受託期間 平成23年4月1日～平成24年3月31日
現地調査 平成23年5月9日～6月17日
調査担当者 福岡和彦(現場責任者)・佐藤智幸
調査協力 鶴岡市教育委員会・庄内教育事務所
遺跡種別 城館跡
時代 中世
遺構 掘立柱建物跡・集石遺構・溝跡・柱穴
遺物 中世陶器・近世陶磁器・近現代陶磁器・銭貨・近現代鉄製品 (文化財認定箱数:10箱)



図1 遺跡位置図 (1:50,000)

調査の概要

出張坂城跡は、鶴岡市役所から西へ約5km、大山川と湯尻川に挟まれた標高30～50mの丘陵上に築かれた平山城で、近接する山城の栗館とともに別名を「妙味水城」「清水城」とも称された。現在、本遺跡の大部分が鶴岡鉄工団地として造成されており、周辺には水田や特産品の「だだちゃ豆」の畑が一面に広がっている。

出張坂城の築城者や築城年代については不明であるが、古文書等の史料により武藤(大宝寺)氏の属城だったことが明らかになっており、全国各地で戦国武将が勢



写真1 調査区全景(東から)

力争いを繰り広げていた戦乱の世の16世紀中葉～後半には、本遺跡についても、庄内の地を巡る武藤氏と最上氏の戦いの舞台となっていた。武藤氏は、天正15(1587)年、最上氏と内通していた酒田の東禅寺城(亀ヶ崎城)城主、東禅寺筑前守(前森蔵人)らの反乱により自害へと追い込まれ、歴史の表舞台から消え去った。そして同年、出張坂城(清水城)は最上義光の子である清水義親(大蔵)らによって落城した。

すでに本遺跡の大部分は、昭和33(1958)年の国道7号開削及び昭和44(1969)年の鶴岡鉄工団地の造成

により大幅な削平を受けていたが、今回、国道7号鶴岡バイパスの4車線化工事によりさらに遺跡が削平されることから、現存する部分のうち、工事範囲に係る600㎡を対象に発掘調査を行った。なお、昨年度は、今年度実施した本調査のための地形測量調査や立木の伐採・搬出作業を行っている。

調査は、テラス状の地形4か所を調査区として設定し、それぞれA～D区と呼称した。また、土層の堆積状況確認や遺構検出のためのトレンチを丘陵の尾根上及び丘陵を縦断する部分に2か所設定し、それぞれ第1トレンチ、第2トレンチと呼称した。

遺構と遺物

遺構は、B区から掘立柱建物跡1棟、集石遺構1基、溝跡1条、柱穴を検出した。A区からは平場の下段から幅約1mの犬走り^{かすがいのみ}と想定される遺構を検出した。C・D区については全体的に削平を受けており、検出遺構は皆無である。

掘立柱建物跡(図2)は、2間×2間、梁行は1間である。大きさは、桁行が約3.5m、梁行が約1.4mを測る。柱穴の一つから17～18世紀代の唐津産の陶器片が出土したことから、建物の年代もおおむね同時期と考えられる。

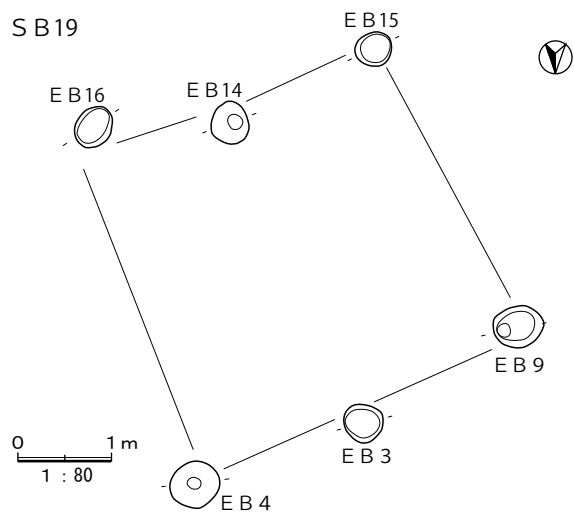


図2 掘立柱建物跡

集石遺構(写真2)は、南北を底辺、西を頂点とする、三辺が約90cmの正三角形形状の遺構で、すべて川原石が用いられている。人為的な配石をされているものの、断面を観察した結果、地中に掘り込まれた痕跡はなく、遺物の出土もなかった。遺構が形成された時期及び性格については不明である。



写真2 集石遺構(東から)

溝跡(写真3)は、長さ約3m、幅約60cm、深さ約40cmを呈する。炭化物や焼土を多く含み、大量の釘、和釘、^{かすがいのみ}鏝・鑿等の建築具、炭化した木材、石材、陶磁器片、寛永通宝や用途不明の鉄製品等が出土した。なお、出土した炭化物3点の年代測定を行ったところ、18～19世紀代との測定結果が得られた。



写真3 溝跡(北から)

その他、遺物として、遺構外から中世陶器、近世陶磁器、近現代陶磁器、瓦質土器、縄文土器等が出土したが、いずれも小破片で、器形が復元できるものは少ない。

まとめ

今回の調査区は城郭の端部であり、築城時期の遺構・遺物は極めて少数だったが、近接地で民俗行事の「モリ供養」の習俗が行われ、また、遺跡周辺は古くから「稻荷坂」と呼ばれ遺跡内に稻荷社が建立されるなど、古くから信仰の場となっており、近現代においても人々の営みにとって重要な場所だったことが明らかになった。

2. 普及・啓発・研究等業務

(1) 研修等

①全国埋蔵文化財法人連絡協議会事業への派遣

ア 総会

期 日 平成23年6月16日～6月17日
 会 場 高知県高知市（高知会館）
 派遣職員 事務局長 小笠原正道、総務係長 高桑弘美

イ ブロック活動

北海道・東北地区会議並びに同北海道・東北地区コンピュータ等研究委員会

期 日 平成23年10月13日～10月14日
 会 場 北海道江別市（北海道立埋蔵文化財センター）
 派遣職員 総務課長補佐 須賀井新人

②埋蔵文化財担当者専門研修への派遣

ア 文化財写真課程

期 日 平成23年11月27日～12月8日
 会 場 奈良文化財研究所
 派遣職員 調査研究員 草野潤平

イ 報告書作成過程

期 日 平成23年12月7日～12月16日
 会 場 奈良文化財研究所
 派遣職員 調査研究員 天本昌希

(2) 普及啓発

①普及啓発事業実行委員

企画情報室：江波 大							
センター公開事業			ふるさと考古学講座			研修講座	
子ども ミュージアム	センター 参観デー	発掘調査 速報会	遺跡を 掘ってみよう	バスで遺跡を 見に行こう	昔の火起こし を探ろう	教員対象研修	市町村担当者 研修
渡辺和行	小林圭一	天本昌希	水戸部秀樹	齋藤 健	大場正善	今 正幸	植松暁彦
高桑弘美	齊藤主税	原田英明	氏家信行	山木 巧	濱田 純	菊池玄輝	高橋 敏
尾形知哉	菅原哲文	小笠原伊之	須賀井新人	高木 茜	庄司昭一	小野健二	草野潤平
岩崎恒平	福岡和彦	高柳俊輔	向田明夫	川崎康永	伊藤大介	五十嵐萌	高桑 登
山田和史	長谷部寛	渡邊安奈	佐藤智幸	伊藤純子	板橋 龍	安部将平	渡部裕司
	吉田 満		後藤枝里子		濱松優介		齋藤和機
	松田聡子						
	山田めぐみ						

②センター公開事業

ア 「子どもミュージアム」

やまがたアトライン推進事業の「夏休み子どもミュージアムめぐり」の一環として、児童・生徒の夏季休業中に山形県内の遺跡から見つかった出土品を展示した。

期 間 平成23年7月25日(月)～8月25日(木)
会 場 (財)山形県埋蔵文化財センター
内 容 展示会：「ビーちゃんと昔の食器を見てみよう」 歴史相談室：8月15日～16日
入場者数 74名

イ 山形県埋蔵文化財センター参観デー やまがた埋文祭り2012

センターを会場に、日ごろの業務の様子を再現したり、考古学の面白さを体験を通して紹介した。

期 日 平成23年10月2日(日)
会 場 (財)山形県埋蔵文化財センター
内 容 考古学体験：整理作業体験、特別収蔵室見学、石器作り見学
体験コーナー：勾玉作り、弓矢飛ばし、ビーちゃんクイズスタンプラリー
入場者数 620名



注記体験



トレース体験



保存処理体験



展示(特別収蔵室)



勾玉作り



石器作り見学

ウ 「平成23年度発掘調査速報会」

センターが平成23年度に発掘調査を行った遺跡のうち6遺跡の調査成果の速報会を行った。

期 日 平成23年12月11日(日)
会 場 村山市甌葉プラザ
内 容 報告会：調査状況の写真をプロジェクターで紹介し、また出土品の展示も実施した。
入場者数 202名



調査遺跡の発表



出土品の展示

③ふるさと考古学講座

ア 遺跡を掘ってみよう

期 日 平成23年7月30日(土)
会 場 八反遺跡(東根市)
内 容 遺跡の発掘体験
参加者数 53名



イ バスで遺跡を見に行こう

期 日 平成23年10月29日(土)
会 場 高嶺南遺跡(現県総合交通安全センター)・東の杜資料館・小田島城跡・沼袋遺跡
内 容 遺跡・史跡や資料館をバスで巡る体験
参加者数 24名



ウ 昔の火起しを探ろう

期 日 平成24年2月18日(土)
会 場 (財)山形県埋蔵文化財センター
内 容 昔の火起しに関する講話と弓切り式・マイギリ式・火打ち石等の火起し体験を実施
参加者数 21名



④研修講座

ア 市町村埋蔵文化財担当者研修

期 日 平成24年1月20日(金)
会 場 (財)山形県埋蔵文化財センター
内 容 埋蔵文化財調査の概要や保護行政、遺跡調査の進め方、市町村の文化財保護に関する取り組みについての発表
参加者数 28名



⑤外部展示

「米づくりが始まったころー南陽市百刈田遺跡と酒田市生石2遺跡ー」展

期 日 平成23年4月16日～9月25日（休館日 毎週月曜日及び国民の祝日）
会 場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
内 容 「百刈田遺跡」「生石2遺跡」の弥生時代に関する発掘資料の紹介
（弥生土器、石製品、木製品、炭化物等と、調査に関わる写真パネル等の展示）
入場者数 7,303名

「学び舎の下に眠る遺跡ー山形西高敷地内遺跡ー」展

期 日 平成23年7月4日～7月20日（休館日 毎週日曜日）
会 場 村山総合支庁（玄関ロビー）
内 容 山形西高敷地内遺跡（4次～5次）から出土した土器、石器などの紹介
（縄文土器、土製品、土師器、須恵器等と、調査に関わる写真パネル等の展示）
入場者数 55名（説明パンフレットによる来客数）

「足元には文化財ー発掘された庄内の城跡ー」展

期 日 平成23年7月13日～9月4日（休館日 毎週月曜日）
会 場 鶴岡市立図書館2階展示コーナー
内 容 庄内地方で発掘された亀ヶ崎城跡、鶴ヶ岡城跡、藤島城跡の出土品を紹介
（陶磁器、木製品、鉄製品と調査に関わる写真パネル等の展示）
入場者数 806名

「山形のうつわー器で見る山形の歴史」展

期 日 平成23年9月6日～9月20日
会 場 山形空港2階特設ギャラリー
内 容 山形県内で発掘された縄文時代から中・近世の出土品を紹介
（縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等と、調査に関わる写真パネル等の展示）
入場者数 71名（説明パンフレットによる来客数）

「墨ー書き遺された庄内の歴史ー」展

期 日 平成23年11月21日～12月4日
会 場 庄内空港ビル3階多目的ギャラリー
内 容 酒田地区（上高田遺跡・大楯遺跡・生石2遺跡）と鶴岡地区（山田遺跡・興屋川原
遺跡・後田遺跡・横代遺跡・熊野田遺跡・東田遺跡）の出土品を紹介
（土師器、須恵器、木簡、斎串等の展示、調査に関わる写真パネル等の展示）
入場者数 25名（説明パンフレットによる来客数）

「弥生時代の人々の暮らし」展

期 日 平成24年1月16日～2月17日（年中無休）
会 場 山形県身体障がい者保養所 東紅苑・友愛センター
内 容 弥生時代の人々の暮らしのようすを示す百刈田遺跡・生石2遺跡の出土品を紹介
（弥生土器、石製品、弥生時代の人々の暮らしに関わる写真パネル等の展示）
入場者数 718名

⑥学校への協力

No.	派遣校・依頼者名	派遣職員名	実施日	実施内容	
1	高島町立高島小学校 校長 丸山信也	江波 大 松田聡子	伊藤純子	2011年4月12日	6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう 石器で野菜切り・火起こし・縄文服体験・弓矢体験
2	小国町立小国小学校 校長 佐藤健治郎	小笠原伊之	伊藤純子	2011年4月18日	6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう 火起こし・縄文服体験・弓矢体験
3	舟形町立長沢小学校 校長 渡辺 正	齋藤主税	庄司昭一	2011年4月20日	5・6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験
4	山形市立東小学校 校長 伊勢牧子	江波 大 渡部裕司	高木 茜	2011年4月21日	6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう クルミ割り・火起こし
5	新庄市立升形小学校 校長 林さえ子	今 正幸	五十嵐萌	2011年4月25日	6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう 火起こし・勾玉作り
6	鶴岡市立朝陽第三小学校 校長 渡會晃	江波 大 水戸部秀樹	伊藤純子 今 正幸	2011年4月26日	6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう 弓矢体験・火起こし
7	鶴岡市立櫛引東小学校 校長 五十嵐日佐子	濱田純		2011年4月26日	6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験
8	大江町立本郷西小学校 校長 櫻井洋子	福岡和彦	後藤枝里子	2011年4月27日	5・6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう クルミ割り・火起こし
9	鶴岡市立西郷小学校 校長 遠藤 敬	江波 大	松田聡子	2011年4月28日	5・6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう 石器で野菜切り・弓矢体験
10	東根市立長瀬小学校 校長 赤木雄一	江波 大	松田聡子	2011年5月2日	6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう 石器で野菜切り・縄文クッキー作り
11	大江町立本郷東小学校 校長 安孫子一彦	伊藤純子		2011年5月6日	6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験
12	山形市立鈴川小学校 校長 佐藤孝一	植松暁彦 伊藤純子 安部将平	江波 大 松田聡子	2011年5月9日	6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう 石器で野菜切り・火起こし・弓矢体験
13	酒田市立田沢小学校 校長 柴田公利	松田聡子		2011年5月10日	6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう 火起こし・弓矢体験
14	尾花沢市立尾花沢小学校 校長 高宮洋悦	菅原哲文 江波 大	水戸部秀樹 伊藤純子	2011年5月11日	6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう クルミ割り・火起こし
15	朝日町立大谷小学校 校長 長岡 昇	小林圭一	伊藤純子	2011年5月12日	6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう 縄文服体験・弓矢体験・縄文クッキー作り
16	河北町立谷地西部小学校 校長 児玉康子	山木 巧		2011年5月13日	6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう クルミ割り・火起こし・縄文服体験・弓矢体験
17	上市市立南小学校 校長 山口 誠	齋藤主税 江波 大 松田聡子	今 正幸 山木 巧	2011年5月16日	6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう 石器で野菜切り・クルミ割り・火起こし・弓矢体験
18	飯豊町立第二小学校 校長 高井耕次	今 正幸	伊藤純子	2011年5月17日	6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう 弓矢体験・縄文クッキー作り
19	天童市立津山小学校 校長 小松和彦	水戸部秀樹	松田聡子	2011年5月18日	6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう 火起こし・縄文服体験・弓矢体験
20	山形市立桜田小学校 校長 佐藤幸雄	菅原哲文 伊藤純子	江波 大	2011年5月19日	6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう 石器で野菜切り・火起こし・縄文服体験・弓矢体験
21	米沢市立塩井小学校 校長 渋谷洋司	伊藤純子		2011年5月24日	6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう 石器で野菜切り・クルミ割り・火起こし・縄文服・弓矢体験
22	米沢市立六郷小学校 校長 星 俊之	江波 大	山木 巧	2011年5月26日	5・6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう 火起こし・縄文服体験・弓矢体験
23	米沢市立松川小学校 校長 須崎登志	江波 大	山木 巧	2011年6月1日	6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう 火起こし・縄文服体験・弓矢体験
24	東根市立第二中学校 校長 笹原晋一	植松暁彦	松田聡子	2011年6月3日	中学部1年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう (スケッチ) 弓矢体験
25	大江町立左沢小学校 校長 犬飼藤男	伊藤純子	松田聡子	2011年6月8日	6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう 火起こし・石器で野菜切り・弓矢体験
26	山形市立東沢小学校 校長 會田以久子	江波 大 松田聡子	伊藤純子	2011年6月16日	6年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう 弓矢体験・火起こし
27	新庄市立新庄中学校 校長 山川義隆	江波 大 松田聡子	天本昌希	2011年11月8日	中学部1年社会科 「大昔の人々の暮らし」土器や石器に触れてみよう クルミ割り・石器で野菜切り・火起こし・弓矢体験

⑦来所者

ア. 見学・研修等

No.	来所者	期日	人数	内容
1	白鷹町民	2011年5月2日	1	施設見学
2	戸沢村民	2011年5月6日	1	施設見学
3	山形県立山形聾学校 6学年	2011年5月17日	2	施設見学・体験学習 (クルミ割り・火起こし)
4	山形県立米沢女子短期大学 日本史学科	2011年5月27日	59	施設見学
5	最上義光歴史館ボランティア	2011年6月6日	15	遺跡見学 (山形城三の丸跡 8次)
6	山形県立山形盲学校 6学年	2011年6月8日	2	施設見学
7	村山市立袖崎小学校 伝統文化クラブ員	2011年6月15日	11	遺跡見学 (北原 2 遺跡)
8	山形県立上山高等養護学校 1学年	2011年6月20日～7月1日	6	職場体験
9	㈲田崎緑化 牛久花壇 2級土木施工管理技士	2011年6月23日	1	施設見学
10	上市市立南中学校 2学年 上市市立北中学校 2学年	2011年7月5日～7日	3 2	職場体験
11	山形県立博物館学芸専門員	2011年7月12日～13日	1	施設利用 (写真スタジオ)
12	第41回寒河江市少年少女郷土史講座	2011年7月27日	11	施設見学・体験学習 (勾玉作り)
13	中山町 「歴史体験教室」	2011年8月4日	22	施設見学・体験学習 (勾玉作り・アンギン編み)
14	山形市立第七中学校 1学年	2011年8月8日	1	職場体験 (清水遺跡 1 地区)
15	上山明新館高校学生	2011年8月17日	1	施設見学
16	京都橘大学	2011年8月29日	1	施設見学
17	第31回鶴岡市文化財愛護研修会	2011年9月13日	36	施設見学
18	村山市立西郷小学校 6学年	2011年9月13日	48	遺跡見学 (清水遺跡 2・3 地区)
19	村山市民	2011年9月20日	1	施設見学
20	上市市民	2011年9月20日	1	施設見学
21	上山明新館高校学生	2011年9月27日	2	施設見学
22	山形県立村山特別支援学校 高等部1学年	2011年10月3日～7日	3	職場体験
23	山形市立南沼原小学校 5学年	2011年10月18日	4	施設見学・体験学習 (土器接合体験・トレース体験)
24	仙台市民	2011年10月20日	1	施設見学
25	21世紀地域文化遺産保全研究所長	2011年10月31日	1	施設見学
26	山形県立山形聾学校 社会・理科・生活部会	2011年11月22日	7	施設見学・体験学習 (火起こし)
27	上市市観光物産協会	2011年12月12日	6	施設見学
28	山寺峯の浦調査会副会長	2011年12月12日	1	施設見学
29	村山市民	2011年12月15日	3	施設見学
30	上市市民	2012年2月22日	1	施設見学

イ. 図書閲覧

No.	来所者	期 日	閲覧目的
1	山形市民	2011年4月19日、11月15日	研究の為
2	東北芸術工科大学大学院生	2011年5月19日、26日、6月28日、8月12日、10月17日、18日、21日、11月8日、29日、12月22日	修士論文研究の為
3	東北芸術工科大学学生	2011年5月26日、7月20日	卒業論文の為
4	東北芸術工科大学学生	2011年5月26日、6月20日、7月1日、20日、10月12日、31日、11月11日、17日、12月22日、2012年1月6日	卒業論文の為
5	東北芸術工科大学学生	2011年6月3日、22日、7月1日、15日、10月12日、11月11日、12月22日	卒業論文の為
6	長井市教育委員会	2011年6月28日	企画展の図録作成のため
7	東北芸術工科大学学生	2011年7月1日、15日、20日	卒業論文の為
8	東北芸術工科大学学生	2011年7月8日、25日	卒業論文の為
9	(株)デジコンキューブ	2011年7月21日、8月1日	資料調査
10	東北芸術工科大学学生	2011年7月22日	研究の為
11	東北芸術工科大学学生	2011年7月25日、10月17日	卒業論文の為
12	東北芸術工科大学準教授	2011年10月19日	研究の為
13	南陽市教育委員会	2012年1月10日	報告書作成の為
14	弘前大学学生	2012年1月11日	卒業論文の為
15	山形大学ナスカプロジェクト研究員	2012年2月9日	研究の為

ウ. 資料調査

No.	来所者	期 日	対象遺跡
1	山形県立博物館学芸専門員	2011年7月12日～13日	水木田遺跡
2	宮城県教育庁文化財保護課技師	2011年7月21日	作野遺跡第2次、上大作裏遺跡、砂子田遺跡、北柳1遺跡
3	國學院大學伝統文化リサーチセンター客員研究員 東京大学北海文化研究登呂実習施設助手	2011年8月12日	山居遺跡、空沢遺跡
4	東北芸術工科大学学生	2011年9月15日～10月7日	蕨山遺跡、東興野B遺跡
5	文化庁美術学芸課文化財調査部	2011年11月9日	お仲間林遺跡、吹浦遺跡、俵田遺跡、百刈田遺跡
6	山形県文化財保護審議会	2011年11月2日	生石2遺跡
7	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館主任 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター	2012年2月27日～28日	鶴ヶ岡城跡、藤島城跡、亀ヶ崎城跡、三条遺跡、大楯遺跡

⑧職員派遣等

No.	派遣職員名	依頼者名	派遣場所	年月日	内容
1	伊藤邦弘 菊池玄輝 草野潤平	山形県立うきたむ風土記の丘 考古資料館館長佐藤鎮雄	山形県立うきたむ風土 記の丘考古資料館	2011年5月15日	平成23年度第19回企画展展示委員会
2	水戸部秀樹	筑波大学人文社会科学研究所 教授 川西宏幸	名古屋大学文学部	2011年 6月25日、26日	前一千紀のエジプト在地社会と文化変容 ーアコリス考古学プロジェクト2010ー
3	伊藤邦弘	中山町教育委員会教育長 石川浩司	中山町中央公民館	2011年10月14日	中山町文化財保護審議会
4	高桑 登	長瀬郷土史研究会会長 青野浩一 長瀬公民館館長 齋藤好信	長瀬公民館 講義室	2011年10月30日	長瀬地区文化祭ギャラリートーク
5	黒坂雅人 高桑 登	財団法人福島県文化振興 事業団理事長	福島県文化センター 視聴覚室	2011年12月22日	平成23年度第1回遺跡調査部職員研修会 の講師
6	氏家信行	古代城柵官衙遺跡検討会 代表世話人 佐藤則之	東北歴史博物館講堂	2011年 2月25日、26日	第38回古代城柵官衙遺跡検討会の原稿執筆
7	高桑 登 水戸部秀樹	山形県立うきたむ風土記の丘 考古資料館館長 佐藤鎮雄	山形県立うきたむ風土 記の丘考古資料館	2011年2月19日	「2011年山形の考古資料検討会」の講師

⑨調査説明会

	市町村	遺跡名	開催日	遺跡種別	参加者数
1	村山市	森の原遺跡	9月25日	集落跡	40
2	東根市	八反遺跡	10月15日	集落跡	77
3	村山市	清水遺跡（1地区）	10月15日	集落跡	70
4	村山市	清水遺跡（2・3地区）	11月3日	集落跡	121
5	東根市	沼袋遺跡	11月5日	集落跡	60
6	高畠町	押出遺跡	11月12日	集落跡	50

⑩資料貸出

No.	貸出先	借用目的	貸出期間	資料名	数量
1	山形県立博物館	企画展「発見！ほりだされた山形の宝 —山形県立博物館発掘調査 40年の歩み—」への展示	2011年5月6日～ 7月5日	原の内A遺跡出土遺物	33
2	寒河江市教育委員会	「寒河江市埋蔵文化財フェア」への展示	2011年8月5日～12日	高瀬山遺跡1期、富山1遺跡、弓張平遺跡、 お仲間林遺跡、山居遺跡出土遺物	239
3	(財)仙台市市民文化 事業団仙台市富沢遺 跡保存館	平成23年度特別企画展「動物の考古学」 への展示	2011年7月5日～ 9月30日	作野遺跡、釜淵C遺跡、下叶水遺跡、 空沢遺跡出土遺物	6
4	長井市教育委員会	長井市古代の丘資料館企画展 「耳飾り展」への展示	2011年7月25日～ 11月11日	水上遺跡、思い川A遺跡、町下遺跡、 原の内A遺跡第1次、作野遺跡ほか出土遺物	126
5	テレビマンユニオン	テレビ番組での収録	2011年8月24日～26日	西ノ前遺跡出土土偶レプリカ	1
6	山形県立博物館	平成23年度企画展 「出羽国成立以前の山形」展への展示	2011年9月30日～ 12月23日	生石2遺跡、百刈田遺跡、向河原遺跡 第5・6次、川前2遺跡第1・1次ほか出土遺物	100
7	山形県立うきたむ風 土記の丘考古資料館	山形県立うきたむ風土記の丘考古 資料館企画展への展示	2011年8月31日～ 12月15日	今塚遺跡、畑田遺跡、廻り屋遺跡、 下柳A遺跡、北柳O遺跡ほか出土遺物	208
8	朝日町教育委員会	朝日町教育委員会主催「朝日町四ノ沢 八ツ目久保遺跡展」への展示	2011年9月8日～29日	八ツ目久保遺跡出土遺物	36
9	福島市教育委員会	特別展「縄文人の祈りの世界」への展示	2011年10月4日～ 12月28日	西ノ前遺跡出土土偶レプリカ	1
10	山形県立博物館	山形県立博物館にて展示	2011年10月5日～16日	高瀬山遺跡、小田島城跡ほか出土遺物	20
11	北海道開拓記念館	北海道開拓記念館40周年記念事業 「北の土偶—縄文人の祈りと心」への展示	2012年2月7日～ 5月31日	西ノ前遺跡出土土偶レプリカ	1

⑪資料掲載許可

No.	貸出先	借用目的	資料名	数量
1	株式会社アルカ	「アルカ通信」No.94「縄文の使用痕」への掲載 「文化財発掘出土情報2011, 7」への掲載	中川原C遺跡 第130図25の石器実測図、正面右側 拡大写真	2
2	株式会社小峰書店	「生態系からみるアジアの暮らし（1） 米からみる東アジア（仮題）」への掲載	上高田遺跡 遺物番号932木簡（墨書「畔越」）の 写真	1
3	山形県立うきたむ風土記の丘 考古資料館	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 第19回企画展図録「やまがたの古墳時代—最上 川流域の古墳と集落—」への掲載	梅野木前1遺跡、藤治屋敷遺跡、今塚遺跡、長表遺 跡、北小屋屋敷遺跡、下柳A遺跡、南原遺跡、馬洗 場B遺跡、太夫小屋2遺跡ほか出土遺物の写真等	39
4	株式会社アルカ	「宮城考古学」第14号への掲載	高瀬山遺跡（1期）出土遺物の遺物写真及び図面	12
5	株式会社アルカ	「東京考古」第29号への掲載	高瀬山遺跡（1期） 第348図8遺物写真、第421図 顕微鏡写真	2
6	(財)日本原子力振興財団 科学文化部	「放射線等に関する副読本」への掲載	東北地方の縄文晩期～弥生前期の土器写真	1
7	山形県立博物館	平成23年度企画展「出羽国成立以前の山形」展 のチラシ・リーフレット・図録・展示資料への 掲載	水木田遺跡、向河原遺跡、生石2遺跡、百刈田遺跡 ほか出土遺物等の写真	33
8	福島市教育委員会	特別展「縄文人の祈りの世界」図録等への掲載	西ノ前遺跡出土土偶のレプリカの写真	1
9	寒河江市教育委員会	「寒河江市史 下巻 現代編」への掲載	平野山古窯跡群第12地点遺跡調査風景（南から）、 落衣長者屋敷遺跡調査区全景（南東から）、高瀬山 遺跡2期全景（東側上空から）ほか写真	5
10	大江町教育委員会	『大江町と最上川の流通・往来の景観 保存調査 報告書』「第4章 第1節 平安時代以前の大江 町」への掲載	平野山古窯跡群第12地点遺跡 図版11 ST15完 掘状況（北西から）、図版14 C地区陥穴群完掘状 況（北東から）の写真	2
11	青森県教育庁文化財保護課 主幹	「青森県埋蔵文化財調査センター 研究紀要」 第17号における「本州北東端の磨製石斧製作— 三陸の石材環境への適応と石斧製作の解明に向 けて—」への掲載	かっぱ遺跡 第113図832・836・838、第114図 845の写真	4

⑫出版物

ア. 普及・業務報告

書名	発行年月日
埋文やまがた第47号	2011年9月30日
埋文やまがた第48号	2012年1月1日

イ. 調査説明会資料

書名	発行年月日
山形城三の丸跡8次	2011年7月11日
押出遺跡4次	2011年11月12日
山形城三の丸跡9次	2011年8月2日
沼袋遺跡	2011年11月5日
八反遺跡	2011年10月15日
田向遺跡2次	2011年6月10日
清水遺跡（1地区）2次	2011年10月15日
清水遺跡（2地区2次・3次）	2011年11月3日
清水遺跡（4地区）	2011年9月7日
北原2遺跡2次	2011年6月28日
森の原遺跡2次	2011年9月25日
稲荷山館跡3次	2011年9月22日
出張坂城跡	2011年6月16日
木の下館跡4次	2011年11月18日

ウ. 調査報告書

シリーズNo.	書名	発行年月日
195	行司免遺跡第1～4次発掘調査報告書	2012年3月31日
196	矢馳A遺跡第2～4次発掘調査報告書	〃
197	川内袋遺跡発掘調査報告書	〃
198	木の下館跡発掘調査報告書	〃
199	出張坂城跡発掘調査報告書	〃
200	高瀬山遺跡(HO)3期発掘調査報告書	〃
201	鎌倉上遺跡第2次発掘調査報告書	〃
202	山形城三の丸跡第5・7・8次発掘調査報告書	〃
203	堤屋敷遺跡第2次・下屋敷遺跡発掘調査報告書	〃
204	川前2遺跡第3・4次発掘調査報告書	〃
205	作野遺跡第3次発掘調査報告書	〃

エ. 発掘調査報告会資料

資料名	発行年月日
平成23年度発掘調査速報会	2011年12月11日

⑬ホームページ

主な項目と内容は以下のとおりです。

発掘調査遺跡一覧	発掘調査遺跡や整理作業中の遺跡の紹介
発掘調査速報	調査期間中、遺跡の状況を毎週更新して紹介
イベント情報	ふるさと考古学講座、調査説明会、外部展示、各種イベント情報の提供
センター刊行物案内	調査報告書、広報誌などの刊行物の紹介
学校教育への協力	出前授業の紹介、埋蔵文化財を活かした授業のアイデアなどの提供とその状況など
埋文やまがた	広報誌「埋文やまがた」を紹介するとともに、これまでに刊行したバックナンバーの閲覧
センター概要	センターの紹介や、情報公開制度に基づいた、センター情報の提供

(3) 情報処理

収蔵図書データベース 新収蔵図書 1,742冊のデータ入力実施（File Maker Pro使用）

(4) 調査研究発表

鉢巻式山城を考える

－ 鉢巻式山城とモリの山信仰についての一考察 －

佐藤智幸

I はじめに

山形県鶴岡市は、近世においてはいわゆる「徳川四天王」の筆頭とされる酒井氏の城下町として知られており、酒井氏入部前の中近世には武藤（大宝寺）氏（以下武藤氏）が治める土地であった。

鶴岡市をはじめ庄内地方は、中世に位置づけられる城館が多く確認されている地域としても知られている。県教委が行った中世城館に関する悉皆調査等により、鶴岡市全体では145か所の中世城館が確認されており、鶴岡市全体の遺跡数の約25%に相当する（山形県教委1997）。

しかし、これまでに遺跡の一部でも考古学的な発掘調査が行われた山城・平山城といった中世城館はそれほど多くない。さらに、山城・平山城といった城館は古文書等の文献史料も少ないため、その全容についてまだまだ不明な点が多いままである。

筆者は、平成23年度に鶴岡市下清水地区の出張坂城跡、水沢地区の木の下館跡と、2か所の城館について発掘調査を担当した（福岡・佐藤2012、福岡・小笠原・佐藤2012）。また、それら2遺跡の調査報告書を作成するにあたり、鉢巻式山城という特異な形状の山城が鶴岡市内に存在することがわかった。さらに、鶴岡市清水地区に所在する「モリの山」として有名な三森山において、「モリ供養」という民俗行事が行われており、三森山は鉢巻式山城とは近接している、ということがわかった。そこで本稿では、先学の研究に基づき、鉢巻式山城と「モリの山」信仰（モリ供養）との関連性について若干の考察を行うものとする。

なお、これまで先学諸氏が研究をまとめられ、多くの資料が蓄積しているものの、紙面の都合上、各々の研究史は割愛させていただく。

II 鶴岡市の中世城館の分布の特徴

次に、中世城館の特徴について、その概要を述べる。まず、全国的には、山城・平山城が大半であり、平城が少数である。また、酒井英一氏によれば、鶴岡市周辺における築城地の特徴として以下の4点が指摘できるという（酒井1992）。①小国街道沿いと東西方向に流れる川と交わる地域。②（越後と）庄内平野の出入口にあたる摩耶山地北麓縁辺部や田川・湯田川地区。③朝日地域の大鳥街道沿い。④浜街道沿いの鼠ヶ関、大岩川、三瀬地区。

この酒井氏の指摘からもわかるように、越後と庄内とを結ぶ街道（浜街道・小国街道・大鳥街道）や、置賜と庄内を結ぶ街道（朝日軍道）沿い、及び街道を縫うように流れる河川沿いに多く分布している。また、一部の城館は、日本海沿岸が見渡せる海岸沿いの山中に分布している。一例として、温海地域にある国指定史跡の小国城は、街道はもちろんのこと、遠く日本海まで見渡せる交通上・軍事上、重要な場所に築城されている。

以上から、四方を山・海に囲まれた庄内の地にとって、街道沿いや沿岸部は、単なる交通路としてだけでなく、敵の襲来や内外の不穏な動きに備え、軍事的に防備を固めなければならない重要な場所と認識され、そのような場所に重点的に築城されたことが考えられる。さらに、狼煙等の伝令や合図を確認できるよう、山々を挟んだ場所に築城している点も特徴といえる。

また、鶴岡市では「楯山」や「中楯」、「楯川原」、「城の下」等、その地に城館があったことを想起させる地名が現在でも多く残っているのも特徴といえる。

III 鉢巻式山城と「モリの山」

「鉢巻式」の山城は、鶴岡市湯田川字滝ノ沢にある鉢巻山館（下山館）及び鶴岡市羽黒町手向の蝦夷館に見ら

れる形態であり、提唱した酒井氏によると、「山頂を一重の空堀と土塁で囲む小規模な館址」（酒井 1997）のことである。

庄内地方では鉢巻山館・蝦夷館といった2つの城館が知られているが、その他に、山形県内においては村山市の河島山遺跡、東根市の黒鳥山遺跡が鉢巻式山城の形態を持つことで知られている。「鉢巻式」の用語であるが、内陸においては、遺跡の形状から「鉢巻式」、庄内においては、指標遺跡として「鉢巻山館」から「鉢巻山式」の用語が用いられており、用語が統一されていない。そのため、本稿では、その形状を評価し、「鉢巻式」の名称を用いることとする。

さて、鶴岡市における鉢巻式山城については、先述したとおり2か所の遺跡が知られているが、東根市・黒鳥山遺跡、村山市・河島山遺跡とともに、かつてはいわゆるアイヌ文化の「チャシ」的な性格を持つ遺跡として認識されてきた（川崎 1961a・b）。しかし、現在は、北海道に所在する「チャシ」は近世に築造されたことが明らかとなり、「チャシ」説は否定されている。そのため、中世の城館という考えが通説である。鉢巻式山城は、伊藤清郎氏によって、中世城館の形成期に位置づけられ、比較的古い段階の中世城館とする説が提唱されている。同氏は、中世的郡郷荘（荘園）が設置され、中世社会が形成されはじめる11世紀末～12世紀代の築造と想定している（伊藤 1998）。また、保角里志氏は「11世紀後半～鎌倉時代までの村領主が主導した村人の避難施設」とする説をとっている（黒鳥山遺跡発掘調査団 2002）。もっとも、これらの鉢巻式山城で古文書等の文献に記載があるものはない。また、発掘調査が行われたのは東根市の黒鳥山遺跡のみであり、同遺跡からは年代比定につながる遺構の検出や遺物の出土はなかった（黒鳥山遺跡発掘調査団 2002）。したがって、鉢巻式山城の年代比定には慎重にならなければならない。

さて、ここで筆者が目じりたいのは、これら鉢巻式山城の共通性として、遺跡あるいはその近接地が「モリの山」すなわち「霊場」として古くからの信仰の対象となっていることだ。県内にある「モリの山」としては、「庄内のモリ供養の習俗」として国の指定を受けている鶴岡市の「三森山」をはじめ、東根市の「大森山」、村山市の「河島山」が知られているが、武田正氏によれば、加

えて鶴岡市の「羽黒山」・「金峰山」もまた「モリの山」であるという（武田 1978）。

これら4遺跡を概観すると、蝦夷館は、「モリの山」以上に古来より山岳信仰（修験道）の聖地・霊場として有名な羽黒山麓の丘陵上に位置している。

鉢巻山館は、「モリ供養」で有名な三森山の近接地に位置し、三森山と対峙する鉢巻山の山上に築造されている（鉢巻山館の北方が三森山）。なお、三森山の山中には、供養が行われる堂の他、多くの石造物が建立されており、筆者の所見では、それらに加え、山中には堀切や曲輪、土塁と思われる人工的な地形が多くあり、「モリの山」と同時に中世城館の可能性もある。

河島山遺跡は、遺跡が位置する河島山自体が霊場であり、その山中に位置している。河島山は、古くから「モリの山」として信仰の対象となっており、山中には板碑や五輪塔、宝篋印塔等の石造物が数多く建立され、経筒や一字一石経も発見されている。

黒鳥山遺跡は、「モリの山」として知られている大森山と対峙した位置関係となり、黒鳥山遺跡の南方が大森山となる。大森山は中世火葬墓との指摘がある塚群や通称「タイパラ地蔵」と呼ばれる五輪塔、磨崖仏、経塚、岩窟が見られ、古くから霊場とされてきた。なお、霊場としての大森山の様相については、石井浩幸氏によって次の4つの画期が指摘されている（石井 1990）。①平安時代（11～12世紀）浄土の入口、祖霊の地。②南北朝～室町（14～16世紀）中世霊場へ発展。③近世初頭（17世紀～）檀家制度葬式仏教の民衆化。④現在霊場の忘却。

IV 「モリの山」とモリ供養

これまで「鉢巻山式」山城とされる4遺跡を見てきたが、いずれも「モリの山」として信仰の対象とされてきた場所及び、その近隣の地に所在することが共通点としている。

それでは、「モリの山」とはなんだろうか。戸川安章氏によれば、「霊格の高い祖霊に昇華する以前の死霊がとどまる山」のことであり、「死者の屍は墓地にのこるが、その魂はモリの山にこもって汚れを浄化」し、「やや清まるとさらに高い山（筆者註：金峰山・羽黒山等）にのぼり、完全に浄化すると月山や鳥海山に鎮まる」と

いう（戸川 1973）。すなわち、「在地霊場で死者の魂は浄化され、一定の歳月をへてさらに高い山などの大霊場に鎮まる」という重層構造をもつ（川崎 1992）ものである。さらに、死者の霊が羽黒山、金峰山といった「さらに高い山」を経て、月山や鳥海山等の大霊場へと鎮まる前段階である、魂が浄化される場所としての各地域の小規模な霊場（三森山、河島山、大森山等）が「モリ」あるいは「モリの山」なのである。なお、先述したとおり、武田氏のように、羽黒山等の「さらに高い山」についても「モリの山」とする考えもあり、蝦夷館についても他の3遺跡と同様に考えることができよう。なお、「モリの山」信仰に関する宗教観、他界観については、石井浩幸氏が詳しい分析を行っており、本稿における宗教観・他界観については石井氏の分析に基づくものである（石井 2003）。

「モリ供養」とは、「モリ」において死霊を現世とは隔てたあの世へと導くための、魂を浄化するための供養のことであり、鈴木岩弓氏は現在のモリ供養について「庄内地方を中心に、盆の時期にモリと呼ばれる特別な場所や寺の本堂で行われる有縁無縁供養」と定義している（鈴木 2009）。

現在、庄内一円で行われているモリ供養の中でも、鶴岡市清水地区で行われているモリ供養は特に歴史が深く、古記録から、少なくとも近世（1700年代）には行われたことがわかっている。同地区のモリ供養は現在もなお、寺の本堂ではなく、「モリの山」である三森山の山中で行われている点の特筆され、平成12年（2000）に国によって記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に指定された。清水地区のモリ供養は、曹洞宗である下清水地区の天翁寺を中心とし、中清水の桑願院、上清水の善住寺に加え、浄土真宗である中清水の隆安寺の4つの寺院により三森山の山中に建立された「優婆堂」、「閻魔堂」、「大日堂」、「観音堂」、「地藏堂」、「仲堂」、「阿弥陀堂」の7つの堂を中心に行われている。三森山の山中にはそれら堂以外に、「藤墓」と称される墓石群をはじめ、石碑や石塔、供養塔といった石造物が数多く建立されている。なお、三森山は、モリ供養の日以外に入山することは禁忌とされている。

清水地区の「モリ供養」は毎年8月22・23日に行われており、地元清水地区の住民をはじめ、多くの参拝

者が三森山へと集まる。かつては、庄内地方では知らないものはないほどに死霊信仰として有名なものであり、正月の節句や神社の祭礼をはるかに越える村中の一大まつりだったという（北村 1956）。現在は、行事の形骸化や参拝者の高齢化、会場が山中の峰々という地理的条件もあり、筆者の実感ではあるが、北村氏が述べるほど、かつての盛大さはみられない。

社会学者の嶋根克己氏は、現代の葬送儀礼の4つの機能として、①死体処理（埋葬）。②社会・経済的継承。③社会関係の修復・維持。④記憶の共有化。の4つをあげている（嶋根 2009）。同氏の論に基づけば、少なくとも、現在行われている「モリ供養」は、8月22・23日という特定の日に「有縁無縁供養」を行うことにより、希薄になりつつある人と人との社会的な関係、地域的な関係をもう一度修復・維持し、また供養される死者の記憶を、その場に居合わせた人々によって社会的・集団的に確認・想起する「死者についての集合的記憶の形成」（嶋根 2009）が行われる行事ととらえることができる。

V 小結

これまで見てきたように、鉢巻式山城とされてきた遺跡は、本当に「山城」として認識しているのか、という疑問が想起される。すなわち、本当に戦闘・防御のための施設として構築されたのか、という疑問である。すでに山口博之氏や伊藤氏等によって中世城館の築城地と霊場・信仰との関連性は指摘されているところである（山口 1993、伊藤 1998）。実際、出張坂城では、「古榎稲荷」の社が城内にあり、明治初期の絵巻物『庄内領郡中名勝旧蹟図』においてもその様相が確認できる（福岡・佐藤 2012）。また、今回の発掘調査では確認できなかったものの、出張坂城跡からは、過去に宝篋印塔が出土したとされており（秋保 1997）、木の下館跡の近接地に「城の下墳墓」と称する中世墳墓が存在したという（川崎 1958・1959）。その点については筆者も伊藤氏や山口氏の論に従うものである。

以上から、鉢巻式山城とは、筆者は次のような性格の遺跡ではないか、と考える。

鉢巻式山城が所在する場所及びその近接地は古くから「モリの山」信仰の地すなわち霊場として信仰の対象となっており、山中には信仰に伴う石造物や塚等が多く

残っている。また、仮に戦闘や防御のための施設だと考えた場合、空堀と土塁で囲っただけの設備ではあまりにも貧弱であり、曲輪や堀切等の防御に適した構造物も持たないため、物理的に戦闘や防御に適しているとは言い難い。また、その簡素な造りから、鉢巻式山城は見張りや狼煙等の合図・伝令のための施設、とする考えもあるだろう。しかし、耐久性が低いため、防御のための設備を整えた城館より早く落城することは明らかである。ましてや、霊場として信仰の対象となっている（聖なる）地やその近接地に、防御の設備が貧弱な施設を築造するだろうか。上杉謙信は、その居城だった春日山城内に毘沙門堂を建立し、戦勝を祈願したことは有名である。このように、信仰の重要性を考慮すると、鉢巻式山城とは、中世において戦闘や防御に用いた施設、すなわち城館というよりは、(モリの山)信仰に伴う何らかの施設である、という可能性も考えられるのではないかと、ということである。

河島山遺跡について、川崎氏は空堀内部の空間をアジュール（聖域）、空堀を結界ととらえている（川崎1992）が、遺跡内において、信仰に関わる儀礼・儀式が行われた可能性は十分に考えられる。実際、鶴岡市の三森山で行われている「モリ供養」では、土塁状の地形で囲まれた山中の平場に堂が建てられており、その堂を背にして供養が行われる（いつ頃から現在のような形態がとられているのか、現時点では不明である）。現時点で明確に論じることはできないが、これら鉢巻式山城とされる遺跡においても、何らかの信仰に関する儀式が行われていた可能性についても、考え方の一つとして提示しておきたい。

VI おわりに

本稿では、主として鶴岡市鉢巻山館、蝦夷館、村山市河島山遺跡、東根市黒鳥山遺跡の4遺跡について、「モリの山」信仰との関連について述べてきた。鉢巻式山城は、発掘調査事例や出土遺物、古文書等の文献が乏しく、遺跡の性格や年代については推論の域を出ないが、これ

までアイヌ文化の「チャシ」であったり、中世初期の城館とする考えがある中で、遺跡が所在する山全体や近接する山が「モリの山」とされている点に着目し、「モリの山」信仰と関連させて考えてみた。

筆者は、これまで鉢巻式山城や「モリの山」信仰については不学であったが、出張坂城の発掘調査に際し、遺跡が所在する清水地区内で「モリ供養の習俗」が行われていることを知り、その習俗に興味・関心を持った。そこで、出張坂城跡・木の下館跡の発掘調査で主任だった福岡和彦前主任調査研究員、地元鶴岡市出身である植松暁彦主任調査研究員、中世の石造物に詳しい伊藤純子前調査員、佐藤の4名で「モリ供養」を実見するため、昨年(平成23年)、供養が行われる8月22日に現地に行った。現地では「モリ供養」すなわち「モリの山」信仰の実際を如実にうかがい知ることができた。また、先述したとおり、山中に堀切や曲輪、土塁と思われる人工的な地形が多々あることから、中世城館と「モリの山」信仰がリンクしないかどうか疑問を持つに至った。報告書の執筆に際し、鶴岡市の城館の特徴的な構造として「鉢巻山式山城」という形態があり、その性格や年代の位置付けが定まっていないことがわかり、県内の他の鉢巻式の形態を持つ遺跡はいずれも「モリの山」信仰と密接に関わっていることが明らかになった。

今回は、「鉢巻式山城」に焦点を当てて考えたが、今後は、信仰と他の城館の関連性を含め、個々の遺跡と信仰について考察を行い、鶴岡市や山形県内の中世城館の特徴について、一定の方向性を導いていきたい。

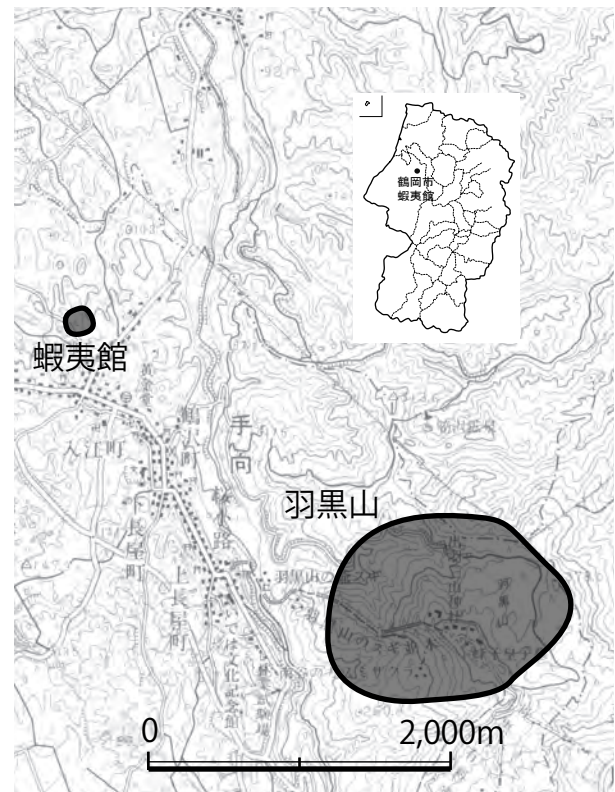
最後に、本稿を執筆するにあたり、出張坂城跡・木の下館跡の発掘調査・報告書作成においてお世話になった主任の福岡和彦前主任調査研究員、小笠原伊之調査研究員、調査期間中や報告書作成に際し、鶴岡市の中世城館について御指導・御教示を賜った、鶴岡市郷土資料館の秋保良氏、モリ供養の習俗を快く見学させていただいた下清水地区天翁寺の佐藤丈六住職、発掘調査・モリ供養の習俗と多岐にわたり御協力を賜った、下清水地区地権者の五十嵐眞一氏に、この場を借りて感謝申し上げます。

参考・引用文献

- 北村純太郎 1956 『大泉村史』 西田川郡大泉村
- 川崎利夫 1958 「羽前水沢に於ける中世墳墓資料」『山形考古』第5号
- 川崎利夫 1959 「羽前水沢附近における中世火葬墳と須恵系蔵骨の数例」『山形考古』第6号
- 川崎利夫 1961a 「^{チャン}山寨に関する諸問題（上）」『羽陽文化』第51号
- 川崎利夫 1961b 「^{チャン}山寨に関する諸問題（下）」『羽陽文化』第52号
- 戸川安章 1973 『日本の民俗 山形』 第一法規出版
- 武田正 1978 「山形県の葬送・墓制」『東北の葬送・墓制』 明玄書房
- 石井浩幸 1990 「大森山・モリノヤマ 一地域霊場の実体一」『山形県地域史研究』第16号
- 川崎利夫 1992 「中世の墓地と板碑 一村山市河島山遺跡を例として一」『山形史学研究』第25号
- 酒井英一 1992 「摩耶山地の中世城館跡分布」『摩耶山』 山形県総合学術調査会
- 山口博之 1993 「天童・霊場・領主 一天童古城はどうして舞鶴山に構えられるのか一」『天童の城と館 一城館が物語る郷土の歴史一』 天童市旧東村山郡役所資料館
- 佐藤幸作 1996 「河島山」『山形県中世城館遺跡調査報告書』第2集 山形県教育委員会
- 秋保良 1997 「出張坂城（妙味水城）」『鉢巻山館（下山館）』『山形県中世城館遺跡調査報告書』第3集 山形県教育委員会
- 酒井英一 1997 「庄内南部地区の中世城館の分布と特徴」『山形県中世城館遺跡調査報告書』第3集 山形県教育委員会
- 高橋爽元 1997 「蝦夷館（薬師沢館）」『山形県中世城館遺跡調査報告書』第3集 山形県教育委員会
- 山形県教育委員会 1997 『山形県中世城館遺跡調査報告書』第3集 山形県教育委員会
- 伊藤清郎 1998 『中世の城と祈り 一出羽南部を中心に一』 岩田書院
- 保角里志他 2002 『東根市黒烏山遺跡発掘調査報告書』 黒烏山遺跡発掘調査団
- 石井浩幸 2003 「『モリの山』信仰の研究（1） 一山形県内の事例と諸相一」『さあべい』第20号
- 嶋根克己 2009 「葬送儀礼と墳墓の社会的変容」『墓から探る社会』 雄山閣
- 鈴木岩弓 2009 「モリ供養とは何か」『庄内のモリ供養の習俗 「庄内のモリ供養の習俗」調査報告書』 山形県教育委員会
- 福岡和彦・小笠原伊之・佐藤智幸 2012 『木の下館跡第1～4次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第198集
財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 福岡和彦・佐藤智幸 2012 『出張坂城跡第1・2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第199集 財団法人山形県埋蔵文化財センター



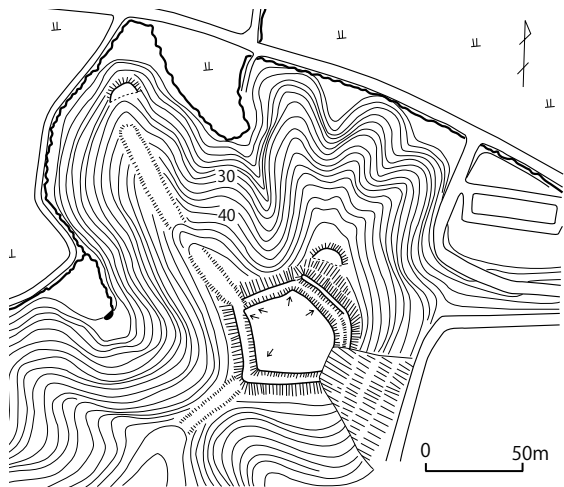
鉢巻山館遺跡位置図



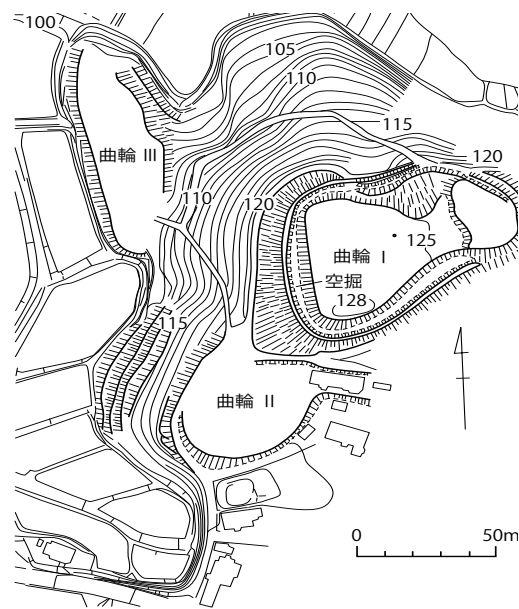
蝦夷館遺跡位置図



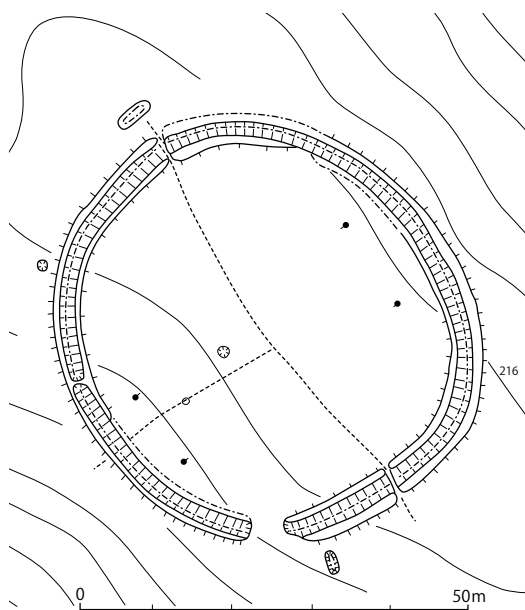
河島山遺跡・黒鳥山遺跡位置図



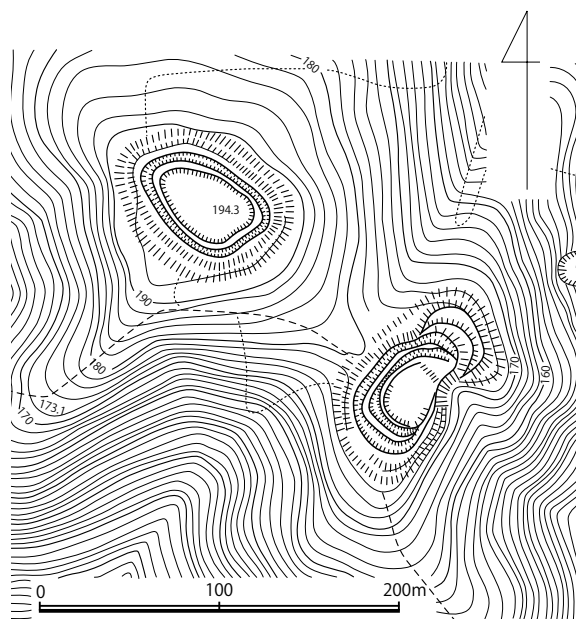
鉢巻山館縄張図
原図：秋保 1997



蝦夷館縄張図
原図：高橋 1997



黒烏山遺跡縄張図
原図：黒烏山遺跡発掘調査団 2002



河島山遺跡縄張図
原図：佐藤（幸）1996



小国城から望む小国街道



小国城から望む小国街道



小国城から望む日本海



三森山登山口



三森山の曲輪状地形



三森山の堀切状地形



三森山に建立された堂及び、平場と土塁状地形



「モリ供養」(施餓鬼供養) 風景

山形県村山市・清水遺跡(3地区)出土青白磁片について

齋藤和機

I はじめに

青みを帯びた破片の出土 小さい破片はどのようなものなのか。本稿はそのような疑問に対して、小さな破片の同定を試みたものである。

東北中央道(東根-尾花沢)延伸工事に伴う平成23年度清水遺跡(3地区)の発掘調査にて、SE1051井戸跡12層(最下層)より青みを帯びた破片が出土した。破片の大きさは、約3cm×2.5cmほどの小さなものである。共伴遺物から年代を推測しようにも、SE1051井戸跡12層での破片との共伴遺物は、9世紀第3-4四半期を中心とした土師器・須恵器であるが、上層1a層の覆土中から8世紀代と思われる須恵器片が出土している。したがって破片との共伴遺物からでは、当該破片の年代を考察することが困難である。

しかし、本調査区から1点だけ出土した破片は、精巧な文様やその破片の薄さから、稀少なものであると考えた。こうした状況より、本稿では、当該破片のような稀少性の高い破片の属性を最大限に観察し、当該破片がどのような器種で、いつの年代のものであるのか考察してゆく。

II 遺跡と出土した遺構の概要

遺跡の立地と環境 清水遺跡は山形盆地の北端にある村山市清水に所在する。遺跡は東側の奥羽山脈、西側の古代より舟運で使われた最上川と出羽丘陵に囲まれ、最上川自然堤防の東側、丘陵山麓部に位置している。清水遺跡の範囲は、東西150～380m、南北1.3kmにわたり、清水集落の大半を含む。平成22年度より東北中央道(東根-尾花沢)延伸工事に伴い、清水遺跡は最南端部より1地区(平成22年度-23年度調査)、2地区(平成22

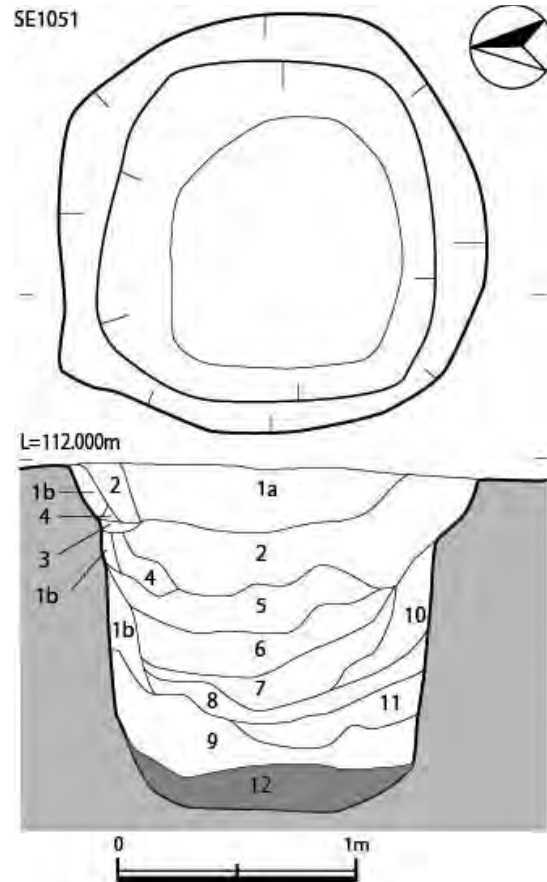


図1 SE1051井戸跡(12層から青白磁片が出土)



図2 SE1051井戸跡断面写真(東から)

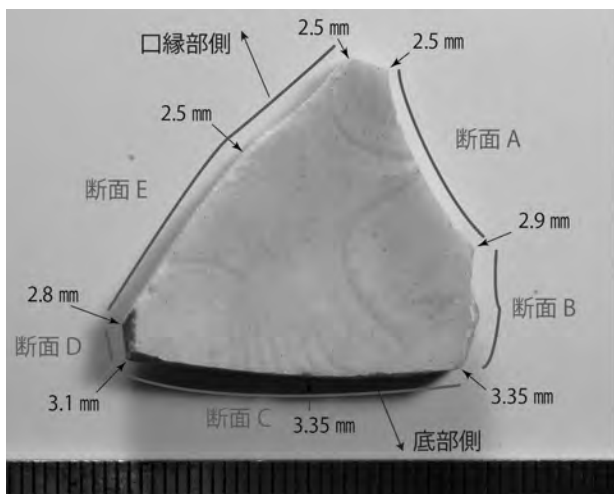


図3 青白磁片内面と各断面の厚さ

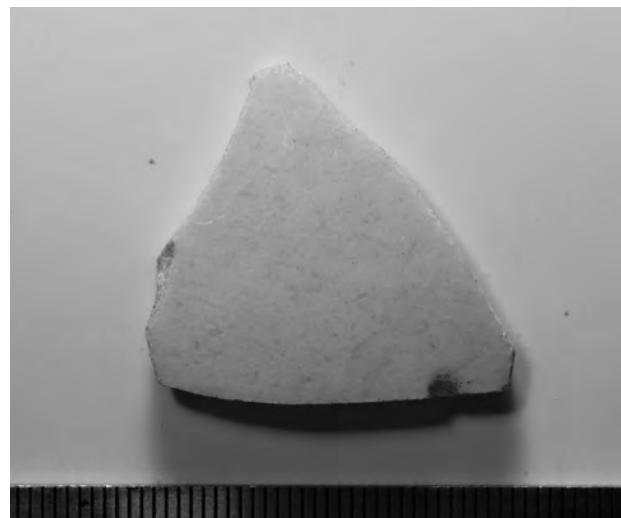


図4 青白磁片外面



図5 青白磁片断面Cの屈曲

年度－23年度調査)、3地区(平成23年度調査)、4地区(平成23年度調査)に分けられ、緊急発掘が行われた。

今回取り上げる清水遺跡3地区(調査面積5300㎡)からは、縄文時代後期から晩期にかけてと思われる陥し穴や石器の未成品と剥片の集積土坑、古代(奈良・平安期)の竪穴住居跡、土坑、井戸跡のほか、官衙関連施設と思われる掘立柱建物群、及び区画溝が確認された。官衙関連施設は出土遺物から9世紀第3-4四半期に機能していたと考えられる。

破片の出土した井戸跡 破片の出土したSE1051井戸跡は、調査区北東側の区画溝角に隣接して位置している。井戸は東西南北に約1.7mの幅を持つ隅丸方形の形をしている。深さは検出面から約1.5m。図2の堆積状況から、井戸覆土に中央部付近まで地山ブロックが多量に混入していること、前述した出土遺物の年代が堆積と逆転していることから、廃絶後に埋め戻された可能性が高いと考える。当該破片は、井戸跡の12層(最下層)から出土している(図1)。

III 清水遺跡(3地区)出土破片の観察

破片の色味 胎土と違い、陶磁器の釉調は、釉薬の調整や焼成温度によって同じ産地であってもややばらつきが生じる。つまりいわゆる釉薬の色味だけでは型式や産地の同定は困難であるが、その色味より大まかな白磁・青白磁・青磁といったカテゴリーで括ることは可能である。清水遺跡(3地区)出土の当該破片の釉薬はわずかに青

色を帯びている。図6で内面文様のヘラ描きの部分に注目すると、削られた部分に釉薬が溜り、よりいっそう青みを帯びていることがわかる。したがってこの破片に該当するものは、青白磁および青白磁的な釉調をもつ白磁類に限られることとなる。

青白磁片の位置を復元する この青白磁片がどのようなものを同定をするにあたり、まず約3cm×2.5cmの青白磁片が、どの位置にあったのかを検討する。青白磁片の文様が屈曲する内側に描かれていることから、梅瓶・合子といった貯蔵具類は検討対象から除外され、碗・皿類のみになる。復元に際して、各断面の厚さを測定し、その結果を図3に示した。計測値をみると、断面幅の最小値が2.5mm、最大値が3.35mmと、各断面で厚さが異なることがわかる。陶磁器碗・皿類は、ロクロで成形する際に底部から口縁部に向かって粘土を伸ばしていくため、底部付近から口縁部に向かって、厚さが薄くなるという製作上の原則がある。破片の断面幅の測定した結果をこの原則で検討すると、断面幅の最大値が底部側、最小値が口縁部側と考えることができる。また図5より当該破片の断面Cが両側に屈曲していることから、破片の向きは図3のようになる。

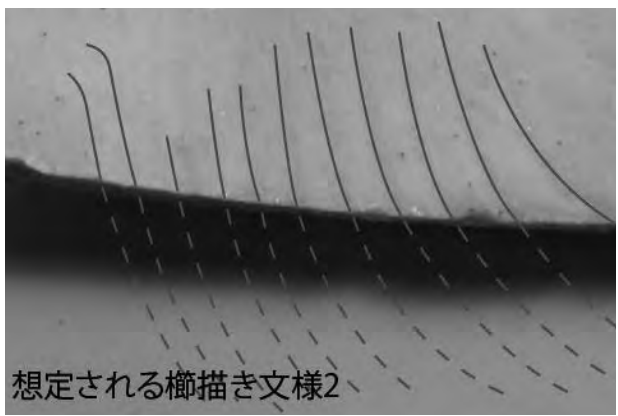
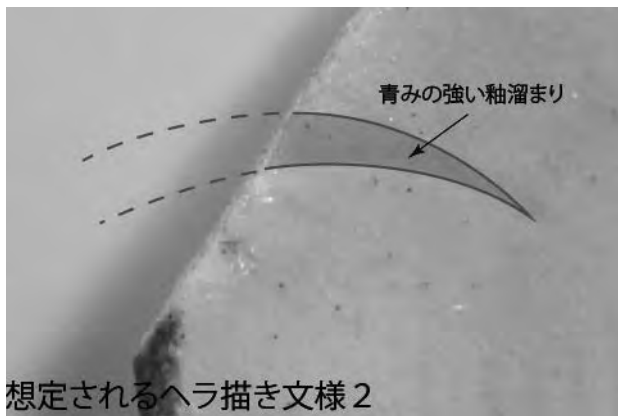
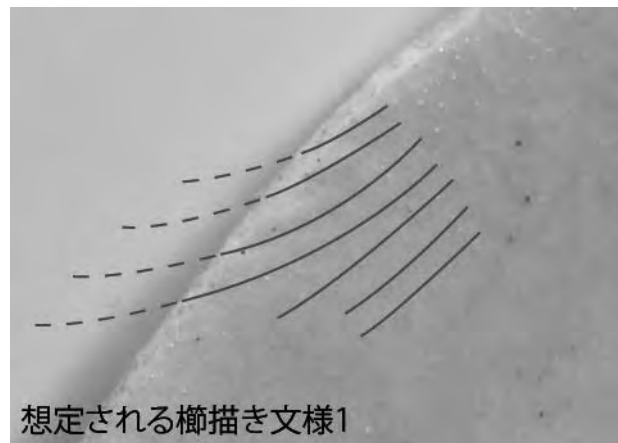
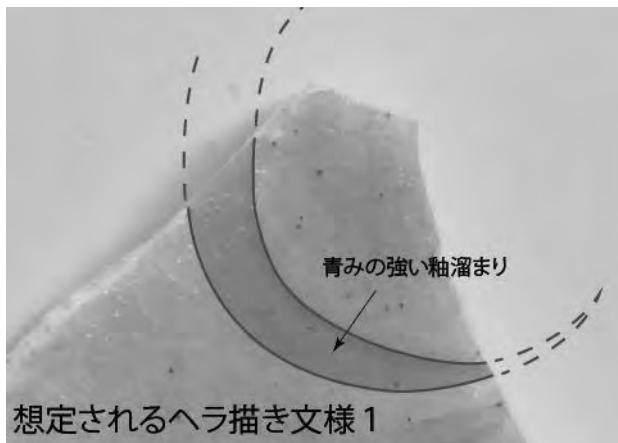


図6 想定される文様の軌跡

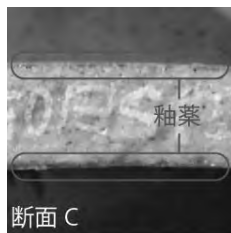
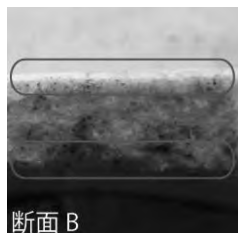
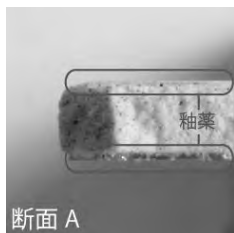


図7 各断面の釉薬の厚み

断面幅による破片の上下の向きは図3のようになったので、次に、文様より破片の位置の復元を試みる。図3より文様は破片全体にヘラ描きと櫛描きによって描かれている。当該青白磁片で確認できる文様が断片のみであるが、草花文または水波文の可能性が高い。この文様の細部を観察した結果を図6で示した。

図6より、青白磁片に施される各文様の状況から、青白磁片の遺存部位よりも文様が外へ伸びていることがわかる。さらに青白磁片の口縁部側の厚さが2.5mmと非常に薄いものである。磁器を製作する上で、内側の口縁部付近までヘラ・櫛をいれて文様を施そうとすると、その薄さでは施文時の工具による加圧によって口縁部付近が破損してしまう可能性がある。また図7より、青白磁片

各断面の釉薬をみると、釉薬は青白磁片全体に薄く均等に掛かっていることがわかる。つまり断面Aから断面Eまでの全ての断面で釉薬の厚みに差異はなく、底部に流れ込むような釉薬の厚みも見受けられない。また図4より、底部高台付近の無釉箇所も当該青白磁片には無い。したがって青白磁片口縁部側の厚さが2.5mmと薄いものであるが、前述した製作上の制限を考慮すると、ヘラ描き文様が青白磁片の上に向かって伸びていること、及び釉薬の掛かり方より、当該破片が碗・皿類の胴部中央付近にあったことがわかる。

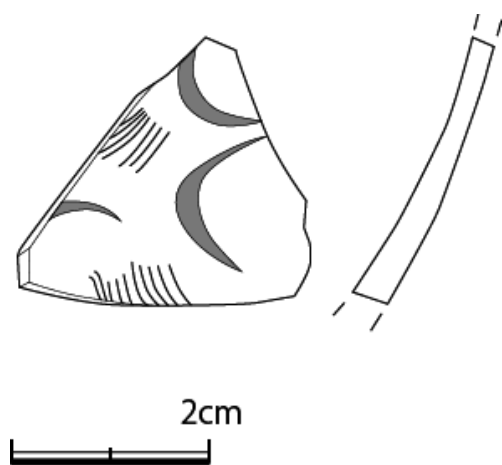


図8 青白磁片実測図

IV 器種のしぼりこみ

破片は碗か、皿か 文様が内側に描かれていることから、青白磁碗・皿類の破片であるとした。次にこの碗・皿類の2つの器種から同定を試みるが、当該青白磁片は口縁部・底部を持たないので、本稿では破片の厚さによって器種の同定を試みる。

器種同定の方法 器壁の厚さに関して、破片の断面実測図のどこの部分を照合するかによって器種が変わる。こうした恣意的な結果を避けるために本稿では、予め基準となる破片にあわせて照合箇所を規定した。具体的には、厚さによる器種検討の際に、観察で得た破片の口縁部側断面幅の最小値を、比較資料の同じ断面幅の箇所に合わせ、当該青白磁片との底部側の重なり方、厚さ、底部から口縁部への立ち上がり方の比較をする。それにより統一性と客観性を持たせることができると考えた。

比較資料の抽出 では、破片をどの資料と照合するのか。一概に青白磁碗・皿類といっても、国内出土青白磁碗・皿類の帰属年代は幅広い。大宰府白磁 XI 類を含めて 10 世紀後半から、下限は山形県内においても 14 世紀ぐらいまで少なくとも出土が確認されている。したがって、ある程度文様の有無、施文方法、器壁の薄い碗・皿類等から本稿では比較資料として抽出した。比較資料は当該破片年代考察の一つの指標とするために、国内でも青白磁の資料数が多く、編年研究と年代考察が進んでいる博多遺跡群出土資料を参考とした。

文様から検討する Ⅲ章において、青白磁片の文様の観察を行い、その観察結果より破片の内面に櫛及びへら描

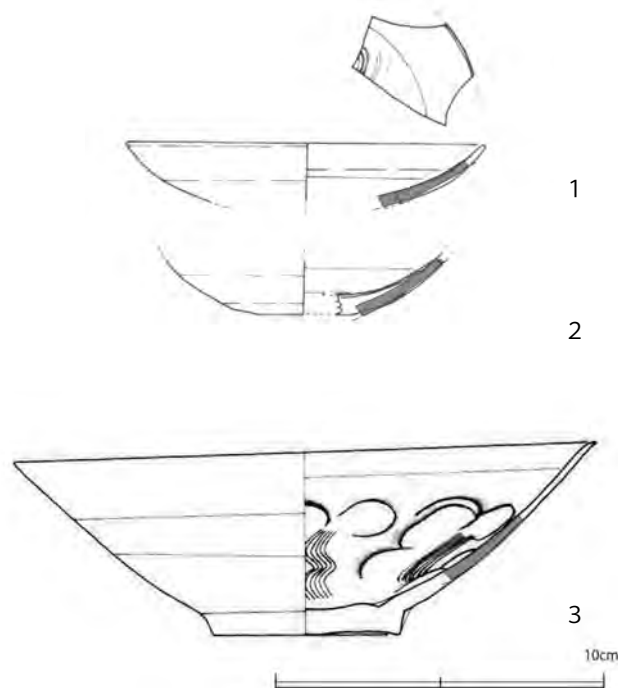


図9 博多遺跡群出土青白磁皿(1・2) 碗(3)

きにより文様が施されていることが確認された。器壁が薄く、且つこの文様が施されている青白磁碗・皿類の類例をさがして上述の資料群から探すと、図9の碗・皿類が最も類似していると思われる。図9-1の皿は、博多遺跡群第62次調査5521号土坑出土〔福岡市埋蔵文化財調査報告書第397集・1995〕の青白磁皿である。器壁は薄く、内面に当該青白磁破片と同様、櫛及びへら描きで文様が施されている。図9-2は博多遺跡群の高速鉄道関係調査(1)1号土坑(井戸)出土〔福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集・1984〕の青白磁碗である。こちらも文様は当該破片と同様である。

断面図から検討する 上述した方法で碗・皿と、当該破片の断面実測図の照合をおこない、2つの器種を検討する。図9の塗りつぶし部分が当該破片の断面実測図である。図9-1・2の皿との重なり方をみると、破片の下が皿の底部に差しかかっていることがわかる。また文様は皿の胴部中央で止まり、皿の器壁は文様の切れ目から急に立ち上がっている。次に、図9-3の碗では、破片の断面実測図は碗の文様が施されている胴部中央に収まっており、口縁部・底部にも差しかかっていない。以

上より、当該青白磁片の器種は、図9 - 3のような碗であると考えられる。

V 青白磁片の年代

清水遺跡(3地区)出土青白磁片は、図9 - 3タイプの碗類であると考えられる。ではこれらの碗類はいつ頃の年代か。博多遺跡群における同タイプの帰属年代を調べると、およそ12世紀前半以降に位置づけられるものが多い。12世紀の日宋貿易において、博多が国内唯一の集散地であったと指摘されているが(亀井1995・大庭1999)、当時の博多を宋との交易玄関口と考えるならば、清水遺跡(3地区)出土の青白磁片は12世紀前半以降と考えられる。

VI まとめ

SE1051 井戸跡の埋没 以上の観察結果から、清水遺跡(3地区)SE1051井戸跡出土青白磁片は、12世紀前半以降の青白磁碗であると考えられる。したがって最下層から当該青白磁片が出土したSE1051井戸跡は、少なくともその青白磁片の年代以降に埋没したはずである。

おわりに 清水遺跡(2・3地区)調査範囲では、12世紀代以降の中世遺物の出土は当該青白磁片1点のみであり、どのように運ばれてきたのか、またどう使われていたのか不明な点が多い。調査範囲の東側に中世遺構が存在する可能性も考えられる。今後、SE1051井戸跡がどのように埋没したのか、他の遺構とどのような関係があるのかを検証していく必要がある。また、今後博多遺跡群出土青白磁の資料を実見し、その文様と厚みを比較検討してみたい。

当該青白磁片が山形県村山市の清水遺跡(3地区)までどのように運ばれたかはまだ不明だが、12世紀の清水遺跡を含む山形県村山地方では、奥州藤原氏の影響を受けた小田島荘があった。奥州藤原氏は藤原摂関家と強い関係を結び、東北地方にある藤原摂関家の荘園経営を、任されていた。12世紀の山形県内においては、遊佐・寒河江・大曾禰・屋代荘などと共に日本海沿岸から最上川に沿って藤原摂関家の荘園が成立している。(村山市史編纂委1991) また奥州藤原氏の拠点であった岩手

県平泉遺跡群では、その存続年代の遺構から出土する青白磁が貿易陶磁の約10%を占めている(八重樫2003)。本稿で検証することはできなかったが、この青白磁片は、藤原摂関家や奥州藤原氏との関係のなかで、清水遺跡までもたらされたのかもしれない。

引用・参考文献

- 亀井明德・崔淳雨・矢部良明 1977 「宋代の輸出陶磁」『世界陶磁全集12 宋』小学館
- 横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について -形式分類と編年を中心にして-」『九州歴史資料館論集4』九州歴史資料館
- 福岡市教育委員会 1984 「福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告IV 博多出土貿易陶磁分類表 -高速鉄道関係調査(1)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集 福岡市教育委員会
- 池崎譲二・森本朝子 1984 「博多出土北宋後半期の貿易陶磁」『貿易陶磁研究 No.8』日本貿易陶磁研究会
- 山本信夫 1988 「北宋期貿易陶磁器の編年 -大宰府出土例を中心として-」『貿易陶磁研究 No.8』日本貿易陶磁研究会
- 村山市史編纂委員会 1991 「村山市史 原始・古代・中世編」村山市
- 福岡市教育委員会 1995 「博多48 -博多遺跡群第62次調査の概要-福岡市埋蔵文化財調査報告書第397集」福岡市教育委員会
- 亀井明德 1995 「日宋貿易関係の展開」『岩波講座 日本通史6』岩波書店
- 森本朝子 1997 「博多出土の貿易陶磁 -その分類試案」『博多研究会誌 No.8』博多研究会
- 大庭康時 1999 「集散地遺跡としての博多」『日本史研究』No.448
- 太宰府市教育委員会 2000 「大宰府条坊跡 XV-陶磁器分類編-」太宰府市の文化財第49集 太宰府市教育委員会
- 八重樫忠郎 2003 「奥羽における輸入陶磁器の受容」『中世奥羽の土器・陶磁器』東北中世考古学会